宮城県文化財調査報告書第137集

大貫館山館跡ほか

平成2年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

はじめに

文化財保護法では土木工事その他調査以外の目的で貝塚・古墳などの埋蔵文化財を包蔵している土地を発掘する場合、事業者に「発掘届（または発掘通知）」を文化庁長官に提出することを義務づけています。

県内の発掘届出件数は我国経済の高度成長と相埃って1970年代後半から急増し、ここ数年は年間500件を越す高水準で推移しています。こうした地域開発事業と埋蔵文化財保護との調整は、事業者との緊密な連絡と文化財に対する深い理解のもとに進めているところでありますが、道路や学校の建設、土地区画整理事業などの各種開発事業に伴う発掘調査は年々増加しております。

平成元年度に宮城県教育委員会が担当して実施した本格的な発掘調査は55件にのぼっています。本報告書はこれらのうち、国庫補助事業として実施した発掘調査、および個別に単独の報告書として刊行した遺跡を除いた、田尻町大貫館山館跡を始めとする10遺跡の発掘調査の成果の概要をまとめたものであります。県内各地の縄文時代から中世にわたる遺跡の内容を収録した本書が、地域の歴史の解明と、一般の方々の文化財保護に対する理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、これらの発掘調査にあたり種々のご協力を頂いた関係各位ならびに直接調査にあたられた作業員の皆様に厚くお礼を申し上げる次第です。

平成2年3月

宮城県教育委員会

教育長　　武 田 武 男

目　次

調査に至る経過 …… 1
大貫館山館跡 …… 5
上沼館跡 …… 33
寺池館跡 …… 47
館崎館跡 …… 63
出島貝塚 …… 75
倉崎貝塚 …… 97
花山寺跡 …… 127
小林・稗柄遺跡 …… 149
鍛冶沢遺跡 …… 153

例　言

1. 本書は平成元年度に宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査のうち、国庫補助事業、受託事業、および単独の調査報告書として別途刊行予定のものを除く遺跡の調査報告書である。
2. 開発工事等にかかる埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては、次の開発担当部局や発掘届提出者および地元教育委員会等から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

   田尻町農村環境整備課、中田町建設課、仙台地方裁判所登米支部、東北電力株式会社、宮城県石巻土木事務所・築館土木事務所・大河原土地改良事務所、迫町建設課、株式会社仙台南ゴルフ倶楽部、関係各町村教育委員会
3. 本書で使用した土色については『新版標準土色帖』(1973)を参照した。
4. 本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の 1/25,000 の地図を複製して使用したものである。
5. 本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

   調査に至る経過－進藤秋輝、大貫館山館跡－鈴木真一郎・木皿直幸、上沼館跡・寺池館跡－斎藤吉弘、館崎館跡－吉田雅之、出島貝塚－大和幸生、倉崎貝塚－阿部恵、花山寺跡－吉田雅之、小林遺跡・稗柄遺跡・鍛冶沢遺跡－菊地逸夫
6. 発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないしは地元町村教育委員会で保管している。

調査に至る経過

宮城県教育委員会が平成元年度に実施した発掘調査件数は55件に及ぶ。調査の起因としては道路建設、学校建設、急傾斜地対策事業、庁舎建設、区画整理事業など種種にわたるが、これらのうち、主体を占めるのが公共事業にかかわるものである。

本書は国庫補助事業および受託事業を除く発掘調査のうち、宮城県教育委員会が執行委任を受けた事業に係わる発掘調査のうち、単独の遺跡の報告書としては刊行し得なかった10遺跡の成果を収録したものである（表1）。

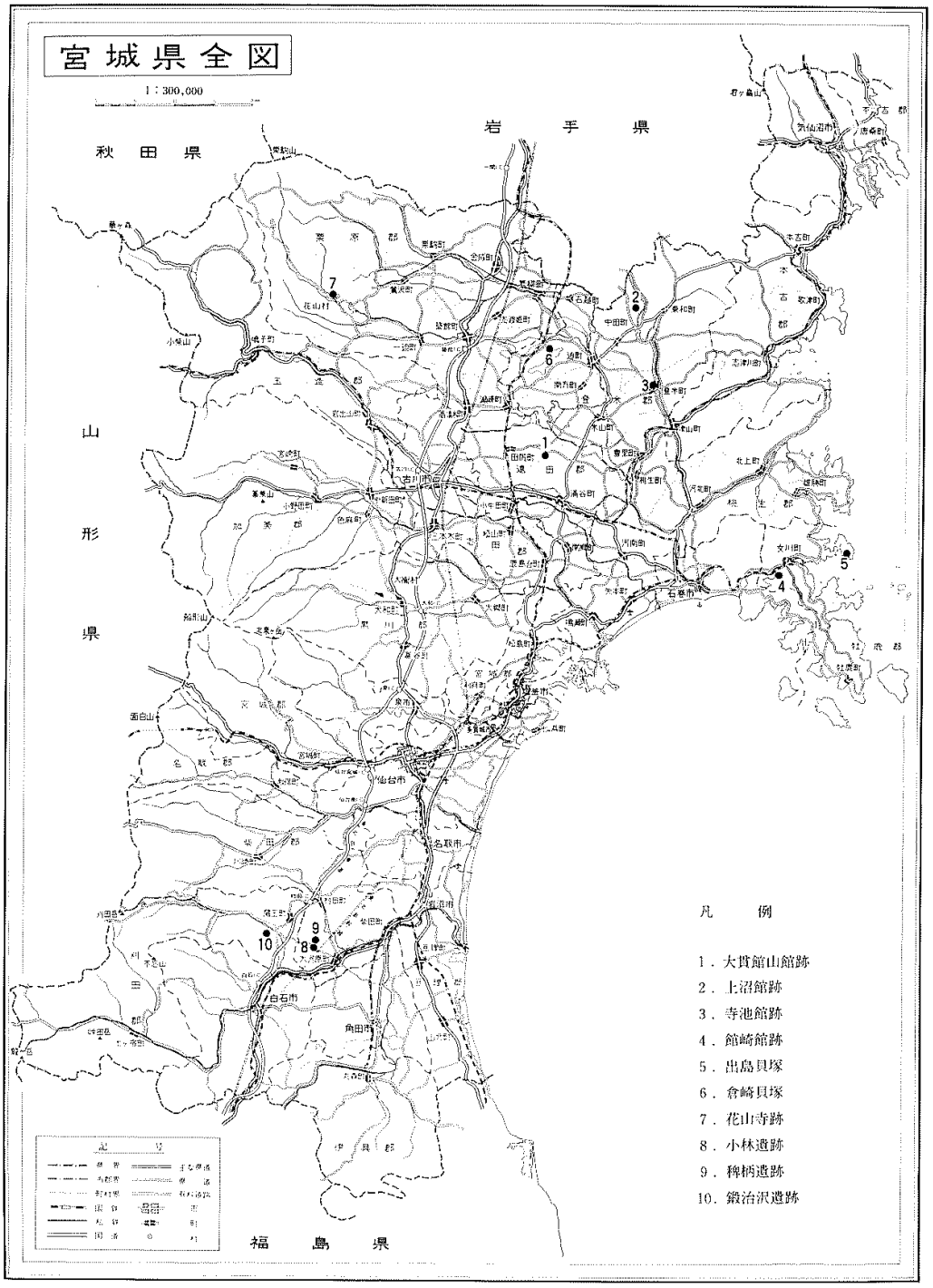
遺跡ごとに調査に至る経過と調査後の処置について概要を記せば以下のとおりである。

大貫館山館跡は遠田郡田尻町大貫字下山居に所在する縄文時代、平安時代の集落跡と重複する中近世の館跡である。昭和63年11月11日に、田尻町から農村基盤総合整備事業大貫地区曲田～宿線農道改良工事計画と館山館跡のかかわりについて、田尻町教育委員会を経由して協議があった。県教育委員会ではそれを受けて、現地を踏査し、館跡を迂回するよう協力を求めた。しかし、昭和63年度事業であることや土地の契約等が終了した段階での協議があったため、ルートの変更は不可能となった。また、当教育委員会としては計画外の発掘調査をする時間が確保できなかったため、道路建設については館跡の裾までを昭和63年度の工事として、館跡にかかる工事は翌年度の調査終了を待って実施するよう要請した。このような経緯のもとに平成元年6月1日～6月27日まで調査を実施した。その結果、土塁、空堀のほか、平安時代の竪穴住居跡を検出したが、記録だけを残し、調査終了後に工事に着手した。

上沼館跡は登米郡中田町上沼字浦沼に所在する別称千葉館あるいは鶴ケ館とよばれる中世の

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種別	開発担当部局
1	大貫館山館跡	遠田郡田尻町大貫字下山居	町道改良	町農村環境整備課
2	上沼館跡	登米郡中田町上沼字浦沼	町道改良	町建設課
3	寺池館跡	登米郡登米町寺池桜小路	裁判所改築	仙台地方裁判所
4	館崎館跡	牡鹿郡女川町針浜字針浜	鉄塔建設	東北電力
5	出島貝塚	牡鹿郡女川町出島字別当浜	県道建設	石巻土木事務所
6	倉崎貝塚	登米郡迫町新田字倉崎	町道改良	町建設課
7	花山寺跡	栗原郡花山村本沢字御堂	県道改良	築館土木事務所
8	小林遺跡	柴田郡大河原町小山田字小林	ゴルフ場造成	一般開発業者
9	稗柄遺跡	柴田郡村田町大字沼田字稗柄	ゴルフ場造成	一般開発業者
10	鍛冶沢遺跡	刈田郡蔵王町大字曲竹字青ノ茎	広域農道建設	大河原土地改良事務所

表1　収録遺跡発掘調査一覧


宮城県全図
1：300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
仙台市
石巻市
名取市
白石市
角田市
凡例
1．大貫館山館跡
2．上沼館跡
3．寺池館跡
4．館崎館跡
5．出島貝塚
6．倉崎貝塚
7．花山寺跡
8．小林遺跡
9．稗柄遺跡
10．鍛冶沢遺跡

第１図　報告遺跡位置図

館跡である。昭和 63 年 7 月 21 日に中田町長から町道浦沼線整備事業計画と上沼館跡のかかわりについて協議があった。工事の内容は館跡の南裾をめぐる現在ある道路を 4.5mに拡幅するものであった。現道の西半部 150mは郭の斜面に寄せて盛土する工法であったが、東半部は郭の平坦部をかなり削平するものであった。突然の協議であったことで、調査期間の捻出が難しかったため、協議により、昭和 63 年度により、昭和 63 年度は西半部の 150mについて発掘調査を実施することにして、9 月 27.28 日に発掘を実施した。今年度は東半部の発掘調査であり、平成元年 6 月 26 日～29 日に実施した。その結果、現道下で土塁を発見した。そのうち、削平が大規模に及ぶ部分についてはルートを変更させていただいた。工事は調査終了後に着手した。

寺池館跡は登米郡登米町寺池桜小路に所在する近世の城跡である。平成元年 7 月 5 日に仙台地方裁判所登米支部の庁舎新設工事と本遺跡とのかかわりについて協議があり、9 月 6 日から 26 日にかけて事前調査を実施したものである。調査終了後、遺構面から 60 ㎝の盛土を施して遺構に損傷を与えないように処理したうえで、庁舎を建設することになった。

館崎館跡は牡鹿郡女川町字針の浜に所在する。東北電力(株)はこの館跡の頂上に設置されていた送電用鉄塔を移設することになった。それに伴う確認調査を 7 月 24 日から 28 日まで実施した。

出島貝塚は牡鹿郡女川町出島字山下、余子浜に所在する縄文時代前期と後期の貝塚である。平成元年 7 月 25 日に宮城県石巻土木事務所は一般県道出島線の新設工事計画を立案し、ルートの選定の前段階として、本貝塚とのかかわりについて前向きの協議があった。それを受けて、当教育委員会は女川町教育委員会と共に 8 月 1 日から 8 日まで確認調査を実施した。調査の結果、予定の路線の一部が遺物包含層にかかったため、協議のうえ、遺跡をできるだけ避けてルートが選定された。工事施行が平成 2 年から 15 年であるため、工事に着手していない。

倉崎貝塚は登米郡迫町新田字倉崎に所在する縄文後期から晩期初頭の貝塚である。昭和 63 年 1 月 9 日に迫町が実施していた農村総合整備モデル事業集落道整備事業で貝層がでているとの連絡があり、9 日に現地を視察した。その結果、貝層が 20 ㎝ほどの厚さで、長さ 7mにわたって露出していた、調査の日程が確保できなかったため、貝塚を除いた範囲の工事を昭和 63 年度に実施し、貝塚の部分は平成元年度の調査が終了した後に、保存に留意して工事することになった。以上の経緯から平成元年 5 月 8 日から 18 日まで事前調査を実施した。

花山寺跡は栗原郡花山村本沢字御堂に所在する平安時代末の藤原時代に浄土思想の普及に伴って流行した浄土庭園をもつ臨池伽藍と推定されている寺院である。昭和 53 年度の調査で御堂と南前面の地およびそれに架かった橋などを検出している。昭和 61 年 6 月 3 日に宮城県築館土木事務所より一般国道 398 号線改良事業計画と花山寺跡のかかわりについて協議があった。計画路線が本寺院の最大の特徴となっている池跡と中島をかけて、伽藍中枢部を東西に横断す

るものであったため、協議の結果、このルートをやめて、現道を拡幅することになった。調査は道路拡幅にかかる住宅の移転先を対象にして、平成元年 10 月 11 日から 16 日まで実施した。

小林遺跡は大河原町小山田字小林に所在する縄文時代中期から晩期の遺跡である。また稗柄遺跡は村田町沼田字稗柄に所在する古代の遺物散布地である。（株）太平洋クラブによるゴルフ場建設予定地内を平成元年 4 月 20 日に分布調査したところ、これらの遺跡が建設予定地内に延びることが判明したため、10 月 2 日から 6 日まで確認調査を実施したものである。

鍛冶沢遺跡は刈田郡蔵王町曲竹字鍛冶沢に所在する縄文時代早期、中期、弥生時代、古代の集落遺跡である。宮城県農政部は仙南広域農道新設計画を策定し、そのルート選定で昭和 61 年以来、県教育委員会と協議してきた。その最終段階で規模が大きくしかも、遺物の分布が濃密な本遺跡の扱いが大きな問題となった。そこで、遺跡のうち、最も遺構が希薄な地点を選定することを目的に平成元年 8 月 22～25 日に確認調査を実施した。調査の結果、遺跡の中央部で遺構の分布が認められない区域があったため、この地にルートを選定していただいた。

おおぬきたてやまたてあと
大貫館山館跡

目　　次

Ⅰ　はじめに ･･･ 7
Ⅱ　館跡とその周辺の歴史をめぐって ･････････････････････････････････････ 9
Ⅲ　検出された遺構と出土遺物 ･･ 14
　1　基本層位 ･･･ 14
　2　土塁・空堀 ･･ 14
　3　平場で検出された遺構 ･･･ 16
Ⅳ　まとめ ･･･ 23
　引用・参考文献 ･･･ 24
　写真図版 ･･ 25

調 査 要 項

遺跡の名称：大貫館山館跡　おおぬきたてやまたてあと
遺 跡 記 号：ＬＴ　宮城県遺跡地名表掲載番号 38039
所　在　地：遠田郡田尻町大貫字下山居
調 査 面 積：1500 ㎡
調 査 期 間：平成元年(1989 年)6 月 1 日～6 月 27 日
調 査 主 体：田尻町教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
　進藤秋輝　白鳥良一　真山悟　阿部博志
　須田良平　鈴木真一郎　木皿直幸　大和幸生
田尻町教育委員会社会教育課
　泉沢和穂　佐々木四郎
調 査 協 力：田尻町農村環境整備課
調査参加者：相沢貞子　伊藤京一　伊藤睦子　入生田ツイ子　斎藤ヨシノ
佐々木きよえ　佐藤研一　佐藤定雄　白戸健志　白戸しづ子
高泉良　新田真一　米谷恭司　松岡せつ子　山ノ内勝子(敬称絡)

おおぬきたてやまたてあと
大貫館山館跡

Ⅰ　はじめに

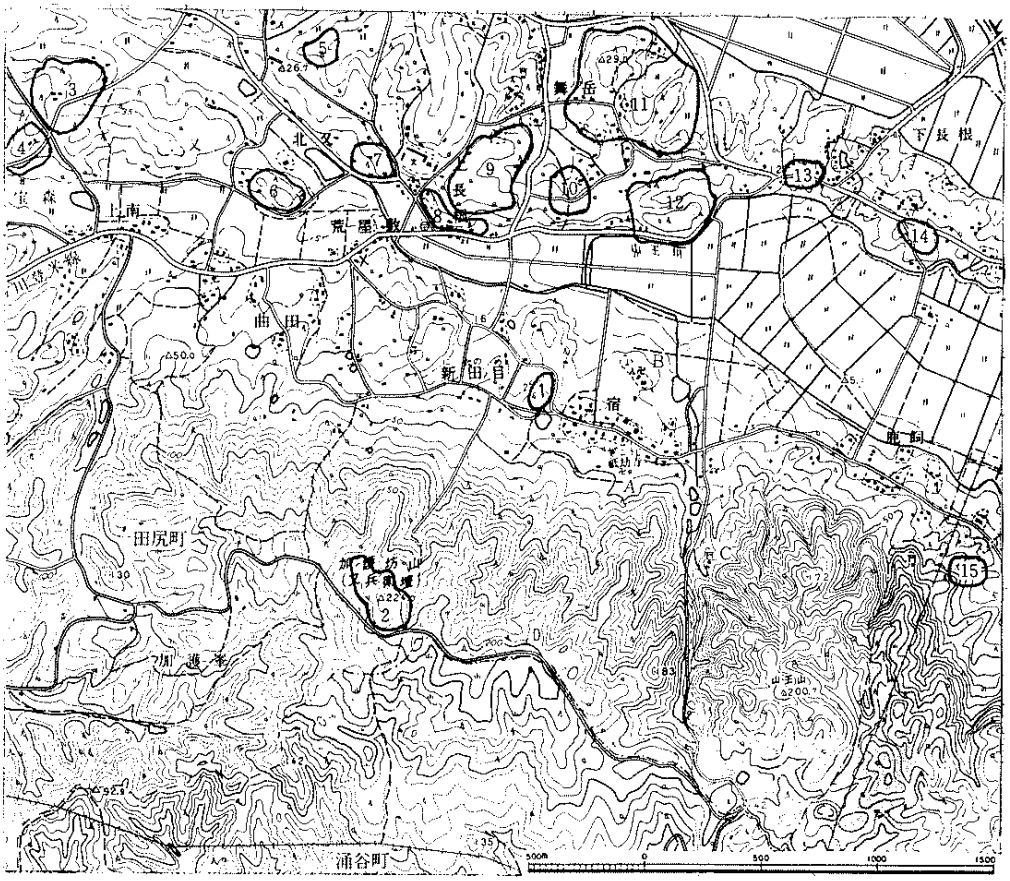
〔調査に到る経過〕　田尻町では農村環境整備事業の一つとして町道建設を進めている。その計画路線の一つに下曲田・下山居線も含まれているが、路線の一部である大貫字下山居の地点は中近世の館跡として知られている大貫館山館跡の範囲内であった。そのため、遺跡の保護等について原因者である田尻町農村環境整備課と宮城県教育庁文化財保護課・田尻町教育委員会社会教育課の間で幾度か協議がなされ、路線が遺跡にかかる部分を発掘調査して記録にとどめることになった。そして、田尻町教育委員会が発掘調査の主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が調査を担当することになった。平成元年5月22日に調査区の下見をし、6月1日から発掘調査を開始した。

〔遺跡の位置と環境〕　大貫館山館跡は館ノ越館ともよばれ、宮城県遠田郡田尻町大貫字下山居に所在し、加護坊山の北麓の低い丘陵上に立地している。大貫地区は田尻町の北東部、標高224mの加護坊山（又兵衛壇）山頂からその北麓一帯にかけての地域で、急傾斜の山麓斜面とそれに続く標高20～40mのなだらかな低丘陵、および狭い沖積地とからなる。下曲田から宿にかけての山麓部の丘陵は標高20～50mで、いくつかの沢によって複雑に開析されており、丘陵裾部が尾根状に北側へ張り出している。そのうち、下山居から宿越下に張り出す裾部は比較的標高が高いので、眺望もよい。これを、下曲田から宿へかけての道筋が南北に二分しており、館跡はこの南側を占めている。

〔調査の経過〕　今回の調査区は館跡の南縁部分1500㎡である。発掘調査は6月1日から始まり、まず重機によって近年の盛土や表土の除去を行った。その結果、平場では整地層2か所、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1列、土壙3基ほか溝跡、ピット群を発見し、直ちに精査を行った。6月9日から平場の遺構群の精査・実測に並行して、空堀の堆積土の掘り上げを始めた。空堀の規模が予想外に大きく、土塁の調査も含めて完掘したのは6月22日であった。調査も終了に近づいた6月24日には現地説明会を開催し、100名余の見学者があった。その後、整地層や竪穴住居跡など遺構のダメ押し作業を行った。さらに、土塁の外側に空堀などがめぐっていないか確認するため、土塁西外側下の道路路線敷部分を発掘したが、遺構は検出されず、館跡周囲にみられる溜め池も後世のものであることがうかがわれた。一切の野外調査が終了したのは6月27日である。

遺構などの平面図の実測については、調査区の範囲・土塁・空堀・整地層の範囲等は平板測量で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等については遣り方測量で行い、また適宜断面図を作成した。

併せて、遺構等の写真撮影も行った。遣り方測量の基準杭については、路線杭No.85(国土座標X＝-155.77020Y＝24.70250)を原点とし、その原点と路線杭 No.84(X＝-155.76840Y＝24.68250)とを結ぶ直線を東西の基準線として、3m方眼を設定した。東西の基準線に直交する南北の基準線の方向はG.N－5°－Wである。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	大貫館山館跡	江戸時代	10	篠越南遺跡	古代
2	加護坊山園家安楽寺跡	古代～中世	11	大森遺跡	縄文（前・中）・古代
3	弁慶館跡（館山館跡）	中世	12	上長根遺跡	縄文・古代
4	下北山遺跡	縄文・古代	13	下長根遺跡	平安時代
5	利仙遺跡	縄文時代	14	大貫四嶋遺跡	弥生・古墳（後）
6	大貫古館跡	中世	15	山王沢貝塚	縄文（中～晩）
7	北又境遺跡	古墳時代	A	祇劫寺（臨済宗）	江戸時代以降
8	上長根遺跡	古代	B	長水寺（曹洞宗）	江戸時代以降
9	舞岳南遺跡	縄文（前）・古代	C	日枝神社	江戸時代以降

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　館跡とその周辺の歴史をめぐって

〔周辺の遺跡〕　田尻町には旧石器時代から中近世まで各時代の遺跡があり、縄文時代の長根貝塚、中沢目貝塚、恵比須囲遺跡や奈良時代の木戸瓦窯跡、新田柵跡擬定地、涌谷町天平産金遺跡などは著名である。本遺跡周辺でも特に丘陵上に遺跡が分布している。縄文時代の遺跡には大森遺跡(前・中期)や舞岳南遺跡(前期)、涌谷町山王沢貝塚(中～晩期)などの集落跡や貝塚があり、弥生時代・古墳時代の遺跡は前者に比べ少ないが大貫四嶋遺跡があるほか、大沢地区の大沢横穴古墳鮮などの横穴墓もある。古代の遺跡には竪穴住居跡が発見されている上長根遺跡、土錘が数多く発見されている下長根遺跡がある。近隣には前述の城柵や造瓦・産金の遺跡がみられるほか、加護坊山や箆長山の山岳寺院が開かれるのもこのころである。中世には館跡が多く築かれ、大貫地区にも大貫古館跡、弁慶館跡がある。大沢地区の鶴城跡は百々館跡とも呼ばれ、室町時代ごろから大崎氏輩下の百々氏の居館となっていたが、葛西大崎一揆後には伊達氏の領地となったため、家臣の涌谷伊達(武石亘理)氏が亘理から移り住んでいる。

〔江戸時代の大貫村〕　当時の大貫村の範囲は今日の大字大貫の地域に同じである。村のかなりの部分は涌谷伊達氏の拝領地で、それも百々館居城時代からの知行地だったらしい。本遺跡周辺にも湧谷伊達氏に関連する史蹟が数多い。村の中心集落である宿は涌谷伊達氏の家臣（註1）の集落といわれ、ほぼまっすぐな道路の両側に短冊状の地割が残っている。また、宿を挟んで対称の位置にある祇劫寺・長水寺の二寺も家中寺である。とくに、祇劫寺は涌谷伊達氏三代定宗の隠居所跡（註 2）に建てられたといわれ、定宗夫妻の墓碑もある。宿は道路を境にして南側(祇劫寺＝隠居所側)が上屋敷(字名)、北側が下屋敷である。以上のことからこの集落はかなり計画的な配置がなされたものとみることができよう。その年代については、不明であるが、定宗が大貫村に隠居したのが慶安 4 年(1651)、祇劫寺の開創が承応 2 年(1653)、長水寺が天正年中(1573～1592)東陽寺(註3)として開かれた後寛文11年(1671)に長水寺として中興されていることを考慮すれば、17 世紀半ば頃の年代が考えられる。

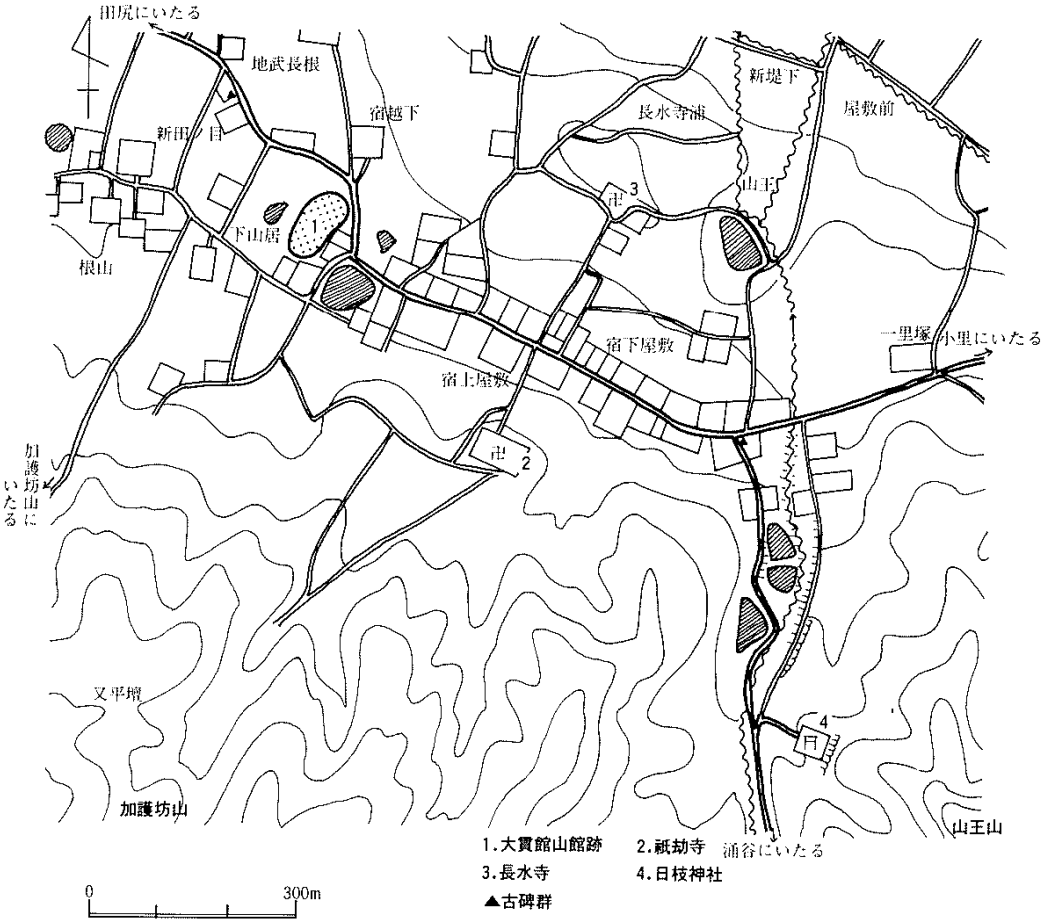
往来の便についてみると、「御分領中御村分絵図」（元禄 15 年(1702)、宮城県図書館蔵)には小塩から大貫を経て小里にいたる脇街道が朱線で描かれてある。実際にどの道筋であるか絵図ではわからないが、地形の状況や「宿」「一里塚」の地名、当時の路傍にあったとみられる近世の石碑群の位置(図中▲印)から「宿」を通る道筋(通称涌谷街道)がその脇街道と考えられる。涌谷への道筋は、涌谷伊達氏初代元宗の墓所跡とつたわる日枝神社の脇の山王沢を通る道筋(通弥山王道)と伝えられている。

（註 1）「涌谷武鑑」（安政 4 年(1857)、涌谷町史所収）では涌谷伊達家家中のうち、在郷に居住するものの禄高、居住地が家格別に書き出してある。大貫村には禄高 1 貫文以下の家臣が多く、その姓氏を見ると、現在宿及びその周辺に居住している家々の姓氏と共通するものがか

なりみられ、興味深い。在郷居住の家臣は新田開発の積極的に行っている場合が仙台藩では通例である。ここでも、切伏堤など溜め池を設けて盛んに開発を行った結果、村高が約 200 年の間に 850 石(正保郷帳)から 1164 石(天保郷帳)へ増加している。

(註 2) 伊達治家記録義山公巻之八によると、承応元年(1652)正月には仙台藩二代藩主伊達忠宗が定宗の隠居所を訪ねている。

(註 3) 東陽寺とは原田家の菩提寺の寺名である。しかし、今日登米郡東和町米谷に現存する東陽寺の来歴をみても、同寺が大貫にあったという記録はなく、長水寺前身の東陽寺と原田家の関係も不明である。



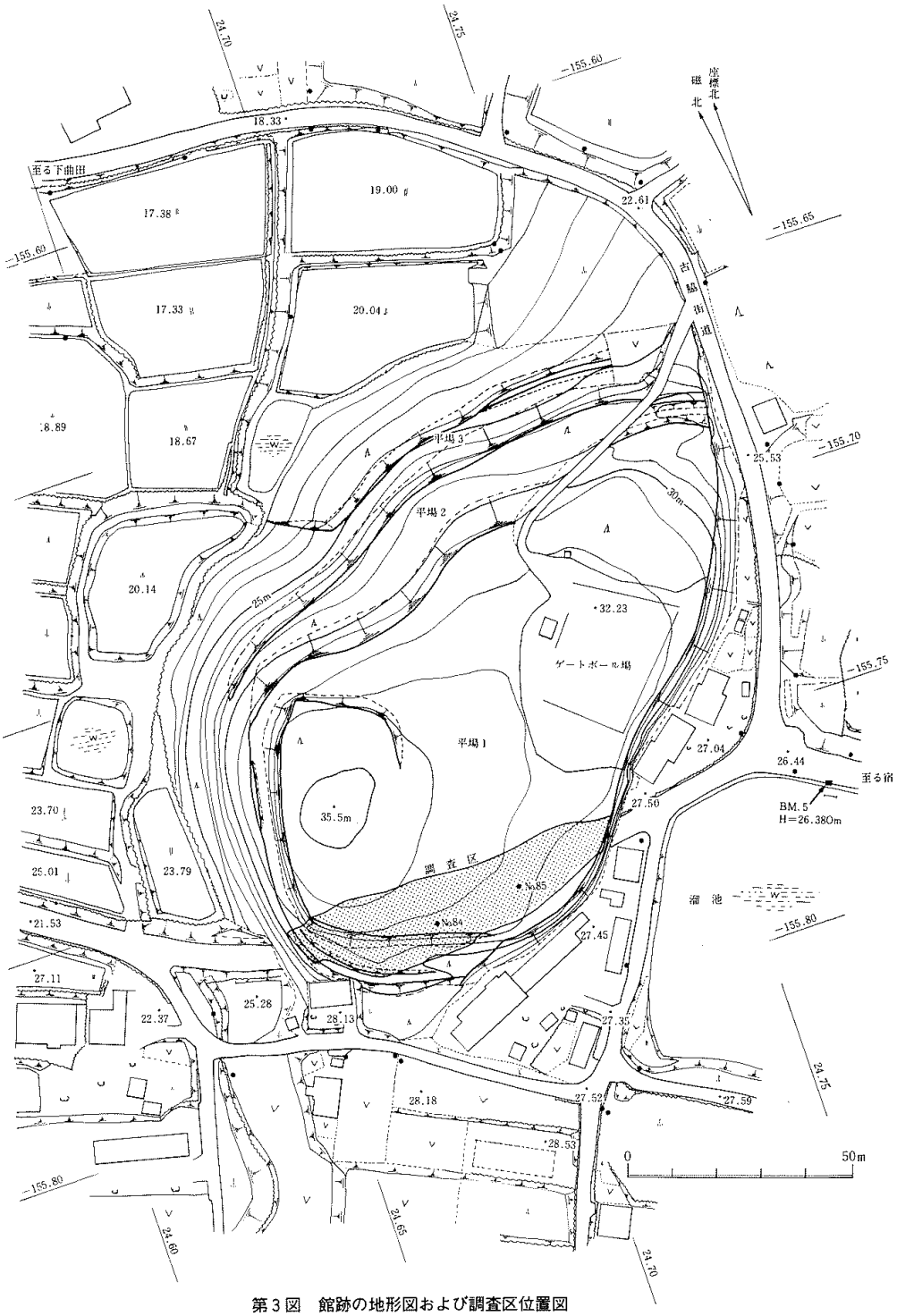
第 2 図　館跡周辺の集落と小字名

〔館跡に関する文献や伝承〕　館跡については安永年間(1770 年代)に書かれた風土記御用書出に若干の記載がある。それには大貫村としての書出(「大貫村風土記御用書出」)のほか、涌谷伊達氏知行地としての書出(「風土記御用につき安芸在所の内村扱いにこれ無き分書上」安永 4 年(1775)：田尻町史資料編 1983 所収)もあり、館跡は涌谷伊達氏の知行地内であったことがわかる。前者には「館ノ越館　南北五拾間　東西二拾間原田甲斐様御住居之由」とあり、伊達騒動(寛文事件)で有名な原田甲斐宗輔(1619～1671)が住んだということになっている。原田家が断絶したため、その記録が十分残っておらず不明な部分が多いが、この地が原田家の知行地であった史実はなく、前節で述べたことをふまえると、涌谷伊達氏にかかわる遺構として考えるべきである。一方、地元の伝承では定宗の隠居所がこの館跡であるという説もあるがそれは祇却寺が有力であると思われる。またほかに、仙台藩奉行衆(家老職)の領内巡見や検地等の際の滞在所であるという説もあり、これが真実であれば、原田甲斐宗輔が奉行時代に一時滞在したことは十分考えられることである。

館跡の範囲は字下山居地内にほぼ一致している。「（下）山居」という地名は仙台領内ではあまり多くないが、宮城郡高城本郷で江戸時代後期に館を構えた仙台藩重臣の福原氏（一族 800 石）の屋敷があった場所が「山居山」と呼ばれる地であったことが知られており、館跡や屋敷跡に関連する地名であることが窺われる。なお、下山居から西へ数kmほど離れた丘陵地に「上山居」という字名も残っているが、屋敷跡等の伝承や下山居との関連については一切不詳である。

〔館跡の構造〕　館跡を踏査して、その範囲と館跡全体の構造を確認している。範囲については前述の通り、遺構の残存状況から道筋以西の字下山居地内に限られるものと考えられる。

遺構としては 3 段の平場、その周囲を巡る土塁や空堀を確認することができる。ゲートボール場のある南側の平場は、標高 32～35mで最も高い位置にあり、規模は東西 60m南北 100mでもっとも広い面積を持つ(平場 1)。さらにこの南西部には一段高い部分がある。南北 35m東西 25mで頂部の標高は 35.5mである。平場 1 の北側には、その北縁に沿った 2mほどの段差をはさんで隣接する平場がある（平場 2）。その標高は 28mほどで、東西 70m南北 10mの細長い平坦面である。さらに、北側には平場 2 の北縁に沿った 3mほどの段差をはさんで幅の狭い平坦面が認められる（平場 3）。その標高は 25mほどで最も低い位置にあり、規模は東西 40m南北 5mである。館跡の周囲は民家の建築あるいは植林や耕作によって削平を受け旧態をとどめていない部分がみられるが、南縁と西縁の一部、および北東縁では外側に土塁、すぐ内側に空堀が巡っているのが確認されている。土塁はいずれも空堀底面(表土上)から 30～50 ㎝ほどの盛りあがりとして認められる。北縁では北東縁の土塁から続く 1mほどの段差がみられ、東縁西縁は急斜面となっている。ほかに平場 2 の東側には館跡への登り口をはさんで深さ約 2mの空堀が

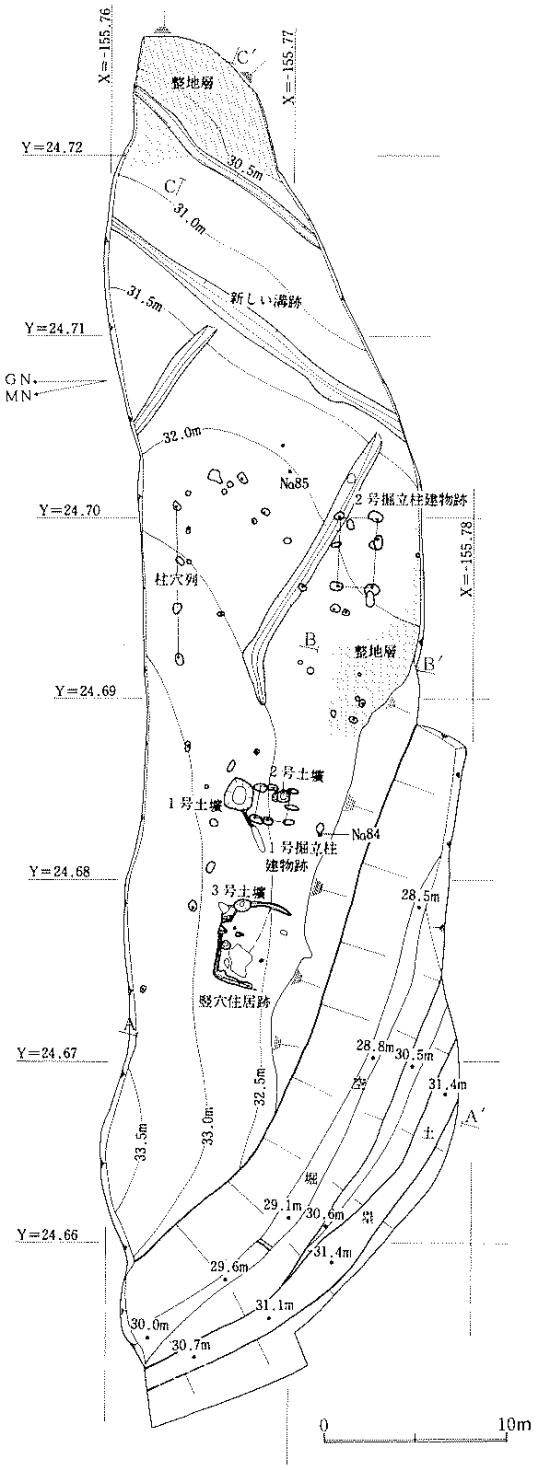


第3図　館跡の地形図および調査区位置図

認められる。その両端が削平をうけ、本来どのように延びていたかは不明であるが、東側が道路(前々節の脇街道)につながることなどから、往時の館の通路跡であった可能性がある。

古文献にみえる「南北五捨間　東西二捨間」は平場1を指すものと思われる。なお、ここには明治時代に大貫小学校が建設され、小学校移転後は大貫鉱山の鉱夫宿舎が造られており、遺構が大きく削平された可能性もある。また、館の施設として井戸や馬場があったといわれているが、今日では所在が定かではない。

このような小規模の館跡では、低い丘陵を利用して頂部に平場を作りだし、縁辺部に土塁・空堀等の区画施設を構築している場合が当地方においても典型的である。大貫字北山に所在し、昔から館山とも称されている弁慶館跡や大貫字北又に所在する大貫古館は本遺跡同様に低丘陵上に立地しているものである。後者は東西2か所の平場を2段の段状遺構が囲んでいる構造である。館跡としての歴史は不詳であるが、「安政7年正月四日大貫村給前通り屋敷書上取揃被召上候控」(1860年、門馬家文書)には「古館」の傍らにのびる「給前通り」に沿って涌谷伊達氏の家臣57人の屋敷があったことが記載されている。館と、侍(陪臣)屋敷との地理的な位置関係は、祇劫寺(もとは館跡)と宿の集落との関係に類似している。



第4図　遺構配置図

III　検出された遺構と出土遺物

今回の調査の結果、館跡南縁をめぐる土塁・空堀の構造や規模が明らかになり、平場には整地層2か所、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1列、土壙3基ほか柱穴・ピット群や新しい溝跡が検出されている。遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器類、瓦のほか石鏃、鉄製品がある。

1　基本層位（第5図）

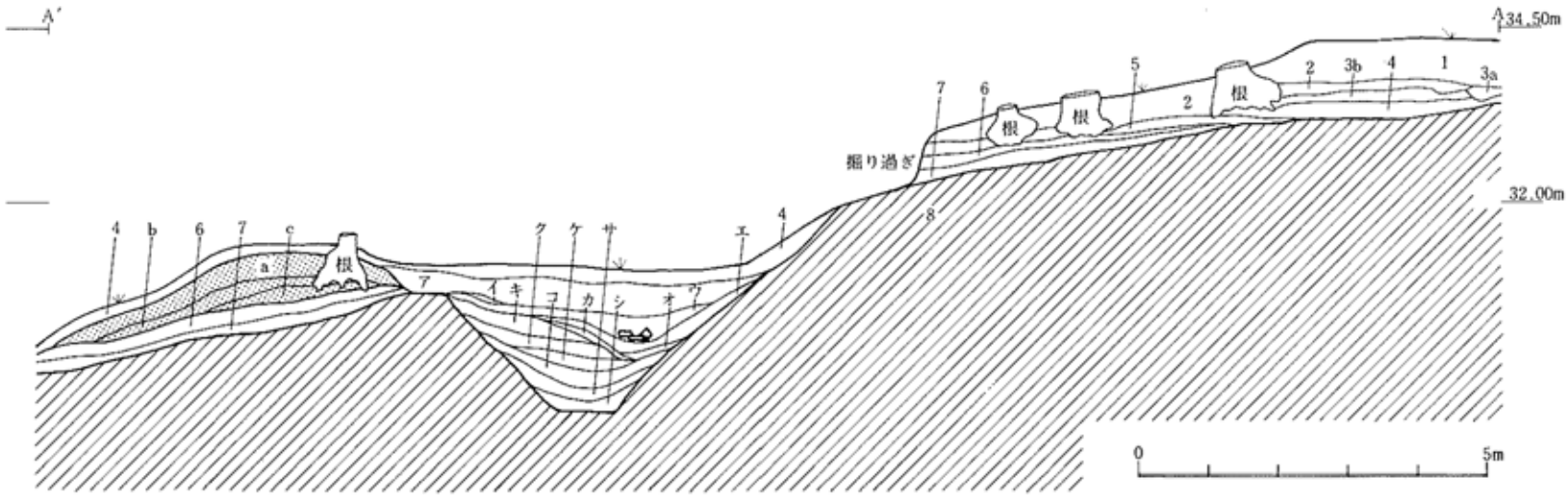
近年の盛土(1層)と地山との間に6枚の基本層位が認められる。2～4層は最近までの表土で、特に4層は土塁・空堀全体までを覆っている。5層は地山粒を多量に含む暗褐色シルト質土で、整地層と思われるが、層が薄く部分的であったので範囲をとらえられなかった。6層は旧表土、7層は地山漸移層とみられる。遺構は6・7層が分布するところではその上面で、ほかでは地山上面で確認している。地山は大貫層という新第三系の地層である。付近の地質をみると、加護坊山や箆岳山の山塊を形成する安山岩の貫入隆起によって背斜構造となっており、その山麓のなだらかな丘陵周辺で大貫層が露出し地山となっている。この層は凝灰岩、砂岩、泥岩、礫岩などの不規則な互層で、斜交葉理も発達しているところから湖成層と考えられているものである。また、この層の直下には新第三系の竜の口層がみられ、大部分が青灰色の凝灰質泥岩の海成層で、大貫層には不整合におおわれている。今回の発掘調査でも、この両層が不整合に重なりあうのが認められている。

2　土塁・空堀（第4・5図）

平場の南縁に沿う土塁・空堀で調査の対象となったのは北西から南東にのびる長さ約20mの範囲である。

空堀は平場の周縁に沿って掘られている。断面形は逆台形を呈し、上幅 4m下幅 1mで現在の表土からの深さは2mである。底面は北西から南東方向へ緩く傾斜し、一部で30㎝ほどの段差が見られる。底面と平場先端部との比高差は約3mである。堆積土は表土(4層)の下に12枚認められ、いずれも平場側あるいは土塁側からの崩落土とみられる。出土遺物には土師器（坏・甕）、須恵器（甕：第7図2）、赤焼土器（坏）、陶磁器類、石鏃（第7図7）がある。土師器、須恵器、赤焼土器はいずれも平場にあった古代の集落に関連するものであり、陶磁器類はごく新しいもの、石鏃は縄文時代のもので、空堀が機能していた時期に該当すると考えられる遺物はない。

土塁は空堀の外側をそれに沿ってめぐっている。旧表土(6層)上に3枚の積み土が認められており、積み土はいずれも地山粒を含む褐色のシルト質土である。基底幅は 5m、厚さは最も厚いところで80㎝である。土塁上場と空堀底面との比高は南東側では2.6mであるが、土塁上場は空堀底面とは逆に北西に向かって低くなり調査区ぎわでは比高0.7mとなる。また、土塁



No.	土　色	土　性	備　考
ア	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	地山粒を若干量含む。
イ	にぶい 黄褐色10YR4/3	粘土質シルト	地山粒を多量に含む。
ウ	黒褐色　7.5YR3/2	シルト	地山粒を含む。底面に河原石あり。
エ	にぶい 褐色 7.5YR5/4	シルト	地山粒や砂を含む。
オ	にぶい 黄褐色10YR4/3	シルト	互層状である。
カ	にぶい 黄橙色10YR7/4	砂質シルト	地山粒を含む。
キ	にぶい 褐色 7.5YR5/4	シルト	地山粒や礫を含む。
ク	灰オリーブ色　5Y5/3	砂ッポリノシルト	礫を多く含む。
ケ	オリーブ黄色　5Y6/4	砂質シルト	
コ	にぶい 黄褐色10YR5/4	砂質シルト	互層状である。
サ	明黄褐色10YR7/6	細砂	地山粒少量含む。
シ	明黄褐色10YR7/6	砂・シルト	互層状である。

（空　堀　堆　積　土）

No.	土　色	土　性	備　考
1	浅黄色　7.5YR7/3	シルト質粘土	最近の盛土
2	褐色　7.5Y4/4	シルト	しまりなし
3a	暗灰黄色2.5Y4/2	粘土質シルト	しまりあり
3b	にぶい 黄褐色10YR4/3	シルト	地山粒を少量含む。
4	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山粒を少量含む。
5	暗褐色　7.5YR3/4	粘土質シルト	地山粒を多量に含む。整地層か？
6	黒褐色　10YR2/2	シルト	旧表土
7	にぶい 黄褐色10YR5/4	シルト	旧表土から地山への漸移層
8	黄褐色　10YR6/8	シルト質粘土	地山　上面風化　（大質層）

（基　本　層　位）

No.	土　色	土　性	備　考
a	明黄褐色10YR6/6	砂質シルト	地山粒、礫を含む。
b	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒を少量含む。
c	黒褐色　10YR2/3	シルト	bより地山粒を多く含む。

（土　塁）

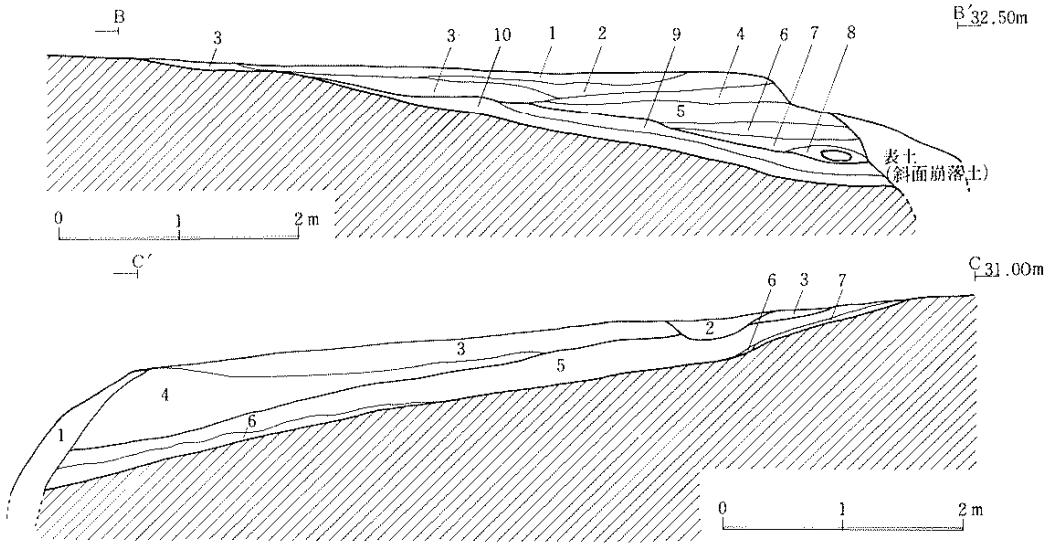
第5図　土塁・空堀・平場（基本層位）断面図

の空堀側斜面に傾斜のない狭長な平坦面が認められる。幅 1mほどであるが、土塁が低くなるとともに幅はせばまり、消失する。これについては堆積状況から空堀の掘り替えとは判断されず、土塁・空堀とともに造られた犬走りのような機能をもつ通路跡と考えている。出土遺物には唐草文が施された軒平瓦(第 7 図 3)があるが、時期は江戸時代以降としか限定できない。

3　平場で検出された遺構

(1) 整地層（第 6 図）

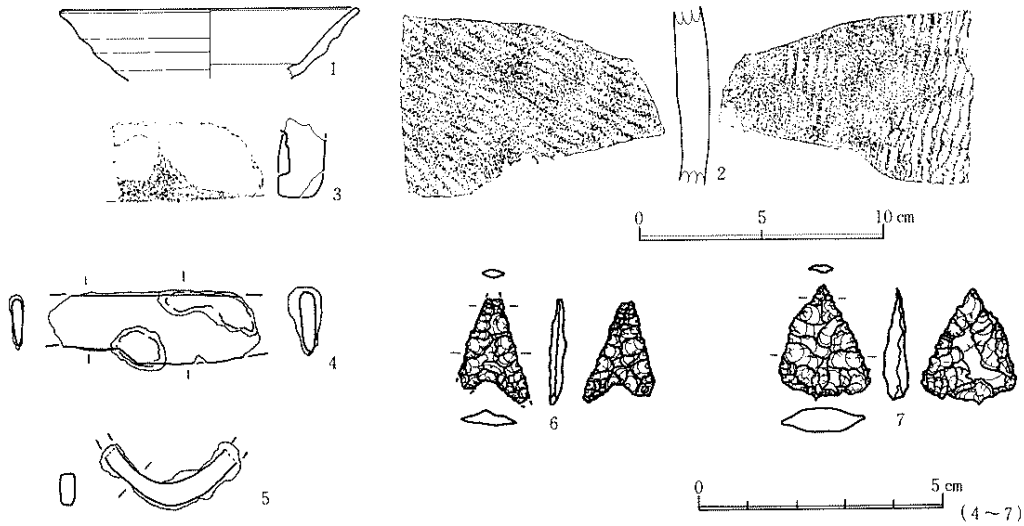
平場は周縁に向かって緩く傾斜しているが、縁辺部では整地層を設け、平坦面を造り出している。調査区内では東側と中央南よりの 2 か所で確認されている。いずれも旧表土上に地山混じりの積み土を施したもので、厚さは最も厚いところでそれぞれ 60 ㎝である。また、遺構検出面も整地最上層上面に限られるので一度に積み上げられたものと考えられる。出土遺物には土師器(坏・甕)、赤焼土器(坏：第 7 図 1)、珪化凝灰岩の剥片、鉄製品の刀子(第 7 図 4)・絞金具(第 7 図 5)があるが、整地層の時期を限定すると考えられる遺物は出土していない。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黄橙色　10YR8/6	粘土	褐色土や礫を含む。地山粒が大部分を占める。
2	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	地山粒や礫を少量含む。
3	褐色　10YR4/4	シルト	地山粒や礫を少量含む。
4	黄橙色　10YR8/6	粘土	褐色土や礫を含む。地山粒が大部分を占める。
5	暗褐色　7.5YR3/3	シルト	黄褐色土が縞状にまじる。礫を含む。
6	黄橙色　10YR8/6	粘土	褐色土や礫を含む。地山粒が大部分を占める。
7	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒や礫を少量含む。
8	黄橙色　10YR8/6	粘土	褐色土や礫を含む。地山粒が大部分を占める。
9	黒褐色　7.5YR2/2	シルト	旧表土
10	暗褐色　10YR3/3	シルト	旧表土から地山への漸移層

No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色　7.5YR3/2	砂質シルト	表土（斜面崩落土）
2	暗褐色　10YR3/4	シルト質粘土	新しい溝跡の堆積土
3	褐色ほか	シルト・粘土	5～7層、地山粒や礫を含む。
4	暗赤褐色 5YR3/2	砂質シルト	5～7層、地山粒を含む。礫を3層より多く含む。
5	黒褐色　7.5YR2/2	シルト	旧表土
6	褐色　7.5YR4/3	砂質シルト	旧表土から地山への漸移層。礫をやや多く含む
7	黄褐色　10YR5/6	シルト質粘土	旧表土から地山への漸移層。堅くしまる。

第 6 図　整地層断面図



No.	検出層位・遺構	種　別・器　形	法量・調整・その他	登録番号	写真図版
1	中央整地層	赤焼土器・坏	口径12.2cm　内外：ロクロナデ	17	
2	空堀埋積土イ層	須恵器・甕	内外：平行叩き目	21	6-6
3	土塁積土上面	軒平瓦	唐草文	20	6-5
4	東側整地層	鉄製品・刀子	ふくれ錆あり	19	6-8
5	中央整地層	鉄製品・綾金具	ふくれ錆あり	18	6-7
6	住居跡撹乱	石鏃	22×15×4mm　0.8g　焼けはじけあり玉髄製	24	6-9
7	空堀表土	石鏃	23×19×5mm　1.6g　素材面残る　黒曜石製	25	6-10

第７図　土塁・空掘・整地層ほか出土遺物

(2) 竪穴住居跡（第８図）

調査区西よりの位置に北辺部は地山上面、南側は基本層位６層(旧表土)上面で１軒確認している。残存状況はわるく、南半部が削平を受け、北半部にも数か所に攪乱がみられる。

(遺構の重複)　東側周溝部分と３号土壙が切り合い、住居跡が古い。

(平面形・規模)　周溝の状況から平面形は方形を基調とするものと思われる。規模は北辺の長さが 3.8mである。

(床・壁)　床面は地山や旧表土を削りだして作られており、北東隅が窪んでいるが、おおむね平坦である。貼り床の痕跡はない。壁は北辺で 10 cmほどが確認されるのみである。

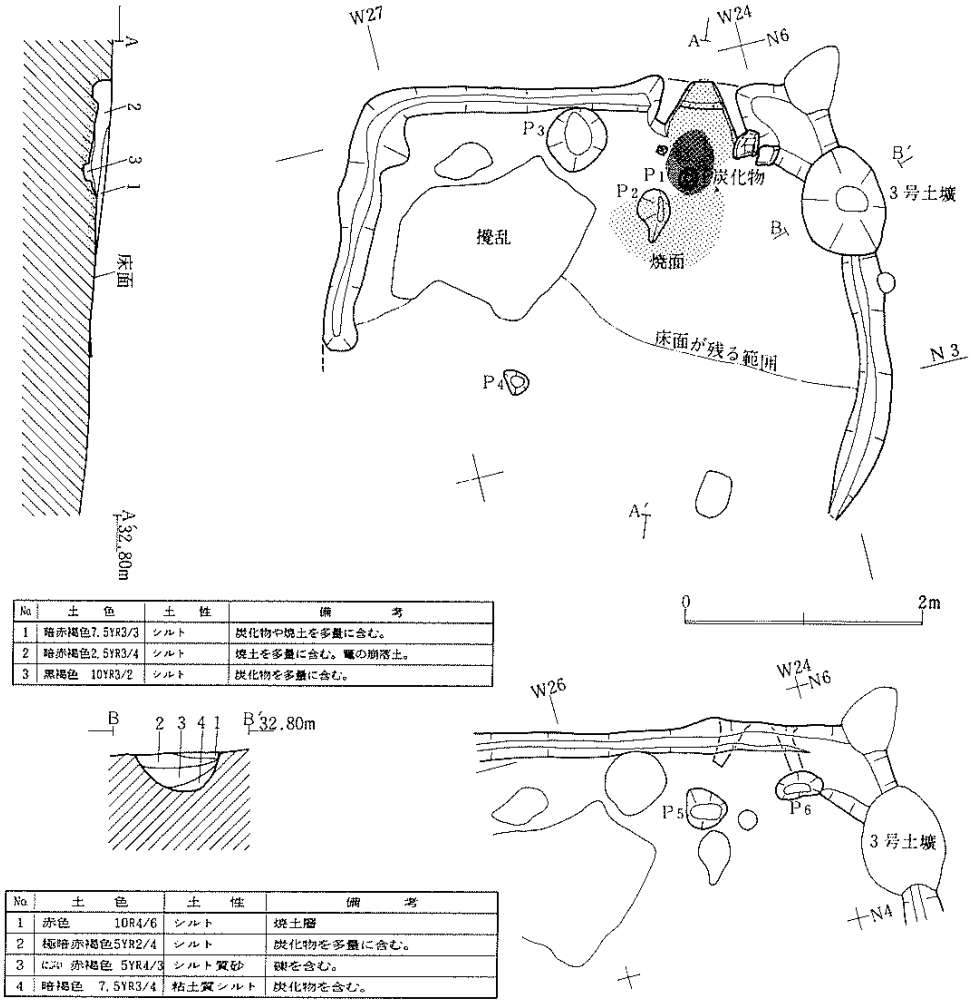
(かまど)　北辺中央部の東寄りに設置されている。周溝を先に掘った後、その上に粘土を積みあげて構築されており、側壁の積み土の残存状況から補修していることがわかる。かまどの前方に残る河原石は両側壁の芯としたものであろう。燃焼部に相当する部分は焼け面となり、焚き口部分に相当する床面には炭化物の集積が認められる。

(ピット)　６基検出されている。かまど南側のピット２（P2）は不整形で深さ 10 cmのピットである。北辺中央の周溝際にあるピット３は直径 50cm ほどの円形に近い形状で、深さは 10 cmである。底面近くに土師器甕の体部の一部が敷かれた状態で発見されている。堆積土は木炭・炭化

物を多量に含む暗赤褐色シルトである。貯蔵穴と考えられる。住居跡中央付近のピット4は長軸25 cm短軸20 cmの楕円形状で深さは26 cmである。また、かまどに付随すると思われるピットが3基ある。ピット1は深さ10 cmほどの円形のピットで、かまどの機能に関わるものとみられる。ピット5・6は深さ10 cmほどのピットで、河原石を取り外した跡に確認されたもので、補修前の河原石の据え方の痕跡と思われる。

（周溝）　壁面に沿って周囲を巡り、幅は30 cm前後、深さ10～15 cmである。

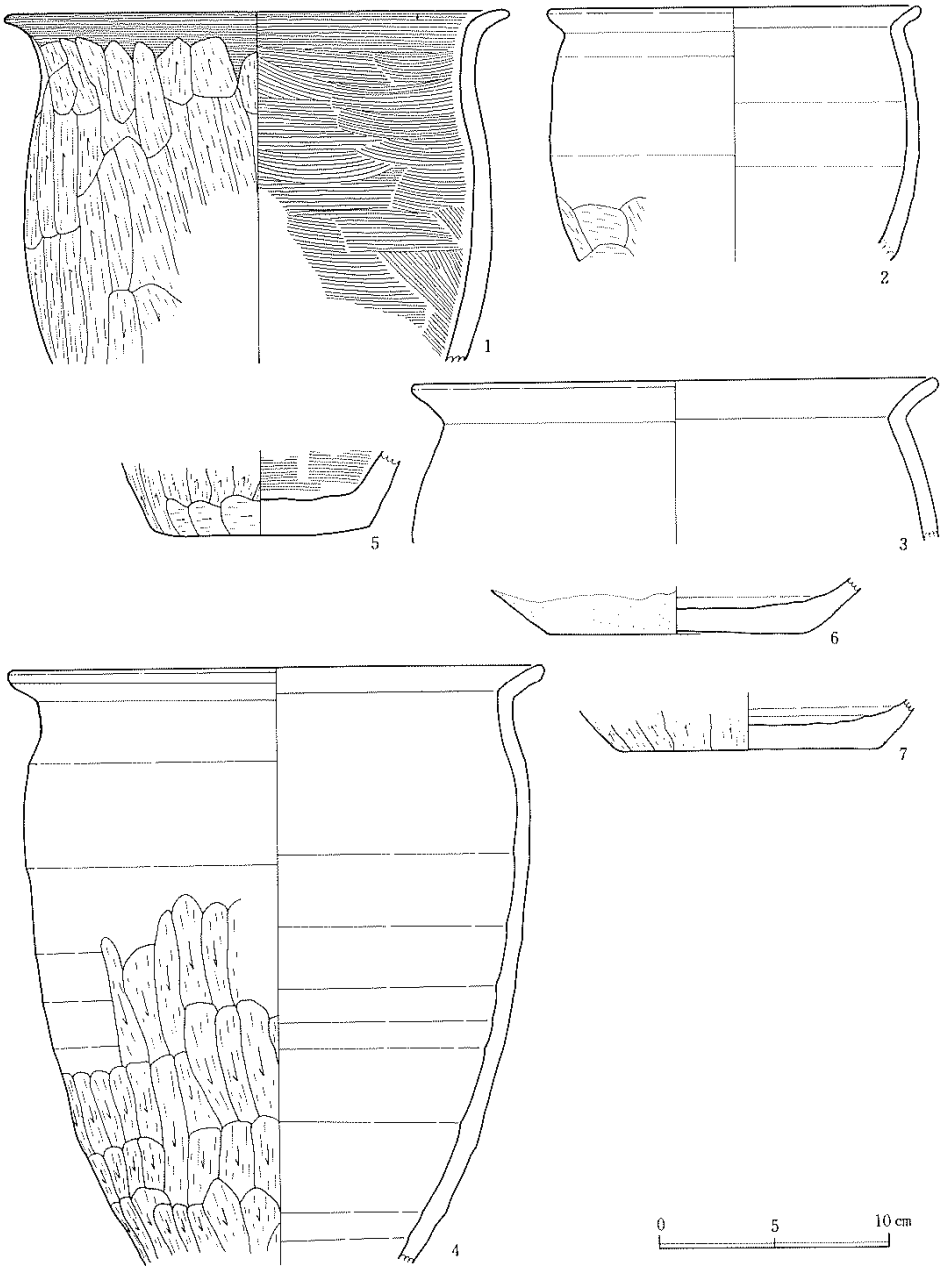
（堆積土）　3枚認められる。1層は床面上や周溝内に広く分布するもので、炭化物や焼土を多量に含む暗赤褐色シルトである。2・3層はかまどに残る焼土や炭他物を含む堆積土である。



No	土色	土性	備考
1	暗赤褐色7.5YR3/3	シルト	炭化物や焼土を多量に含む。
2	暗赤褐色2.5YR3/4	シルト	焼土を多量に含む。竈の崩落土。
3	黒褐色　10YR3/2	シルト	炭化物を多量に含む。

No	土色	土性	備考
1	赤色　10R4/6	シルト	焼土層
2	極暗赤褐色5YR2/4	シルト	炭化物を多量に含む。
3	にぶい赤褐色 5YR4/3	シルト質砂	礫を含む。
4	暗褐色　7.5YR3/4	粘土質シルト	炭化物を含む。

第8図　竪穴住居跡と3号土壙



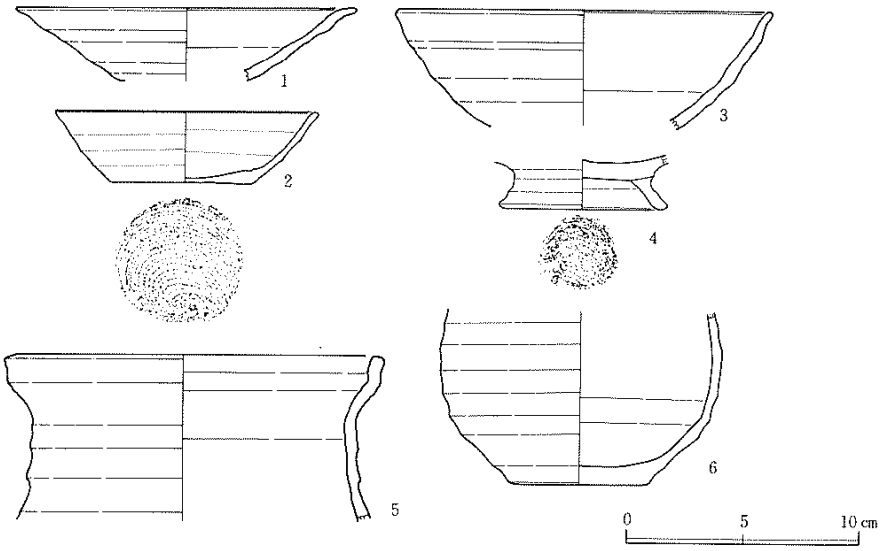
No.	検出位置	器形	法　量	調整・その他	登録番号	写真図版
1	ピット5	甕	口径21.8cm	外:ヨコナデ、ケズリ 内:ヨコナデ、ヘラナデ	5	6-1
2	カマド底面	甕	口径16.2cm	外:ロクロナデ、ケズリ 内:ロクロナデ	8	
3	カマド底面	甕	口径22.8cm	内外:ロクロナデ→摩滅	6	
4	周溝 (西側)	甕	口径23.2cm	外:ロクロナデ、ケズリ 内:ロクロナデ	4	

No.	検出位置	器形	法　量	調整・その他	登録番号	写真図版
5	カマド底面	甕	底径 9.4cm	外:ｹｽﾘ底:ﾅﾃﾞ内:ﾍﾗﾅﾃﾞ 1/底部?	11	
6	ピット1	甕	底径11.1cm	外底:摩滅　内:ロクロナデ	12	
7	カマド底面	甕	底径11.3cm	外:ｹｽﾘ　底:摩滅　内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	13	

第9図　竪穴住居跡出土遺物（1）土師器

（出土遺物）　堆積土、床面土、周溝、かまど、ピットから土師器、赤焼土器が出土している。第9図は土師器甕である。1・5は製作時にロクロを用いないもので、それ以外はいずれも製作時にロクロを用いている。第10図は赤焼土器である。胎土はいずれもにぶい赤褐色を呈している。1〜3は坏で、口径に比べ底径が小さい形態である。4は高台付坏、5・6は甕である。このうち2・6はかまどの南側の（第8図竪穴住居跡平面図中の▲印）床面上に底を上にして重ねてあったものである。図示しなかったものには、周溝から出土した内面を黒色処理したロクロ土師器小片、ピット2から出土した土師器甕（体部のみ）がある。

（時期）土師器の坏は小片であるが、ロクロを用いて製作されており、これについては表杉ノ入式の型式名が与えられ、平安時代の土師器として理解されており（氏家和典 1957）、赤焼土器はそれに共伴して出土することが知られている。したがって、この住居跡の年代も平安時代と考えられる。さらに坏類についてみれば赤焼土器が大部分を占めており、仙台市安久東遺跡第2号竪穴住居跡（土岐山武 1980）や利府町郷楽遺跡第2号竪穴住居跡（斎藤・小川・菅原ほか 1987）と併行するものと考えられる。これらの遺構は10世紀に位置付けられていることから、この竪穴住居跡の年代もその時期に限定されよう。



No.	検出位置	器　形	法　量・調　整・その他	登録番号	写真図版
1	1層	坏	口径14.5cm　内外：ロクロナデ	1	
2	床面	坏	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り痕 口径11.4cm　底径5.8cm　器高3.1cm	2	6-2
3	ピット2	坏	口径16.2cm　内外：ロクロナデ	3	
4	周溝（西側）	高台付坏	高台径5.4cm　内外：ロクロナデ 底：回転糸切り痕	7	6-3
5	周溝・カマド	甕	底径15.2cm　内外：ロクロナデ		
6	床面	甕	底径11.1cm　内外：ロクロナデ 底：回転糸切り痕	10	6-4

第10図　竪穴住居跡出土遺物（2）赤焼土器

(3) 掘立柱建物跡、柱穴列（第 11 図）

第 4 図の遺構配置図に見られるように、平場には 40 余の柱穴・ピットが検出されている。平面形や規模はまちまちであるが、堆積土や柱痕跡の特徴はほぼ一様で、掘り方には地山粒が混じる暗褐色のシルトが堆積しており、柱痕跡は直径 10～15 ㎝程度の円形で、黒褐色シルトが堆積している。柱穴の配置から掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 1 列が確認されており、基準の方向はほぼ同じであるが、規模はいずれも小さく、附属屋的な建物あるいはその一部とみられる。なお、いずれの柱穴・ピットからも出土遺物はない。

〔1 号掘立柱建物跡〕　調査区中央やや西よりの位置に、地山上面で確認している。2 号土壙と重複するが、直接の切り合い関係がある。桁行 2 間、梁行は北妻 1 間、南妻 2 間の南北棟である。柱間は桁行が西側柱列で北から 0.8m・0.9mで総長 1.7m、梁行が南妻で 0.8m・0.8mで総長 1.8mである。

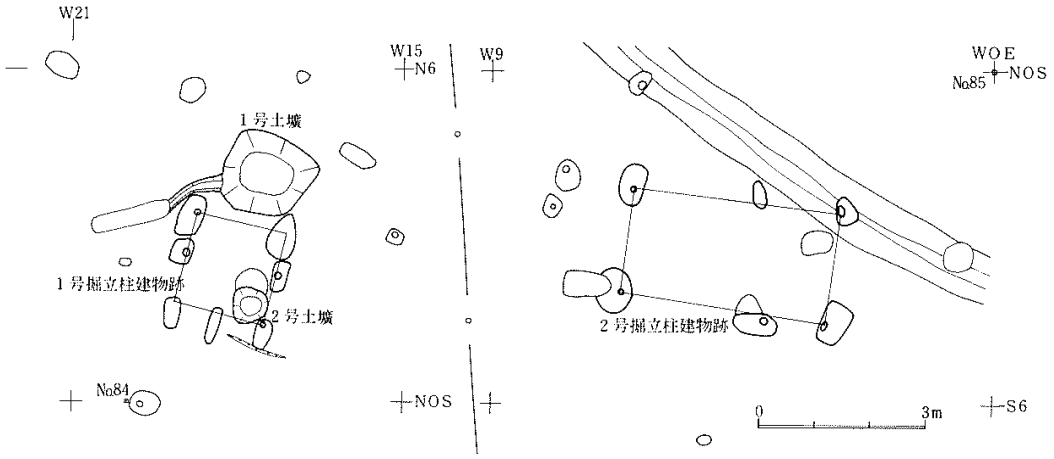
〔2 号掘立柱建物跡〕　調査区中央やや東よりの位置に、地山上面および 6 層(旧表土)上面で確認している。北東角の柱穴が新しい溝跡に、南西角の柱穴が新しいピットに切られている。桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟である。柱間は桁行が南側柱列で西から 2.6m・1.0mで総長 3.6m、梁行が西妻で 1.8mである。

〔柱穴列〕　調査区中央やや東よりの位置に、地山上面で確認している。4 個の柱穴がほぼ東西に並び、柱間は西から 2.6m・2.8m・2.8mで総長 8.2mである。

(4) 土壙

平場において 3 基検出されている。

〔1 号土壙〕(第 11 図)1 号掘立柱建物跡に近接して、地山上面で確認されている。平面形は丸みのある方形状で、規模は長軸 1.6m・短軸 1.2m、深さは 30 ㎝である。さらに、西側に溝状の

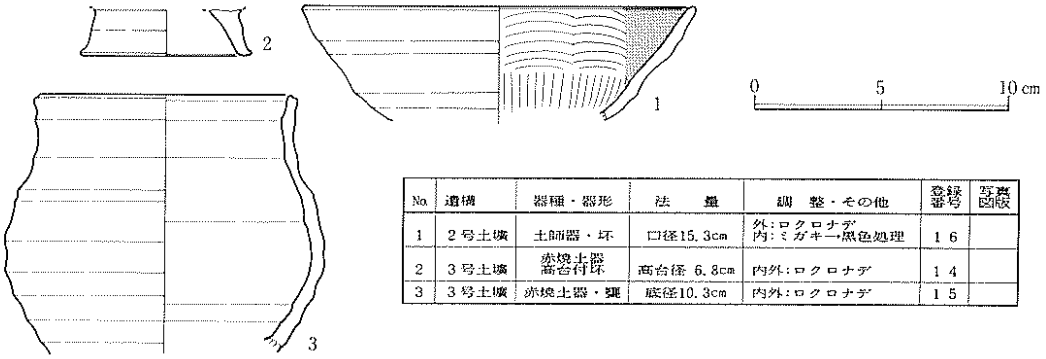


第11図　掘立柱建物跡と 2 ・ 3 号土壙

落ち込みがとりつく。ほぼ1mの長さを確認し、上幅20㎝・深さ10㎝である。堆積土は4枚認められ、1・3・4層は地山粒を含む褐色～黄褐色のシルトで、2層は炭化物や焼土を含む暗赤褐色の粘土質シルトである。出土遺物はない。

〔2号土壙〕（第11・12図） 1号掘立柱建物跡と重複し、地山上面で確認されている。平面形は直径60㎝の円形を呈し、深さは20㎝である。堆積土はしまりのある褐色シルトである。出土遺物には、ロクロ土師器坏（第12図1）があるほか、土師器甕や赤焼土器甕の体部小片がある。時期は坏の特徴から平安時代と思われる。

〔3号土壙〕（第8・12図） 1号竪穴住居跡の東辺にあり、地山上面で確認されている。切り合い関係から1号竪穴住居跡より新しいことが知られる。平面形は長軸60㎝・短軸60㎝の楕円形を呈し、深さは20㎝である。堆積土は4枚認められ、いずれも焼土・炭化物を含む赤～赤褐色シルトである。出土遺物には赤焼土器高台付坏（第12図2）・甕（3）のほか、ロクロ土師器坏・甕や赤焼土器坏・甕の小片がある。時期は坏の特徴から平安時代と思われる。



No.	遺構	器種・器形	法量	調整・その他	登録番号	写真図版
1	2号土壙	土師器・坏	口径15.3cm	外：ロクロナデ 内：ミガキ→黒色処理	16	
2	3号土壙	赤焼土器 高台付坏	高台径 6.8cm	内外：ロクロナデ	14	
3	3号土壙	赤焼土器・甕	底径10.3cm	内外：ロクロナデ	15	

第12図　土壙出土遺物

(5) 溝跡

平場の東側に溝跡が4条ある。上幅0.7m～1.5m、深さは30㎝以下で、堆積土が暗褐色のシルト混じりの砂質土である点は共通している。このうち2条はほぼ等高線に沿って北東から南西に延び、他の2条はそれに直行する方向に延びている。整地層や掘立柱建物跡の柱穴と重複しているが、いずれの場合も溝跡がそれらを切っており新しい遺構であることが知られる。出土遺物には陶磁器類があるが、みなごく新しいものばかりである。

Ⅳ　まとめ

1　大貫館山館跡は江戸時代に館ノ越館とも呼ばれており、加護坊山北麓の低い丘陵上に立地している。館跡の北東麓には田尻町小塩から涌谷町小里へ延びる江戸時代からの脇街道が通る。

2　館跡は 3 段の平場や土塁、空堀で構成される。発掘調査が行われた南側の平場（平場 1）が最も高い位置にあり、面積も広く、屋敷の主屋となる建物があった場所と考えられる。その北側には細長い平場が 2 段認められる（平場 2・3）。館跡の周囲は削平された部分もあるが、区画の土塁・空堀が 3 か所、段状となっているところが 1 か所あり、他は急斜面となっている。そのほか、北東部に見える空堀はその位置から往時の通路跡の可能性がある。

3　今回の調査の結果、館跡南縁をめぐる土塁・空堀の構造や規模が明らかになり、平場には整地層 2 か所、竪穴住居跡 1 軒、掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 1 列ほか柱穴・ピット群、溝跡 4 条、土壙 3 基が検出されている。遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器類、瓦のほか石鏃、鉄製品（刀子・絞金具）がある。

4　このうち、館跡関連遺構と考えられるものは土塁・空堀、平場で検出された整地層 2 か所、掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 1 列ほか柱穴・ピット群である。平場の縁辺部では平場の面積を確保するため整地地業を施しているが、建物跡は規模が小さく附属屋とみられるものである。柱穴列を含めほぼ方向をそろえていることから、同時期の遺構とみたい。館跡に伴う出土遺物には唐草文のある軒瓦があるが、時期が限定されるものではない。

5　文献などもあわせて検討してみると、館跡（屋敷跡）が存在した年代が江戸時代前半（17 世紀）であること、江戸時代を通じて本遺跡を含む大貫地区は大部分涌谷伊達（亘理）氏の知行地であること、館跡の付近には涌谷伊達氏家中の祇劫寺・長水寺があり、また両寺門前にある「宿」をはじめ近隣の集落には涌谷伊達氏の家臣が居住していたことがわかり、またその位置関係を見ると、本遺跡は宿から西へ延びる脇街道が突き当たった所に位置するなどその立地要因は地形環境のみではなく、二寺院や宿の集落の位置をふまえてのことと思われる。したがって、本遺跡は涌谷伊達氏関連の館跡（屋敷跡）と理解するのが妥当であり、その年代については、古文献等から導かれる江戸時代前期（17 世紀）としておきたい。しかし、土塁・空堀の規模が大きいことをふまえると、館跡の築造年代は天正の豊臣秀吉による奥州仕置以後とは考えがたく、それ以前にさかのぼる可能性もある。館主について安永風土記には「原田甲斐様」とあるが、本遺跡を地元の伝承にいわれる奉行衆などの仙台藩役人のための滞在所と考えれば、矛盾はないだろう。

6　竪穴住居跡 1 軒、土壙は館跡以前の遺構である。竪穴住居跡から土師器、赤焼土器が出土しており、その年代は土師器坏の特徴から平安時代と考えられた。2・3 号土壙についても住

居跡と同様の遺物が出土しており、竪穴住居跡との時間的な隔たりはほとんど無いものと思われる。1 号土壙についても堆積土からこの時代に考えておきたい。館跡のある丘陵上には平安時代の集落跡も存在することが明らかになった。

7　そのほか、表土などから石鏃が 2 点出土しており、本遺跡には縄文時代の遺構も検出される可能性がある。溝跡 4 条については明治以後のもので、小学校や鉱山宿舎に関連するものであろう。

引用・参考文献

氏家和典(1957)：東北土師器の型式分類とその編年　「歴史」第14輯　東北史学会

斎藤・小川・菅原ほか(1986)：利府町郷楽遺跡　宮城県文化財調査報告書第123集

紫桃正隆(1972～74)：仙台領内古城・館　第1～4　仙台・宝文堂

田尻町史編纂委員会編(1960)：田尻町史

田尻町史編纂委員会編(1982・83)：田尻町史上・下巻　資料編

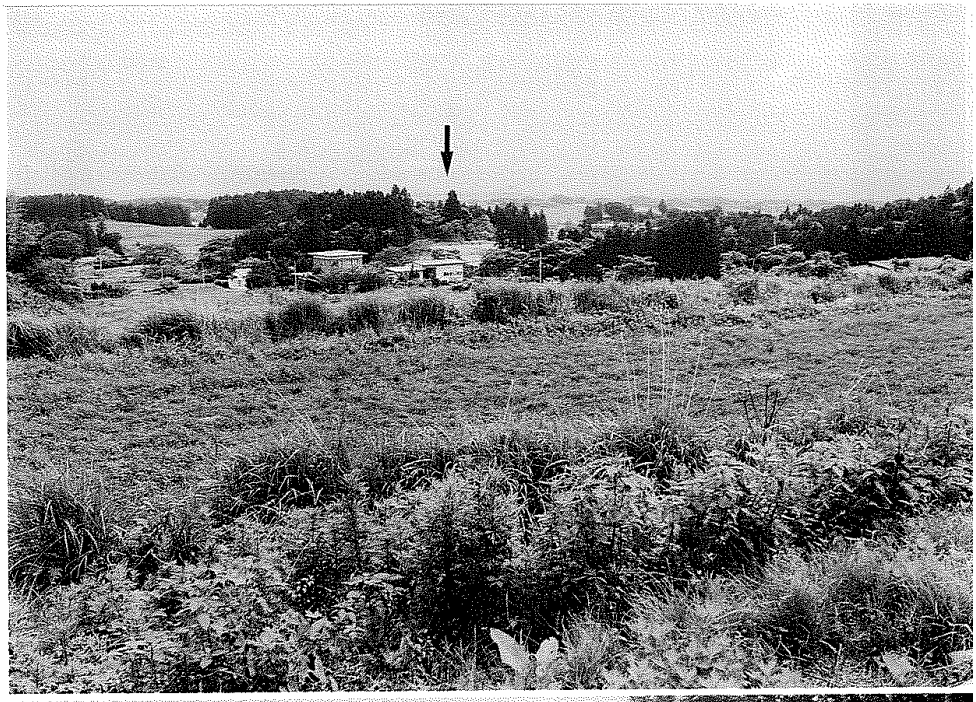
土岐山武(1980)：安久東遺跡　宮城県文化財調査報告書第72集(新幹線Ⅳ)

宮城県高等学校理科研究会地学部会編(1975)：宮城県の地質案内　仙台・宝文堂

涌谷町史編纂委員会編(1965・68)：涌谷町史　上・下

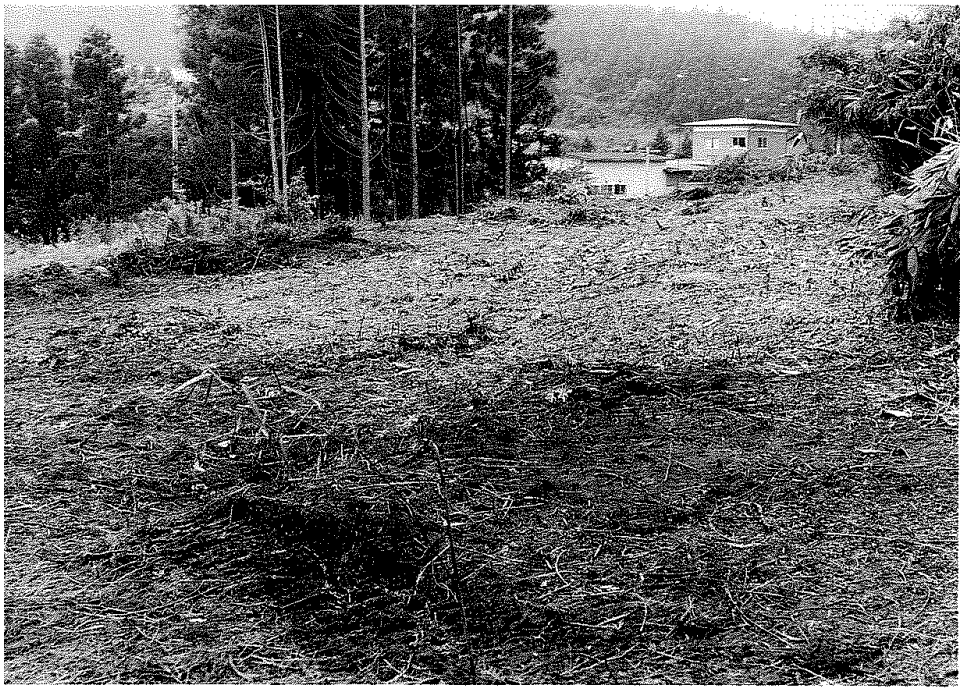
亘理町史編纂委員会編(1975・77)：亘理町史　上・下巻

写　真　図　版



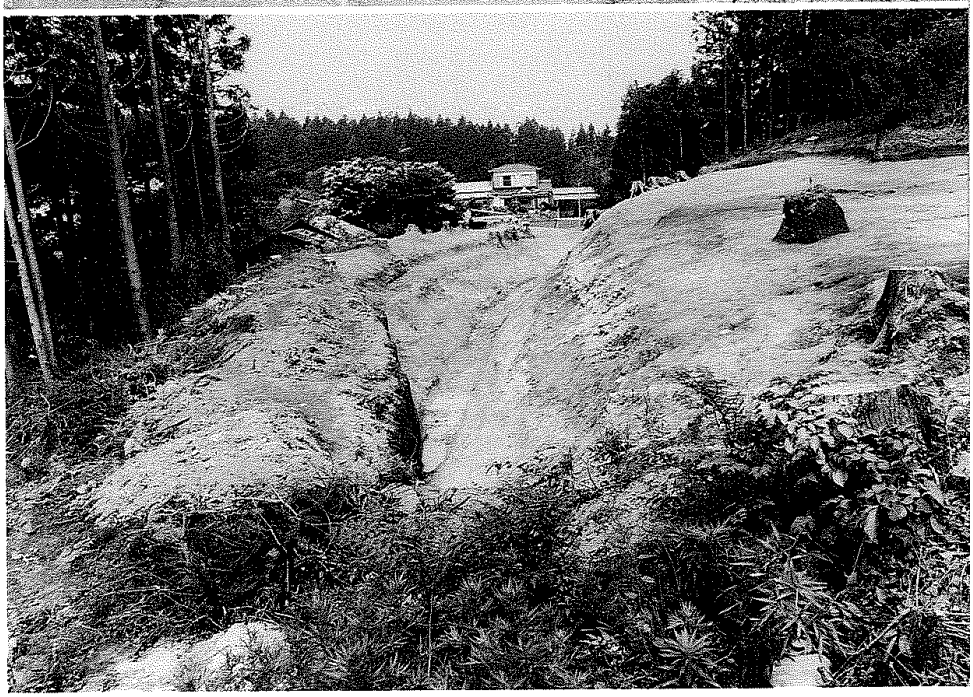
上： 遺跡遠景（南から）
下： 発掘前の土塁・空堀

写真図版 1



上：発掘前の平場
下：土塁・空堀（西から）

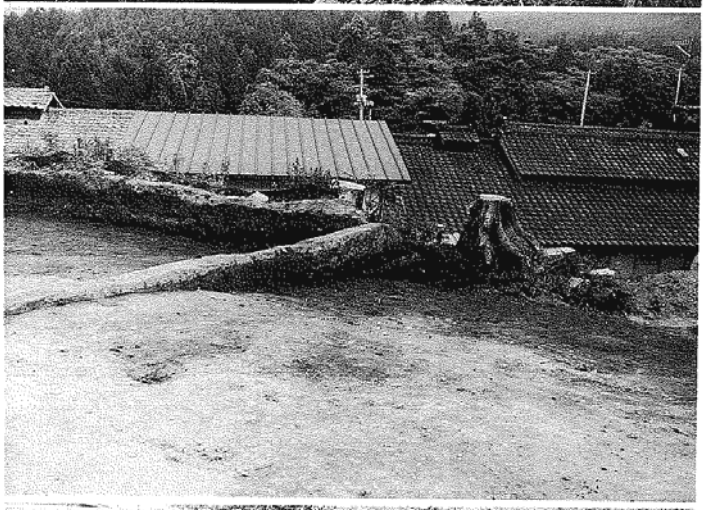
写真図版 2



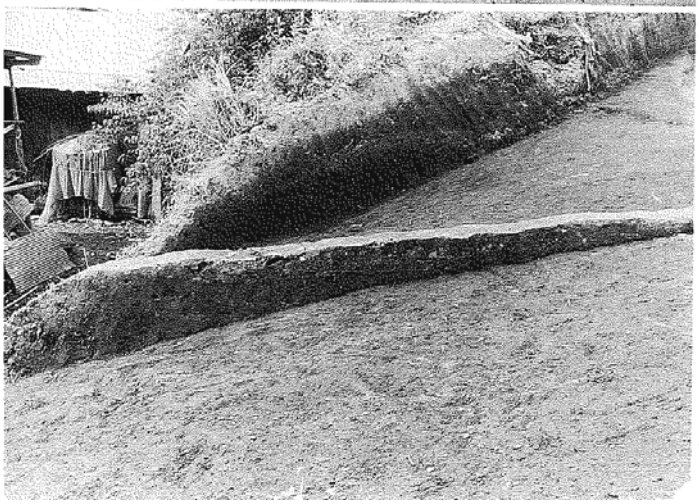
上：空堀の断面
下：土塁・空堀（東から）

写真図版 3

土塁の断面（南から）



調査区中央の整地層の断面



調査区東側の整地層の断面

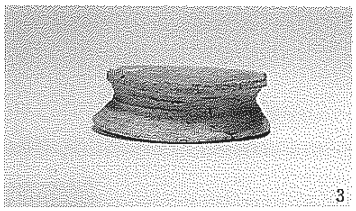
写真図版 4

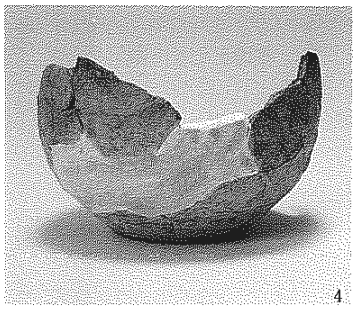
中央整地層とピット群

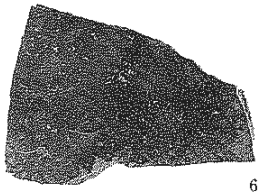
平場とピット群

竪穴住居跡

写真図版 5







1：第9図1　　5：第7図3　　8：第7図4
2：第10図2　　6：第7図2　　9：第7図6
3：第10図4　　7：第7図5　　10：第7図7
4：第10図6

写真図版6 出土遺物

上沼館跡（うわぬまたてあと）

目　　次

1. はじめに ･･･ 35
2. 調査の経過 ･･･ 37
3. 調査の成果 ･･･ 37
4. 遺物の年代 ･･･ 41
5. 遺構について ･･･ 42

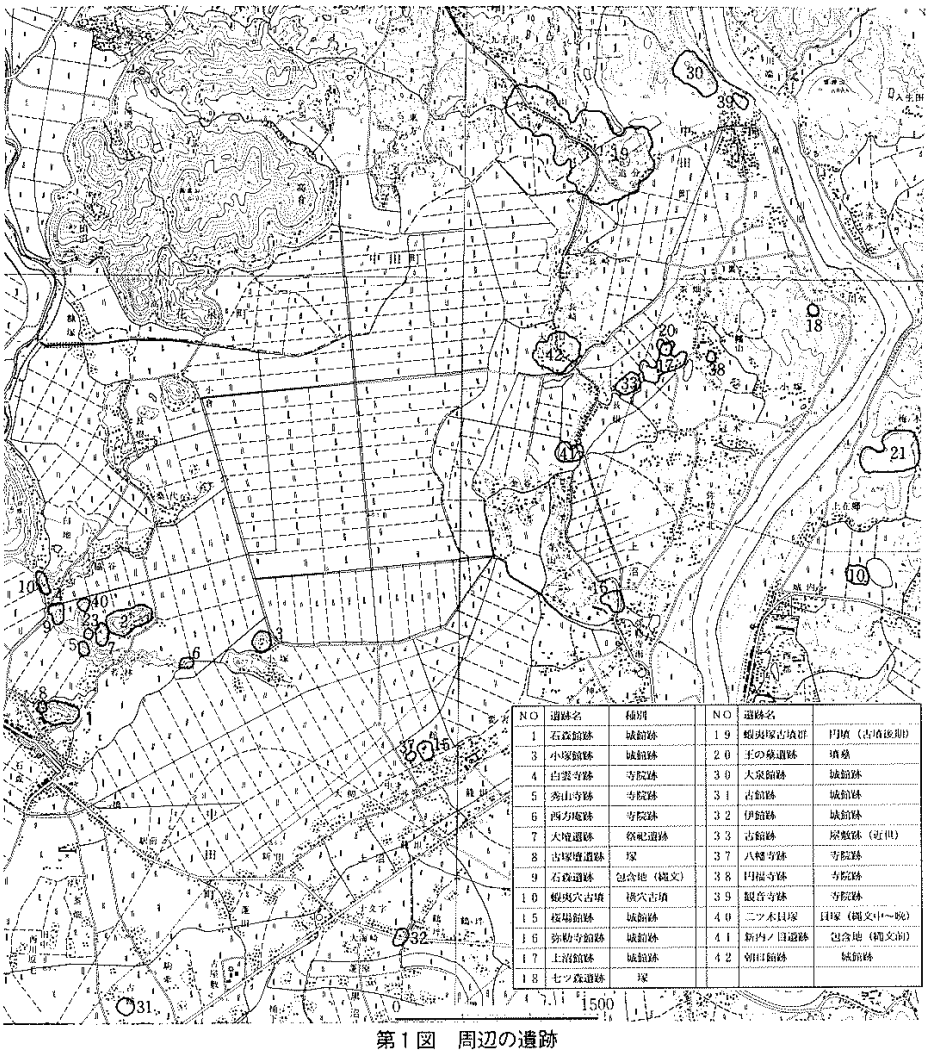
調 査 要 項

遺 跡 名：上沼館跡
遺跡記号：ＮＤ
所 在 地：登米郡中田町上沼字浦沼 140－3
発掘面積：700 ㎡
調査期間：平成元年 6 月 26 日～29 日
調査主体：中田町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・斎藤吉弘・阿部恵・真山悟・須田良平・鈴木真一郎・木皿直幸

上沼館跡（うわぬまたてあと）

1. はじめに

上沼館は中田町上沼字浦沼 140-3 他に所在する。中田町は宮城県の北東部に位置しており、北は岩手県花泉町に接している。中田町の地形は、東部には北上山地の西縁を南下した北上川が流れ、西部には築館丘陵の間を迫川や夏川が南東に流れている。これら 3 河川の流域には迫川低地帯がみられる。低地帯周囲には北上川や夏川で分断される低い分離丘陵がみられる。上沼地区の北東側にある八幡山から南西に延びる低い丘陵もその一つである。遺跡は八幡山から長根地区にむかって南西に延びる低い分離丘陵の中央から東側の浦沼地区に位置している。



NO	遺跡名	種別	NO	遺跡名	
1	石森館跡	城館跡	19	蝦夷塚古墳群	円墳（古墳後期）
3	小塚館跡	城館跡	20	王の森遺跡	墳墓
4	白鬚寺跡	寺院跡	30	大泉館跡	城館跡
5	秀山寺跡	寺院跡	31	古館跡	城館跡
6	西方庵跡	寺院跡	32	伊館跡	城館跡
7	大境遺跡	祭祀遺跡	33	古館跡	屋敷跡（近世）
8	古塚墳遺跡	塚	37	八幡寺跡	寺院跡
9	石森遺跡	包含地（縄文）	38	円福寺跡	寺院跡
10	蝦夷穴古墳	横穴古墳	39	観音寺跡	寺院跡
15	桜場館跡	城館跡	40	二ツ木貝塚	貝塚（縄文中～晩）
16	弥勒寺館跡	城館跡	41	新内ノ目遺跡	包含地（縄文前）
17	上沼館跡	城館跡	42	朝日館跡	城館跡
18	七ツ森遺跡	塚			

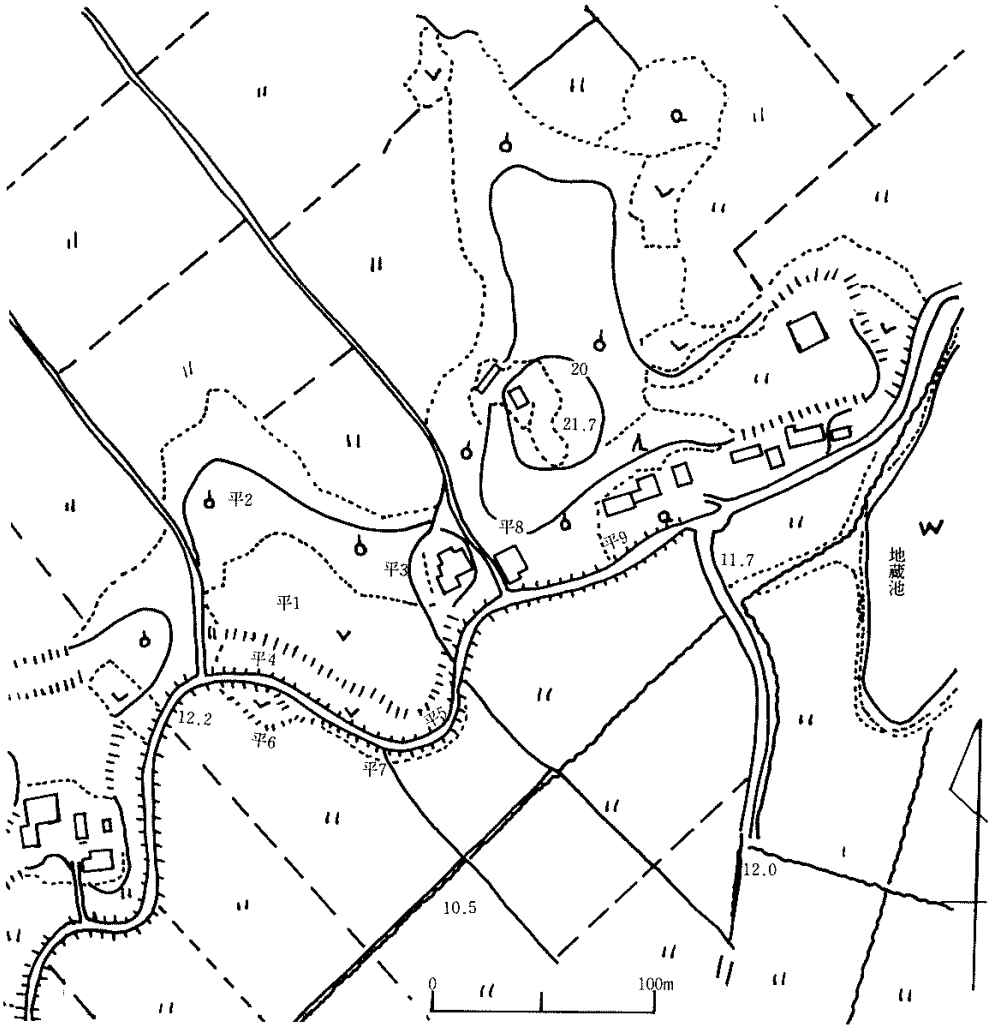
第１図　周辺の遺跡

町内には43の遺跡があり、夏川・北上川の自然堤防や周辺の分離丘陵上に立地している。中世～近世の遺跡には館跡・寺院・塚などがあり、石森地区・上沼地区・浅部地区に分布が偏っている(第1図)。

上沼館跡周辺を見ると北上川西岸の丘陵には大泉館跡・朝日館跡・上沼古館跡・弥勒寺館跡などの館のほか円福寺跡・観音寺跡、七ツ森遺跡(塚)等が立地している。旧北上川の自然堤防上には桜場館跡・伊神館跡・八幡寺が立地する。

(館跡について)

館跡は南西方向に延びる丘陵上に立地し、館跡の北と南は沖積地である。丘陵の鞍部を南北に切る堀を挟んで、南西が本丸で北東が二の丸として伝えられている(第2図)。



第2図　地形図

本丸と伝えられる丘陵頂部には西辺に土塁が残る東西に長い平場(平場 1)があり、その北と南～南東に一段低い平坦部がある。平場 1 の南～南東側の下段を巡る平坦部はやや段差のある 2 つの平場(平場 4・5)で幅は 10～15mである。平場 4・5 の南側斜面にも段差のある 2 つの狭い平場(平場 6・7)が東西方向に続いており、通路を兼ねている。

二の丸跡はリンゴ畑(平場 8)となって明確な遺構はみられないが、一段低い南側には平場 5 から続く幅約 15mの平場 9 がみられる。

館に関しては江戸時代になって次の記録がみられる。

仙台領古城書上　　「山城　東西五十間・南北二十間、城主豊後　」

上沼村風土記御用書出　　「　城主千葉豊後守申伝候事」

このことから江戸初期には古館として伝承に残っていたようである。

2．調査の経過

町道改修の予定地は上沼館の南側にある一段低い平坦な平場 4・5・9 で、現状は畑地・果樹園・道路である。計画路線は町道と重なる 3 ケ所の平場南縁の幅 10m、長さ 200mの範囲である。遺構の存否を確認することが目的であったため畑を対象に調査を行ない、遺構が存在する場合には現道下をも対象にすることとした。

初めに道路沿いの平場 4・5・9 に調査区を設定し、西から 1～3 区とした。表土を除去した結果、1～3 区で南北に延びる土塁と堀の一部が確認された。土塁積み土の遺状況や構築方法などをみるため各区で幅 3mのトレンチを設けて掘り下げたところ、土塁と堀は平場 2・5 の縁辺に沿うように構築されていることがわかった。1 区トレンチの土塁は積み土の違いから 2 時期に別れた。さらに土塁下の整地層でピットが検出された。この段階で土塁・堀の残りが良好であることが判明したため、町土木課と保存についての協議を行った。その結果、今年は道路を横断する 2 カ所の排水管工事地区(2 区－2 トレ・3 区－3 トレ)について調査を実施し、道路部分の事業計画については変更することになった。10 月に入って排水管工事地区のトレンチ調査を行った。この結果、2・3 区の土塁下で整地層と堀が認められた。このうち 1 区と 2 区のトレンチで断面図を作製した。

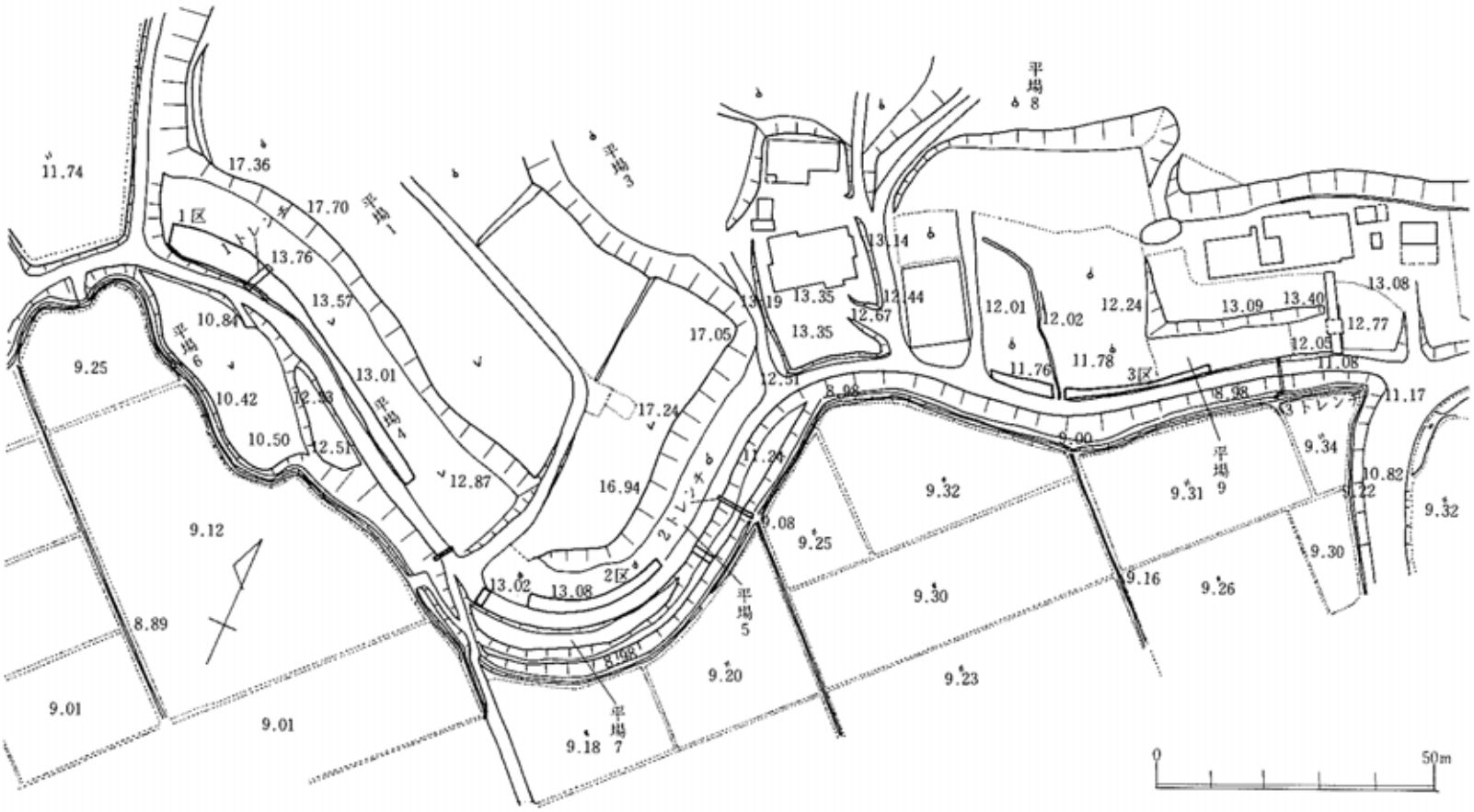
3．調査の成果

平場 4・5・9 の調査区南側で土塁・堀が平行して確認された。3 ケ所で土塁・堀を掘り下げたところ 2 時期の土塁・整地層・堀・ピットが重複して検出された。

遺構

〔1 区〕

確認した土塁・堀・整地層・ピットは次の順で構築されており 5 時期の遺構に別れた。


平場8
平場3
平場1
平場4
平場6
平場5
平場7
平場9
1区
2区
3区
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
11.74
17.36
17.70
13.76
13.57
13.01
10.84
10.42
10.50
12.51
12.87
9.25
9.12
8.89
9.01
9.01
17.05
17.24
16.94
13.02
13.08
9.18
9.20
9.25
9.08
9.32
9.30
9.23
9.16
9.26
9.31
9.00
9.34
9.30
10.82
9.22
9.32
11.17
11.08
12.05
12.77
13.08
13.40
13.09
12.24
12.02
12.01
11.76
11.78
12.44
12.67
13.35
13.35
13.14
12.51
8.98
8.98
0
50m

第3図　トレンチ配図

1　　2　　3　　4　　5

整地層1・ピット－整地層2－土塁1－整地層3・土塁2－堀

(1期の遺構)

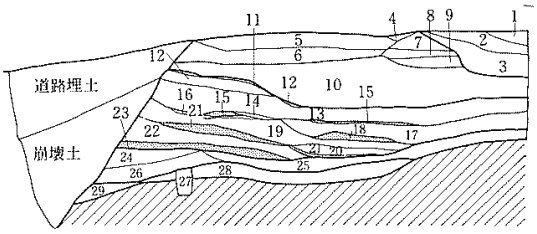
旧表土と南に傾斜した地山の上に明褐色土が積んである整地面(28層)である。この面からピットが検出されたため2期の整地と区別できる。整地層の厚さは20cmである。確認したピットは円形で径15㎝、深さ20㎝である。

(2期の遺構)

暗褐色土・黄褐色土・褐色土が積んである整地面(24～26 層)である。整地層の厚さは 20～40cm である。

層の名称	層NO	土色	土性	備考
堀埋積土	1	橙色 (7.5YR 7/6)	シルト	
	2	明褐色 (7.5YR 5/8)	シルト	
	3	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	
土塁積み土	4	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	
	5	橙色 (7.5YR 7/6)	シルト	
	6	黄褐色 (7.5YR 5/6)	シルト	
	7	褐色 (10YR 4/4)	シルト	
	8	明褐色 (7.5YR 5/8)	シルト	
	9	褐色 (10YR 4/4)	シルト	
	10	橙色 (7.5YR 7/6)	シルト	整地事業

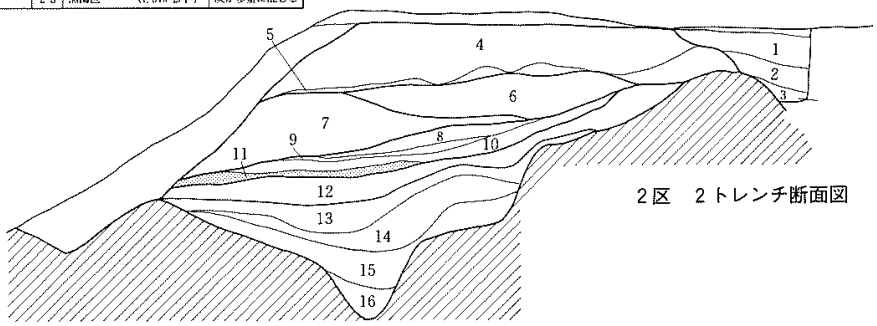
層の名称	層NO	土色	土性
土塁積み土	11	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト
	12	オリーブ褐色 (2.5Y 4/6)	シルト
	13	暗灰黄色 (2.5Y 4/2)	シルト
	14	オリーブ褐色 (2.5Y 4/4)	シルト
	15	黒色 (7.5YR 2/1)	炭が多量に混じる
	16	オリーブ褐色 (2.5Y 4/4)	シルト
	17	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト
	18	黒色 (7.5YR 2/1)	炭が多量に混じる
	19	褐色 (10YR4/4)	粘性がある
	20	灰褐色 (7.5YR 4/2)	シルト
	21	黒褐色 (7.5Y 2/1)	炭が多量に混じる
	22	オリーブ褐色 (2.5Y 4/6)	シルト
	23	黒褐色 (7.5YR 2/1)	炭が多量に混じる



層の名称	層NO	土色	土性
整地層	24	暗褐色 (7.5YR 3/4)	シルト
	25	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト
	26	褐色 (10YR 4/4)	シルト
ピット	27	暗褐色 (7.5YR 3/4)	シルト
整地層	28	明褐色 (10YR 6/6)	シルト
旧表土	29	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト

1区　1トレンチ断面図

0　1　2m



2区　2トレンチ断面図

層の名称	層NO	土　色	土性	備考
堀埋積土	1	灰オリーブ色 (5YR 5/3)	シルト質粘土	
	2	灰オリーブ色 (5YR 5/3)	シルト質粘土	地山粒が混じる
	3	灰オリーブ色 (5YR 5/3)	シルト質粘土	地山・炭化粒が混じる
土塁積み土	4	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	シルト質粘土	地山粒が多い
	5	褐色 (7.5YR 4/3)	シルト	
土塁積み土	6	淡黄色 (5Y 8/3)	粘土	地山に炭化物が混じる
	7	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	シルト質粘土	

層の名称	層NO	土　色	土性	備考
整地層	8	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	粘土	炭化物が混じる
	9	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	粘土	地山が多い
	10	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	粘土	炭化物が混じる
	11	黒褐色 (10YR 2/2)	粘土	炭が多量に混じる
整地層	12	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	粘土	地山が多い
堀自然堆積土	13	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト質粘土	
	14	明黄褐色 (10YR 7/6)	粘土	地山が多い
	15	灰黄褐色 (10YR 5/2	シルト質粘土	
	16	灰色 (10Y 6/1)	シルト質粘土	グライ化している

第4図　土塁断面図

(3 期の遺構)

2 期の整地層の上に積んだ土塁 1(11～23 層)である。締まりのある灰褐色・褐色・オリーブ褐色土・暗灰黄土と木炭混じりの黒色土が互層に積んである。基底幅は 1.6m、残存高は 70 ㎝である。15 層の黒色土から砥石が出土している。

(4 期の遺構)

整地事業(10 層)と、その上に積んである土塁 2(5～9 層)である。積み土は褐色や黄褐色土で内側から外側の順でほぼ平行に積まれている。基底幅 2.7m、残存高 30 ㎝である。整地層は厚さは約 50cmである。整地と土塁の間に間層がないので一緒に積んだものと思われる。

(5 期の遺構)

土塁の北側にある堀である。堀の内側の立ち上がりは確認したが、幅は調査区外にのびているため不明である。

〔2 区〕

確認した土塁・堀・整地層は次の手順で構築され 5 時期の遺構に別れた。

1　　2　　3　　4　　5

堀 1－整地層 1－土塁 1－土塁 2－堀 2

(1 期の遺構)

地山を掘り込んだ堀である。中央が薬研状に深くなっている。上幅 3.5m、平場からの深さ 2mである。堆積土は灰黄褐色・明黄褐色・灰色土などである。

(2 期の遺構)

整地による平坦面で堀の堆積土の上ににぶい黄褐色土(10 層)を水平に積んでいる。厚さは 30 ㎝であるが、10 層上面の黒褐色土(9 層)中に多量の炭化物が含まれるため 10 層を境に土塁の積み土と別れる。

(3 期の遺構)

整地面の上に浅黄色土・にぶい黄褐色土・木炭混じりの黒色土(6～9 層)を積んでいる土塁 1 である。基底幅 8.5mで、残存高は 80 ㎝である。

(4 期の遺構)

土塁 1 の上面に褐色・にぶい黄色・浅い黄色土(4～5 層)を平行に積んでいる土塁 2 である。基底幅は 5.5mで、残存高は約 1mである。内側に幅 30㎝の犬走り状の平場が見られる。

(5 期の遺構)

土塁の内側に堀 2 があり、幅 1.3m、深さ 0.5mだけ確認した。堀の堆積土から中世陶器(甕・擂鉢)が出土している(第 3 図)。

出土遺物

中世陶器・砥石が出土している。

(中世陶器)　甕(口縁・体部)と擂鉢がある。

(1)甕

口縁は幅のせまい縁帯がめぐる。下端が僅かに張り出し、内面に狭い沈線がめぐる。内外ともナデ調整である。胎土は灰オリーブで軟質である。体部は外面が光沢のある暗赤褐色で淡黄色の自然釉がみられる。胎土は灰白で砂粒が混じる。

(2)　擂鉢:内面に筋目がなく、口縁上端が平坦で口縁端部に近づくにつれて内湾して立ち上がる。ロクロ成形で外面にヘラナデがみられる。

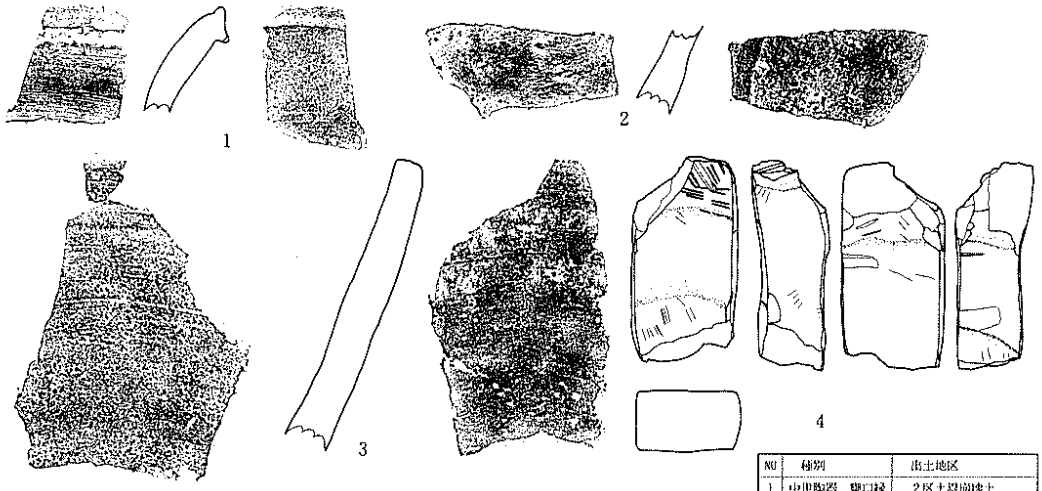
(3)砥石

長方形で4強が使用され、上下面の中央が窪んでいる。使用面に擦痕がある。

4．遺物の年代

甕：口縁が幅の狭い縁帯で内面に沈線がある甕は、観音沢遺跡の甕AⅡ類(118 図-1)や岩切鴻ノ巣遺跡の甕(35 図-4)に類似している。これらは常滑窯(多屋窯山第2号窯・高坂大窯跡)のもので鎌倉中期から南北朝期をふくめた時代としている。ここでも同様の年代にしておおきたい。

擂鉢：筋目がなく口縁上端が平坦なものは、観音沢遺跡の擂鉢AⅠ類に類似している。これらについては時期が限定できないとして鎌倉中期～室町後半としている。



NO	種別	出土地区
1	中世陶器　甕口縁	2区土壁崩壊土
2	中世陶器　甕体部	2区堀埋積土
3	中世陶器　擂鉢	2区堀埋積土
4	砥石	1区15層

第5図　出土遺物

5．遺構について

変遷と年代

調査区の表土下で確認した遺構は土塁と堀である。また掘り下げた１区と２区の遺構の重複はこまく見ると１区で５回、２医で５回認められた。

１区	整地層１・ピット	―	整地層2	－	土塁1	―	整地層3	・土塁2	・堀 2	
２区	堀1	―	整地層１	―整地層2	・土塁	―	土塁2	堀2		

掘り下げた２ケ所の各々の遺構のつながりは不明であるが、表土下で確認した土塁と堀は最終期の遺構で連続していたものと考えられる。また、１区土塁１と２区整地層２の積み土に木炭が入ることで構築手順がほぼ同時期とかんがえられる。このため積土のちがいなどから４時期にわけられる（第１表）と思われる。

（遺構の年代）

時期の推定できる遺物は２区土塁２の崩壊土から甕、２区堀２の埋め土から擂鉢が出土している。甕は鎌倉中～南北朝時代末、擂鉢は室町時代後半に考えられることで土塁２と堀２は室町時代後半（1540 年以降に）構築された。それ以前の遺構はその構築時期を示す資料はない。

まとめ

1、調査の結果、平場４・５・９の南縁に土塁・堀が平行してみられた。掘り下げた平場４・５・９は５回の構築が見られたが、大まかに見ると４時期にわかれる。このことから館跡は次第に堅固に改築していったといえる。４期の遺構は遺物から室町時代後半（16Ｃ初）である。

2、館主は江戸時代に編まれた「仙台領古城書上」・「上沼村風土記御用書出」・「奥羽観蹟聞老志」などから、「葛西臣千葉豊後」の居館として伝承があったことが知られる。

引用・参考文献

白鳥・加藤（1974）：「岩切ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書35

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書72

仙台叢書刊行会：「仙台領古城書上」仙台叢書4

仙台叢書刊行会：「奥羽観蹟聞老志」（上）

宮城県県史編纂委員会：「登米郡上沼村風土記御用書出」宮城県史26

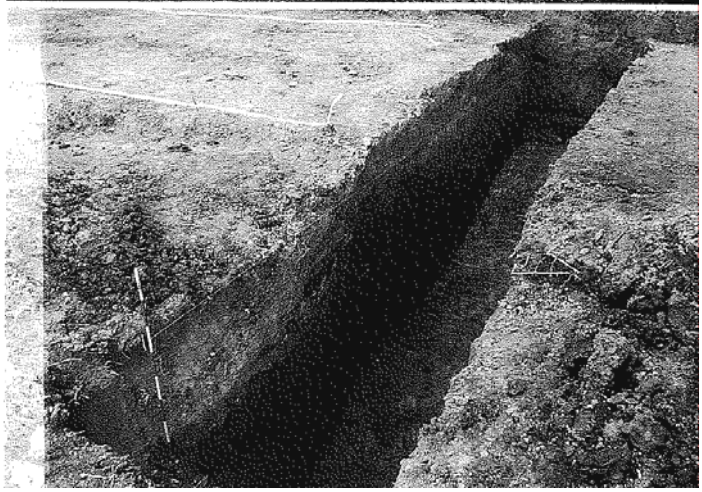
中田町史編纂委員会（1974）：「中田町史」

写　真　図　版

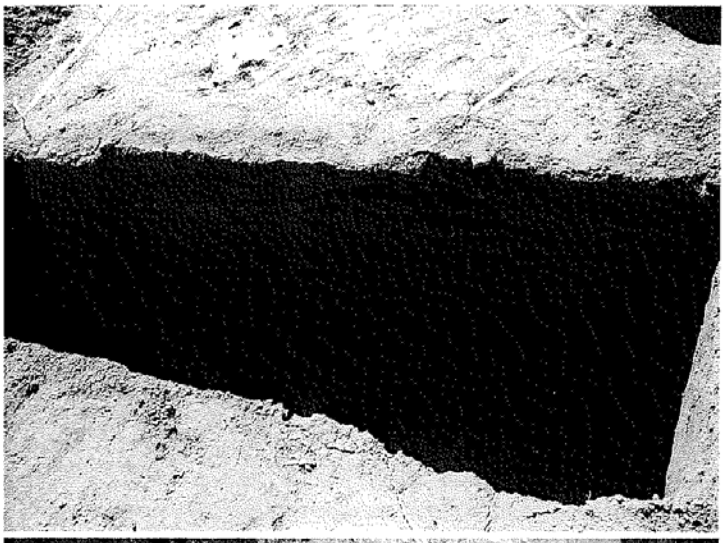
遠　景

調査区

土壁断面
（西壁）



上沼館写真図版 1



土塁断面
（東壁）

土塁下ピット

出土遺物
1．中世陶器甕口縁部
2．中世陶器甕体部
3．中世陶器摺鉢口縁～体部
4．砥石

上沼館写真図版 2

寺池館跡（てらいけたてあと）

目　　次

1. 位置と周辺の遺跡 …… 49
2. 館跡について …… 51
3. 調査の経過 …… 51
4. 調査の成果 …… 52
5. 遺構の年代と性格 …… 56

調 査 要 項

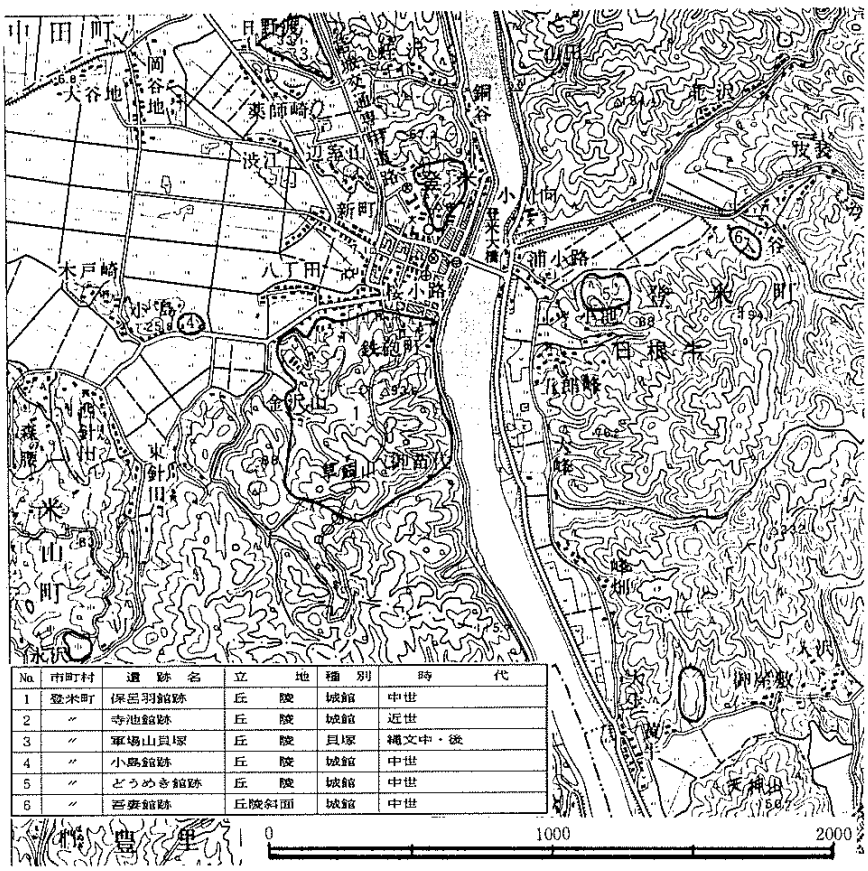
遺 跡 名：寺池館跡
遺跡記号：ＮＣ
所 在 地：登米郡登米町寺池桜小路 105－3
発掘面積：240 ㎡
調査期間：平成元年 7 月 18 日～31 日
調査主体：登米町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・斎藤吉弘・阿部恵

寺池館跡（てらいけたてあと）

1．位置と周辺の遺跡

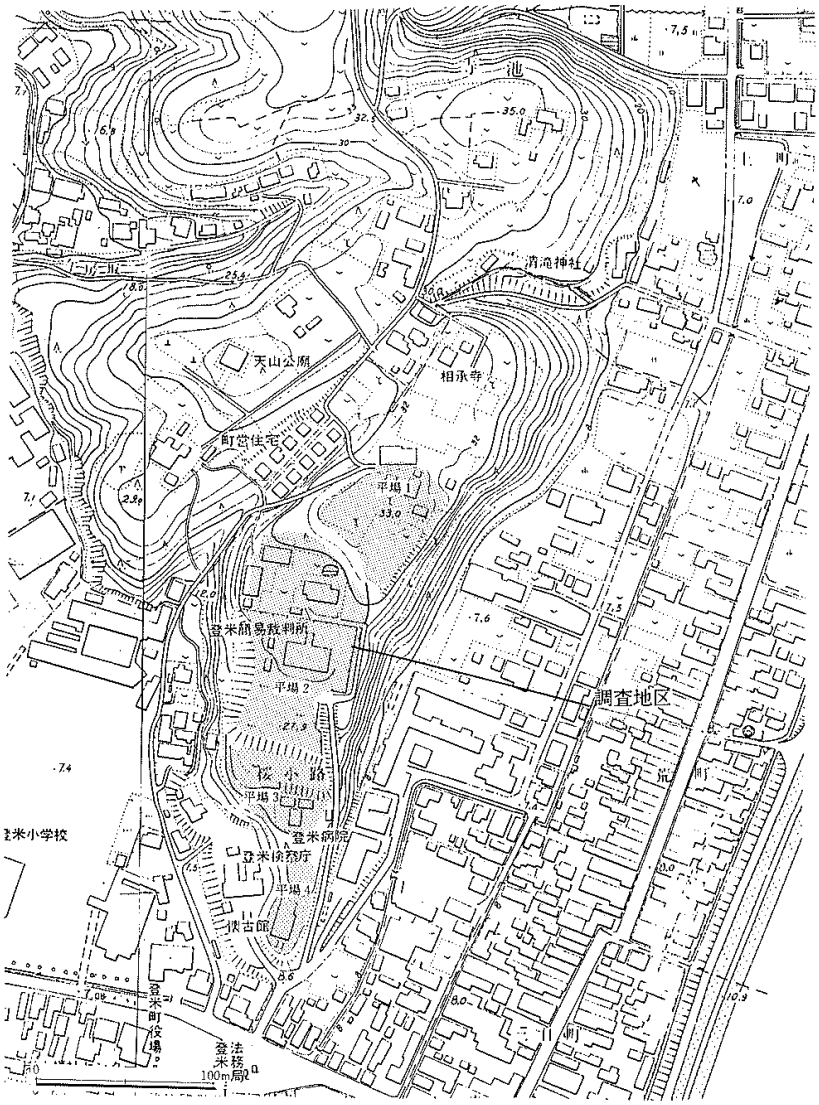
寺池館は登米町寺池字桜小路 105－3 に所在する。登米町は迫川低地の東縁部に位置し、東西に長く、町の中央部を北上川が南流している。迫川低地東縁部には巻地区から寺池地区にかけて、北上川西岸に沿って南にのびる北上山地の分離丘陵がある。寺池館跡はこの丘陵の南端に位置する。館跡の南には北上川右岸の狭隘な沖積地がみられる。館は丘陵と沖積地の一部の自然地形を利用している。

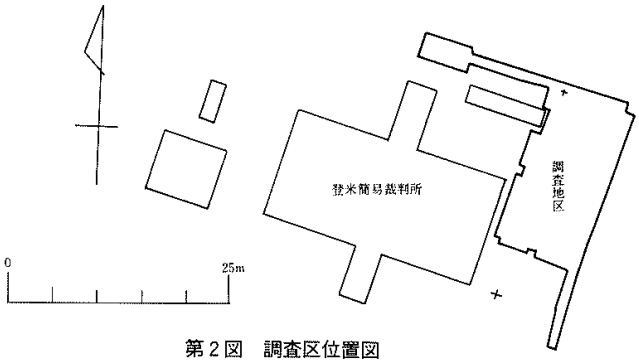
町内には 6 ケ所の遺跡がある。縄文時代の包含地が 1 ケ所、中・近世の城館跡が 5 ケ所である。館跡の分布をみると、本館跡の南側には狭い沖積地を挟んで金沢山の丘陵上に葛西氏の居城と伝えられる保呂羽館跡、小島地区の低い分離丘陵上に小島館跡がある。また、北上川東岸の日根牛地区の丘陵上にどうめき館跡・吾妻館跡がある。



No.	市町村	遺跡名	立地	種別	時代
1	登米町	保呂羽館跡	丘陵	城館	中世
2	〃	寺池館跡	丘陵	城館	近世
3	〃	軍場山貝塚	丘陵	貝塚	縄文中・後
4	〃	小島館跡	丘陵	城館	中世
5	〃	どうめき館跡	丘陵	城館	中世
6	〃	吾妻館跡	丘陵斜面	城館	中世

第１図　地形図


池
清滝神社
天山公園
相承寺
町営住宅
平場1
登米簡易裁判所
平場2
調査地区
桜小路
平場3
登米病院
登米検察庁
平場4
講古館
登米小学校
登米町役場
登米法務局
100m


登米簡易裁判所
調査地区
0
25m

第２図　調査区位置図

2．館跡について

寺池館跡は『伊達世臣家譜』『登米藩史稿』などから慶長 9 年(1604)に水沢から移封された白石氏が修築して居城とし、その後、白石氏は元和 2 年(1616)に伊達の姓を賜り「登米伊達氏」として幕末まで本館に居住したことが知られる。

また、享保 4 年(1719)の『奥羽観蹟聞老志』には館主について

「葛西親臣・今　伊達近江」

の記載がみられる。このことから享保年間には葛西氏に関わる中世の館として使用されていたとの言い伝えがあったと言える。

(規模)

館の範囲は、北は相承寺のある平場から南は懐古館のある平場までの、尾根と斜面にある数段の狭い平場を含めた東西約 120m・南北約 400mとみられる。北は相承寺と清滝神社の間に東から入る小さい谷で背後の丘陵と画されている。東は北上川に面した急な崖で、西は緩やかな傾斜で沢に面している。北西部は北の谷と西の沢が延びて狭い鞍部となり、伊達家の廟のある尾根に続いていく。館内の尾根にある平場は、北部の標高 33mの平場 1、中央部の標高 28mの平場 2、南部の標高 20mの平場 3・標高 16mの平場 4 に分かれる。平場 1・2 の東斜面と平場 4 の西斜面には 1～2 段の狭い平場が認められる。

貞享 4 年(1687)の登米要害屋敷図(宮城県立図書館蔵)では館は居所、二の曲輪からなっている。居所は北部および中央部の平場 1 と平場 2 に相当し、高所を占めている。居所の南に二の曲輪ある。二の曲輪には東西に二つの平場が構かれており、東の平場を通って居所へ至る通路がみられる。居所に登る部分には門が存在していたことが描かれている。この二の曲は平場 3・4 の位置にあたるものと見られる(第 3 図)。

また、城の外周には西辺から南辺をめぐり東辺の中央付近までのびる水堀が巡らされていた。

城外から二の曲輪に入る通路は南と西に設けられている。城内へ至る通路は他に東辺北部から北端の斜面をのぼって居所北辺に至るものがある。

3．調査の経過

今回の調査は仙台地方裁判所登米支部現庁舎東側の新庁舎建築予定地および下水管埋設予定地の約 240 ㎡を対象として実施した。この場所は貞享 4 年の絵図の居所にあたり、南側の一段低い平場 2 の東側部分に位置する。平成元年 6 月 30 日に遺構の確認調査を行ったところ、礎石や柱穴、土壙などが多数検出されたため、9 月 6 日～26 日に再度調査を実施したものである。

表土を除去したところ、調査区の北側から北西にかけてはすぐに地山の岩盤に至ったが、南東側には整地層が認められたことから、この平場の平坦部は切り盛りによる整地事業によって作り山されたもので、整地面はやや南東に傾斜していることがわかった。精査をおこなった結

果、北側の岩盤面で柱穴・土壙・溝・池跡、南東側の整地層上面で礎石・柱穴・溝・整地層中で礎石などが検出され、これらの遺構には何時期かの重複がある事が判明した。礎石や柱穴の配置関係などからみて、調査区内には７棟ほどの建物跡があったものと推定された。

この段階の協議で、これらの遺構は盛土によって保存されることに決定したことにより、検出した遺構を実測して調査を打ち切ったため、各遺構とも概要しか把握できなかった。

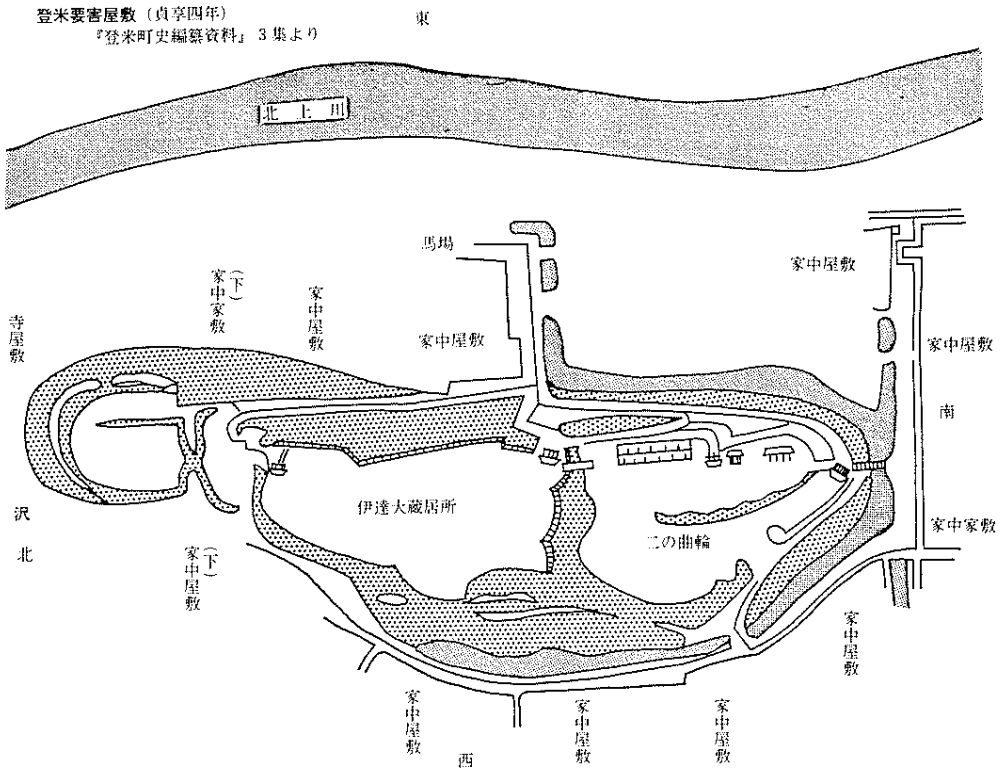
4．調査の成果

遺構と遺物

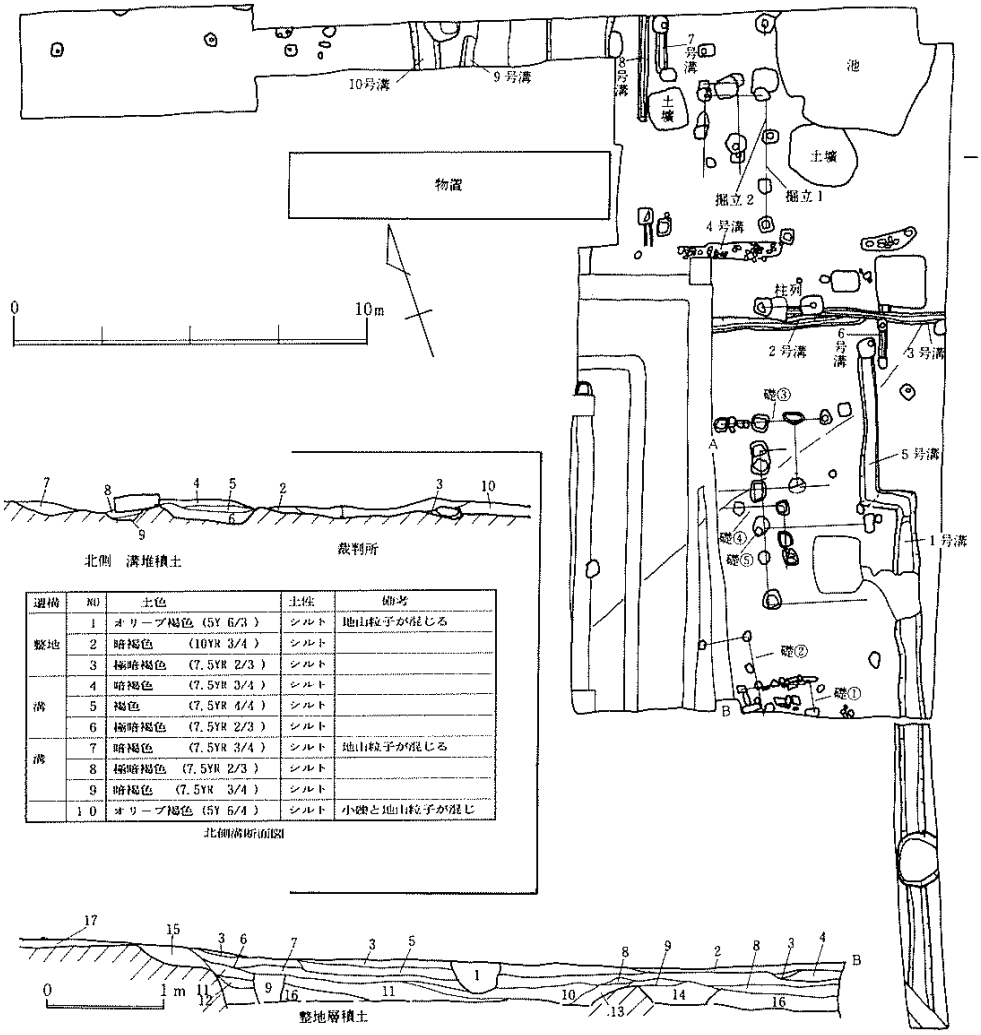
発見された遺構には、礎石建物跡・掘立柱建物跡・溝・土壙・池などがある。

a　礎石建物跡

調査区南側の整地層中と上面で確認されている。調査区外にのびているため規模は不明である。礎石の配置関係から、少なくとも整地層中で検出した礎石で２棟(1・2 号)、整地層上面で検出した礎石で３棟(3・4・5 号)の建物跡が想定できる。整地層中で検出された建物群の柱筋は磁北に近く、整地層上面で検出された建物群の柱筋はそれよりも北にやや振れている。



第３図　登米要害屋敷図

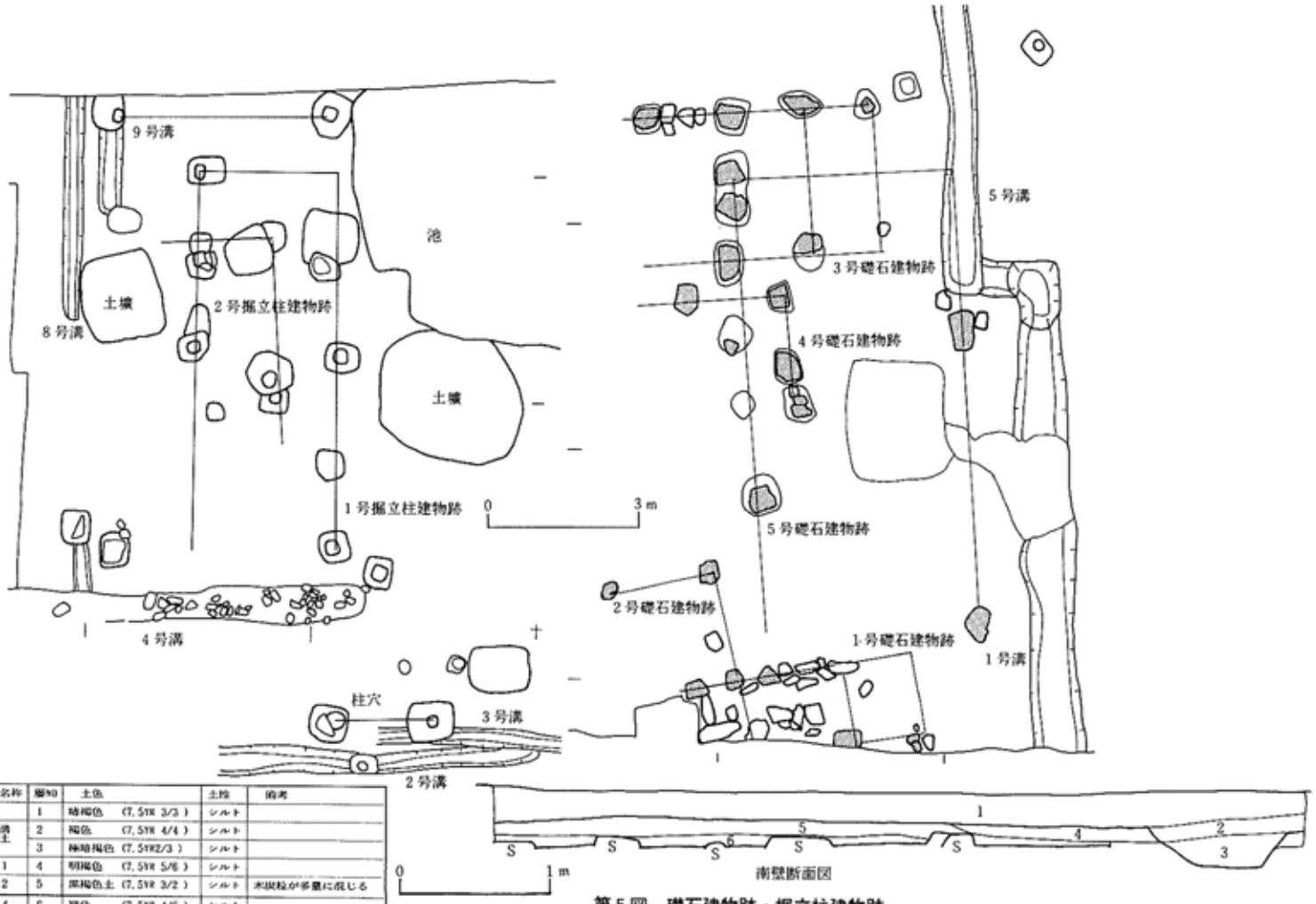


遺構	NO	土色	土性	備考
整地	1	オリーブ褐色（5Y 6/3）	シルト	地山粒子が混じる
	2	暗褐色　（10YR 3/4）	シルト	
	3	極暗褐色　（7.5YR 2/3）	シルト	
溝	4	暗褐色　（7.5YR 3/4）	シルト	
	5	褐色　（7.5YR 4/4）	シルト	
	6	極暗褐色　（7.5YR 2/3）	シルト	
溝	7	暗褐色　（7.5YR 3/4）	シルト	地山粒子が混じる
	8	極暗褐色　（7.5YR 2/3）	シルト	
	9	暗褐色　（7.5YR 3/4）	シルト	
	10	オリーブ褐色（5Y 6/4）	シルト	小礫と地山粒子が混じ

北側溝断面図

遺構	層NO	土色	土性	備考
土壙	1	暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）	シルト	
整地層	2	黒褐色　（10YR 3/2）	シルト	木炭粒が多量に混じる
	3	黄褐色　（10YR 5/6）	シルト	角礫、地山粒子が混じる
	4	褐色　（7.5YR 4/6）	シルト	地山粒子が混じる
	5	極暗褐色　（7.5YR 2/3	シルト	
	6	浅黄色　（2.5Y 7/4）	シルト	小礫、地山粒子が混じる
	7	オリーブ褐色（2.5Y 4/4）	シルト	地山粒子が混じる
	8	暗褐色　（7.5YR 2/3）	シルト	
土壙	9	にぶい橙　（7.5YR 7/4	シルト	地山ブロックが混じる
整地層	10	にぶい褐色　（7.5YR6/3）	シルト	角礫、地山粒子が混じる
	11	にぶい黄褐色（10YR 5/4）	シルト	小礫、地山粒子が混じる
	12	暗褐色　（10YR 3/3）	シルト	
	13	極暗褐色　（7.5YR 2/3	シルト	地山粒子が混じる
土壙	14	褐色　（7.5YR 4/3	シルト	小礫が混じる
整地層	15	明黄褐色　（10YR 7/6）	シルト	小礫が混じる
	16	にぶい黄褐色（10YR 5/3）	シルト	小角礫が混じる
	17	オリーブ黄色（5Y 6/4）	シルト	小角礫が混じる

第４図　遺構配置図



層の名称	層No	土色	土性	備考
盛土	1	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト	
1号焼造横土	2	褐色 (7.5YR 4/4)	シルト	
	3	極暗褐色 (7.5YR2/3)	シルト	
整地1	4	明褐色 (7.5YR 5/6)	シルト	
整地2	5	黒褐色土 (7.5YR 3/2)	シルト	炭粒が多量に混じる
整地4	6	褐色 (7.5YR 4/6)	シルト	
整地5	7	極暗褐色 (7.5YR 2/3)	シルト	

第5図　礎石建物跡・掘立柱建物跡

1 号建物跡

東西 2 間以上、南北 1 間以上の建物の北東隅の礎石 4 個を検出した。礎石の間隔は約 1mである。

2 号建物跡

1 号建物跡と重複している。東西、南北ともに 1 間以上の建物の北東隅の礎石 3 個を検出した。礎石の間隔は約 1.4mである。

3 号建物跡

5 号建物跡と重複している。梁行き 1 間・桁行き 3 間以上の東西棟の東側部分の礎石 6 個を検出している。礎石の間隔は梁行が約 2m、桁行が約 1mで、柱間寸法からみて梁行が 2 間になる可能性がある。

4 号建物跡

東西・南北ともに 1 間以上の建物の北東隅の礎石 3 個を検出したものである。5 号建物跡と重複している。礎石の間隔は東西が 1.3mである。

5 号建物跡

3・4 号建物跡と重複している。梁行 1 間・桁行 3 間以上の南北棟の北側部分の礎石を 5 個検出している。礎石の間隔は梁行が 3mで、桁行が約 2.1mである。

b　掘立柱建物跡

北側の地山面で検出され、2 棟(1・2 号)想定されるがいずれも規模は不明である。

1 号棟建物跡

2 号建物跡の柱穴を切っている。梁行 1 間・桁行 3 間の南北棟の柱穴 6 個を検出したものである。柱間寸法は梁行 1.8m、桁行が約 1.2m等間である。柱痕跡は径 18 ㎝である。

2 号建物跡

梁行・桁行ともに 1 間の南北棟の柱穴 3 個を検出したものである。柱間寸法は梁行が約 1.1m、桁行が約 2.1mである。柱痕跡は径 18 ㎝である。

c　柱列

3 号溝に切られる柱穴 2 個が東西に並んでいる。柱間寸法は 1.2mである。西側の柱穴から銅製品が出土している。これは径 9.3 ㎝、厚さ 2 ㎜で、外面の縁と内面に沈線がめぐる。中央に径 8.5 ㎜の孔があり、内・外面の孔の周辺に幅 3 ㎜でつまみ状のものを止めた痕跡があることから蓋と思われる。

d　溝跡（第 4 図）

11 条確認できた。

1 号溝

整地層上面から掘り込まれた平場の東縁に沿って南北にのびる溝で、14mを確認した。幅 70～80 ㎝、深さは 45～50 ㎝である。堆積土から呉須で花文が描かれた磁器碗の口縁部破片が出土している。伊万里産と見られ江戸中期以降のものと推定される。

2・3・4 号溝

いずれも調査区の中央を東西方向に延びる溝である。2 号溝は東端が 3 号溝にきられている。4 号溝は堆積土中に長さ 10～20㎝ の小礫が多く見られる。遺物は 2 号溝底面から平瓦 1 点(第 6 図 3)、3 号溝の堆積土から平瓦(第 6 図 4)・丸瓦(第 6 図 5)が各 1 点出土している。

3 は凹面に模骨による幅 2.5 ㎝の板状圧痕がある。調整は凹面が横方向のナデ、凸面が縦方向のヘラケズリと斜め方向のヘラナデである。4 は凹面に布目痕がある。調整は凹面がナデ、凸面が縦方向のケズリである。側面と小口にナデがある。5 は凹面に粘土の輪積み痕と布目痕がみられ、側縁がヘラ状工具で面取りされている。凸面の調整は縦方向のナデである。

5・6・7・8・9・10 号溝

6 本とも南北に延びる溝である。5 号溝は 5 号礎石建物跡の東側、7・8 号溝は 1・2 号掘立柱建物跡の西側、9・10 号溝は 11 号溝の西側にある。5～10 号溝は浅く、底面は皿状をしている。

11 号溝

掘立柱建物跡の西側で検出された。8 号溝と 10 号溝の間にある南北の溝である。長さ約 8m 確認し、幅 1.7m、深さ 70 ㎝である。壁はほぼ垂直で、底面は平坦である。堆積土は 3 層に分けられる。3 層の堆積土はグライ化しており、1～2 層は地山ブロックが多い。その状況から堀として使用した後に、整地事業のため埋めたものと思われる。

e　池跡・土壙

掘立柱建物跡の北東で、岩盤に掘り込んだ池を検出した。大きさは東西約 4.5m、南北 3.5 m以上であるが、掘り上げていないため深さは不明である。

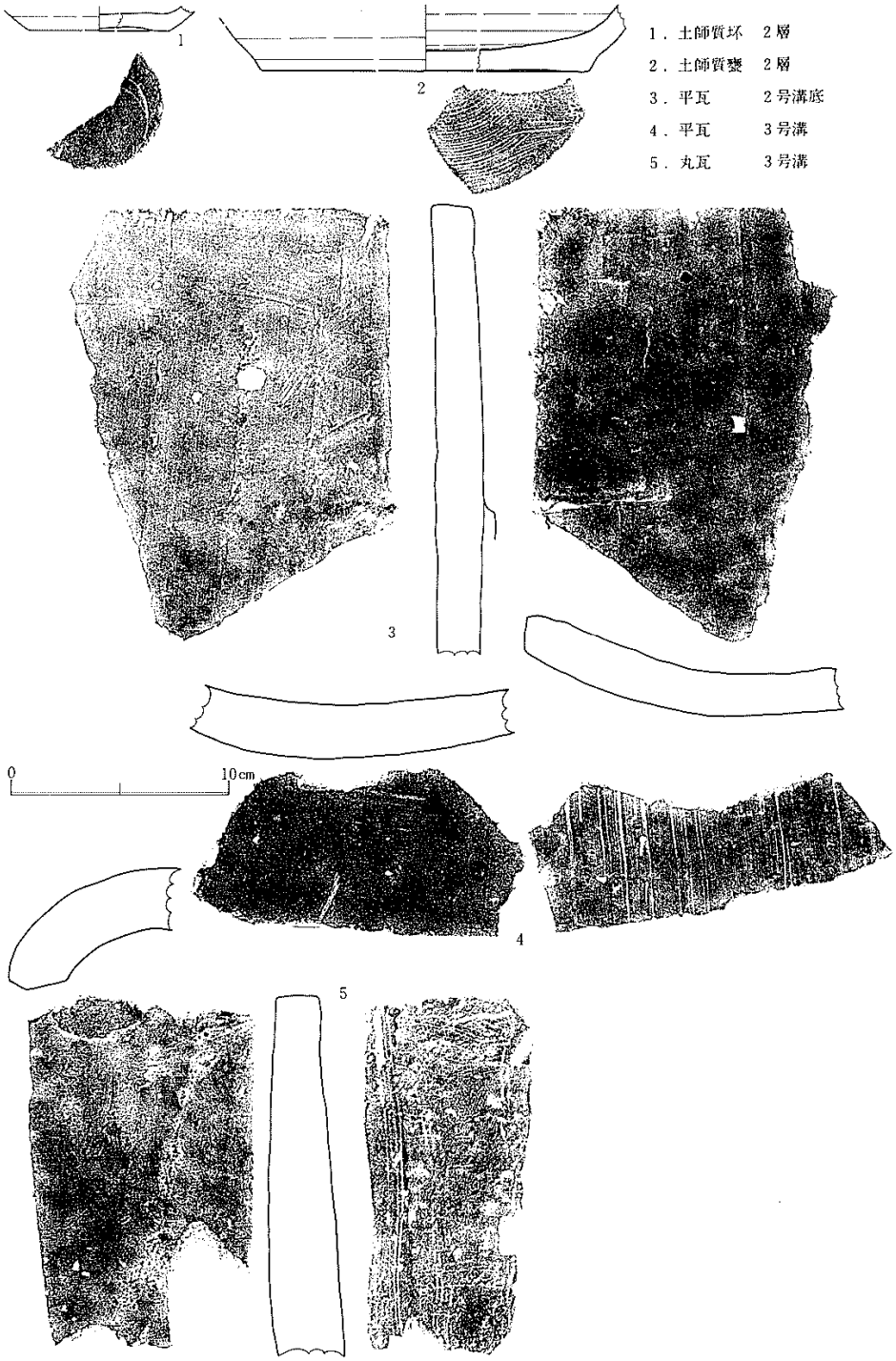
この他、長方形・楕円形の土壙が 4 基検出されている。

f その他

表土下の整地層上に部分的に認められた第 2 層中から土師質土器が 2 点出土している(第 6 図 1・2)。坏と甕の破片でいずれもロクロ調整されたものである。坏の底部外面は全面がヘラケズリされている。甕は糸切りの後、底部周辺がヘラケズリされる。

5．遺構の年代と性格

今回調査を行ったのは貞享 4 年の絵図で居所とされている平場の南東部にあたる地域である。遺構は調査区の北側で掘立柱建物跡・池・土壙・溝が、南側で礎石建物跡が重複して検出されている。これらは中央の 2・1 号溝を境にして北と南で建て替えが 2～3 回見られ、遺構の切



第6図　出土遺物

り合いから建物は各１棟づつ配置されていたようである。

この地域は明治から裁判所が建つまでは畑に利用され、他の建物はなかったといわれている。また、少量ではあるが、近世と見られる遺物も出土している。これらのことから発見遺構は居所の建物に関連する施設とみられ、近世まで遡る可能性が高い。

引用参考文献

登米町史編纂委員会：「登米藩史稿」

小林清治編(1982)：「仙台城と仙台領の城・要害」

仙台叢書刊行会：「伊達世臣家譜」巻之一『仙台叢書』2巻

仙台叢書刊行会：「奥羽観蹟聞老誌」『仙台叢書』　別巻

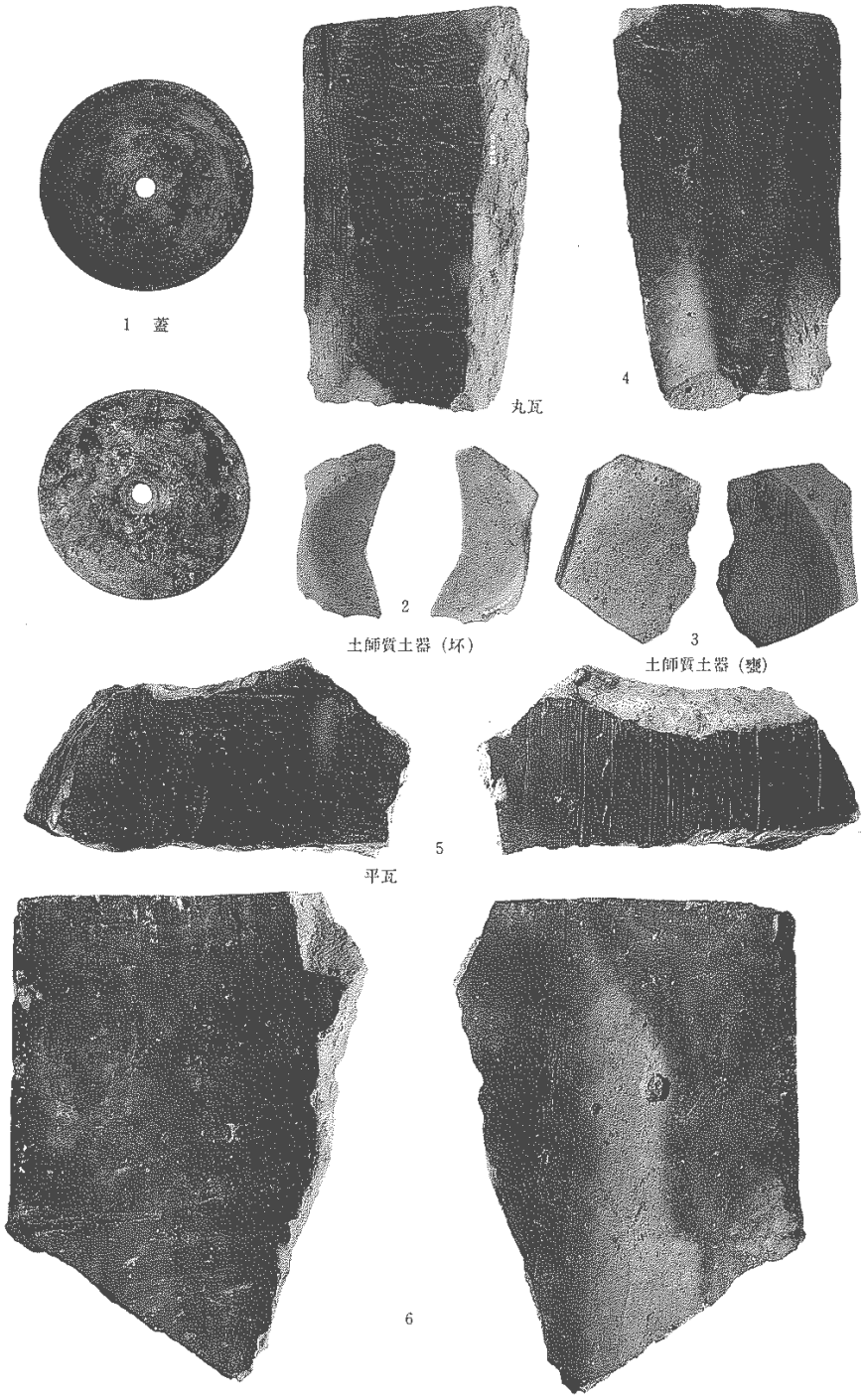
写　真　図　版

調査区全景
（礎石建物跡）

調査区北
掘立柱建物跡

整地層

写真図版 1



写真図版 2

館崎館跡（たてさきたてあと）

目　　次

1. はじめに …… 65
2. 館崎館の規模・構造 …… 66
3. 発掘調査の成果 …… 68
4. 館崎館の年代 …… 68
5. まとめ …… 70

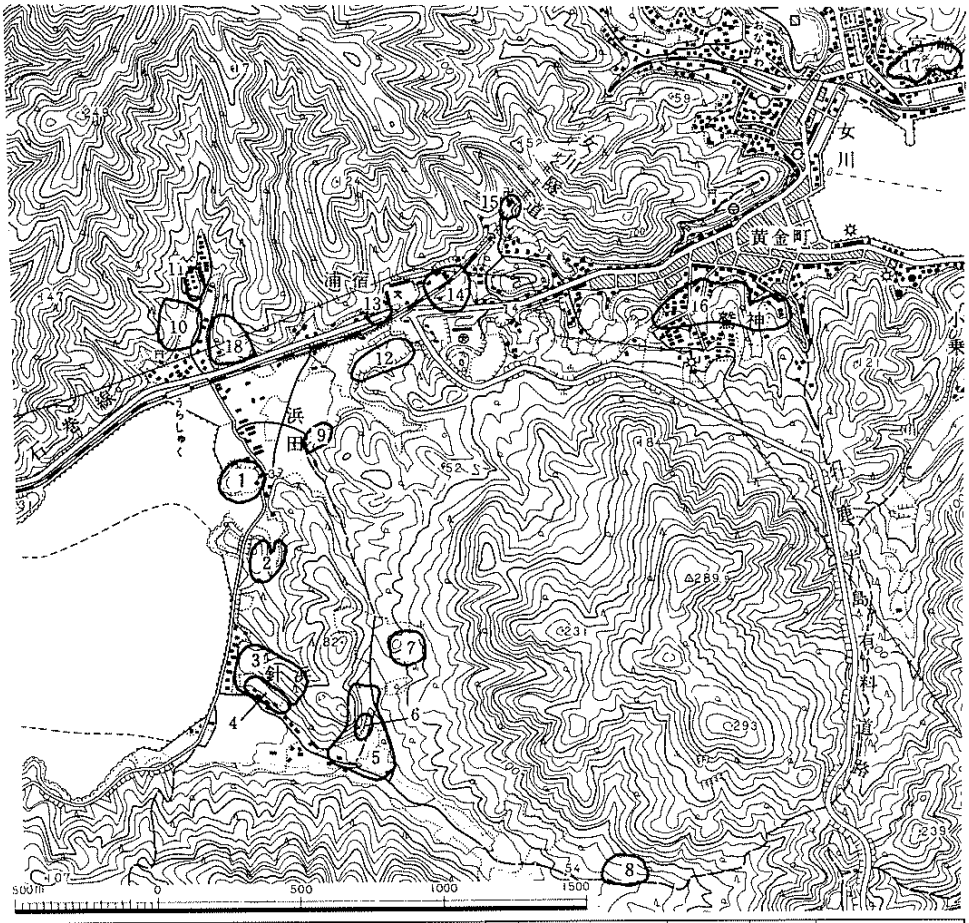
調 査 要 項

遺 跡 名：館崎館跡　ＭＬ（宮城県遺跡番号：73044）
所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町針浜字針浜
発掘面積：160 ㎡
調査期間：平成元年 7 月 24 日～28 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：白鳥良一・菊地逸夫・古川一明・吉田雅之・大和幸生

館崎館跡（たてさきたてあと）

1．はじめに

館崎館は牡鹿郡女川町針浜字針浜にあり、牡鹿半島の付け根に位置する。女川町役場からは南西へ約5km、ＪＲ石巻線浦宿駅からは南へ約0.3㎞の万石浦に面した独立丘陵上に立地している。館崎館は石巻から女川へ到る交通上の要衝に位置するといってよいであろう。女川町の地形を概観すると北上山地が北上川（追波川）で分断され、その南は牡鹿半島として太平洋へ



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	館崎館跡	分離丘陵	城館	中世	10	浦宿尾田貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文後・晩
2	小浦遺跡	丘陵	包含地	縄文　前～後	11	浦宿C貝塚	丘陵斜面	包含地	縄文
3	若塔場館跡	丘陵斜面	城館	中世	12	十二神遺跡	丘陵端	包含地	縄文中
4	針浜墓地遺跡	丘陵	包含地	縄文前～後・古代	13	門前一小前遺跡	沖積地	包含地	縄文
5	花坂遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	14	門前ガード脇遺跡	沖積地	包含地	縄文中
6	針浜経塚	丘陵麓	経塚	中世	15	照源寺境内遺跡	丘陵中腹	包含地	古代
7	館の森館跡	丘陵	城館	中世	16	内山田遺跡	丘陵	包含地	縄文前～晩　古代
8	善五郎館跡	丘陵斜面	城館	中世	17	田の畑遺跡	丘陵端	包含地	縄文中晩弥生古代
9	浦宿浜田遺跡	丘陵端	包含地	古代	18	浦宿B遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文前・中　古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

突出する。半島は三陵海岸の延長となり、いわゆるリアス海岸で、湾と岬が交互に入り込み、丘陵が海に張りだす地形になる。女川町は北は雄勝町に接し、西と南西は石巻市と万石浦に、南は牡鹿町に接し、東は太平洋に面している。

女川町には縄文時代から近世までの遺跡が数多く分布している（宮教委：1988）。この中では縄文時代の尾田峯貝塚、出島貝塚などが著名である。中世の遺跡では城館・経塚があり、またいくつかの板碑も調査されている。城館の多くは針浜地区に集中している（第1図）。しかし宮城県遺跡地図に城館名・位置を記載する際、根拠にした調査とその文献（紫桃正隆：1973）があるが、その調査の成果の一部には中世の館跡としての遺構があるかどうか疑問をもたれているものがある。その例として石塔場館跡は位置を比定してあるが、『日本城郭大系第三巻宮城県』では詳細不明としている（藤沼邦彦他：1981）。さらに善五郎館跡は近世初期の屋敷地ではないかという指摘がなされている（藤沼地：1981）。針浜地区の城館跡として位置の確かなのは館崎館のほかには館の森館だけになる。この館の南には針浜経塚がある。板碑は針浜をはじめ、飯子浜・女川浜・尾浦にあるが、針浜には建治から天正までの記年銘を持つ鎌倉時代末期から戦国時代の3基の板碑がある。さらに出島には嘉暦・貞和の記年銘を持つ鎌倉時代末期から南北朝時代の板碑がある。

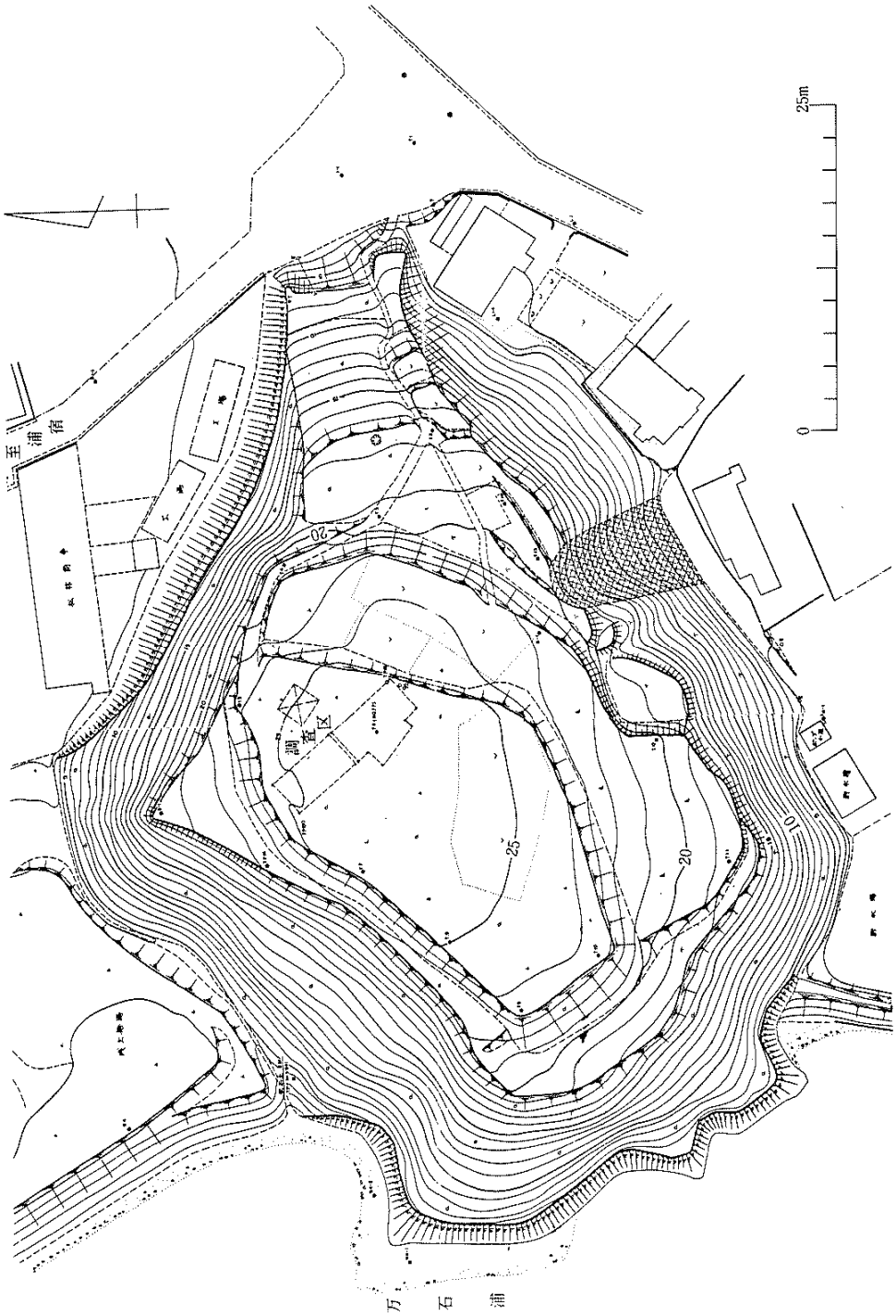
2．館崎館の規模・構造

測量図（第2図）をもとにして、館崎館の構造、調査区の館内での位置についてみていくことにする。館が標高30m足らずの独立丘陵上にあることは前に述べた。この丘陵は宅地化や崩落などで形をかえているが北東から南西に長く延びている。平場はいずれも標高15m以上の高所にあり、丘陵の自然地形に規制されて北東から南西に長い。丘陵中央の最高所には、長軸60m×短軸30mほどの平坦でもっとも大きい平場があり、本丸に相当する。

この本丸部分を取り囲むように一段低い平場がある。この平場は大きく分けて3つの部分からなる。第1の部分は本丸の東から南に接した二の丸に相当する平場で、長さ80m×幅15mの規模で本丸についで大きい。第2は二の丸の南西部に接続し、本丸に沿うようにめぐり北まで延びる細長い5m前後の幅で100mほどの長さの平場である。腰郭に類似する平場で二の丸の南西部から第3の部分へ接続する通路の役割を果たしたと考えられる。第3の部分は北に延びた東西20m×南北15mほどの三角形を呈する平場である。

最後に二の丸の一段下で東に接する平場がある。東西 15m×南北 30mほどのやや東に傾斜した平場である。山麓から平場へ登る通路は東からこの平場を通り、北へ折れる今も利用されている山道しかないようである。

館崎館は独立丘陵を利用して、自然地形を生かしながら丘陵の高所に3段の平場を構築したことがわかる。



第２図　館崎館跡全体図

3．発掘調査の成果

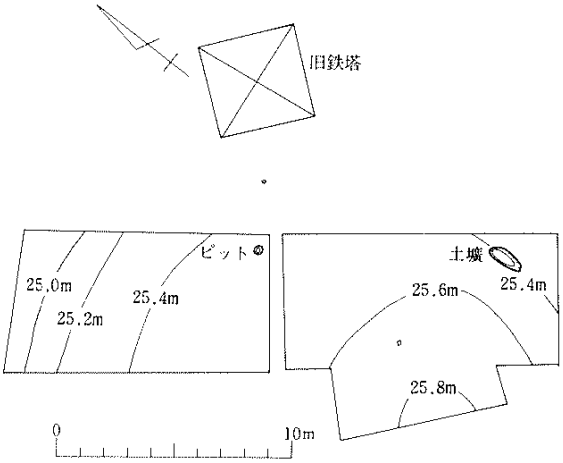
鉄塔の移転予定地約100㎡とその周辺約100㎡を対象とし、約160㎡の発掘調査を行なった。調査区の位置は本丸の北東部分になる（第2図）。調査は厚さ約20㎝の表土を除去し、地山岩盤面で精査を行い、遺構の確認を行なった。確認した遺構については縮尺1/20で実測、調査区全体については縮尺1/100で平板測量を行い、同時に写真撮影も行なった。さらに調査区を含む館跡全体については測量および縮尺1/250の測量図作成を委託した。

調査の成果としては、（第3・4図）調査区のほぼ中央東寄りのところで、ピットを一個確認した。直径は約20㎝で、深さは確認面から20㎝ほどであった。また調査区の南端から土壙を検出した。南北に長い土壙で、長径1.4m、短径約0.6m、深さ約0.2mの楕円形の土壙で、底面北寄りのところで焼面を認めた。遺物の出土がなく時期や館跡との関係は不明である。表土から土器が数点出土し、摩滅した破片のため図示はできないが、縄文土器と考えられる。

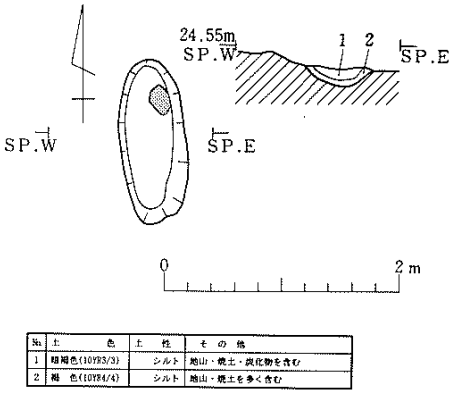
今回の調査区は前述したように本丸の北東部にある。前述したように柱穴はほとんどなく、検出したピットの場所から東では掘立柱建物は建てにくい。とすれば本丸の北東部分、面積では約三分の一の部分には建物などの施設はなかったと考えられる。

4．館崎館の年代

館崎館の築城時期・築城者・存続年代は文書・記録がなく、また遺物の出土もないため不明とせざるをえない。従来から板碑と城館・寺社・屋敷との結びつきはいわれてきた。そして板碑（群）の存在から城館との関わり・年代を推定したものとして北上町要害館跡に例がある。（小井川：1979）要害館の築城から存続年代までを要害館跡の麓の相川古碑群の記年銘から鎌倉時代末から室町時代頃と推定している。



第3図　調査区全体図



第4図　土壙平面・断面図

針浜の板碑は群と呼ぶには少ないが、館から南へ約１㎞の距離にあり、町内で唯一の板碑の集中地点でもある。その点で館崎館と建治・応仁・文明の記年銘を有する板碑とはなんらかの年代的な関わりがあった可能性はあろう。

『伊達正統世次考』巻之八上　天文十七年正月十八日条に「特に末永一類の進退の為なり（中略）能登帰郷に就いて、書状を以て之を言う委曲能登に伝え言う、不具」とあり、上記のような本文に続けて「今按ずるに」という文言で始まる注釈が付く。それには「（前略）能登は末永氏、葛西氏の家臣にし而、牡鹿郡の内に住すと云う」とある。つまり牡鹿郡に居住する「末永能登」なる有力な人物がいたことがわかる。また『本吉郡北方津谷村代数有之御百姓書出』の末永惣兵衛の項に「右之者先祖之儀ハ（中略）末永三郎左衛門尉清泰右清重公一家ニ而（中略）清泰より同苗能登守迄十五代牡鹿郡ニ居城」とある。末永氏が牡鹿郡のどこに居住したかは不明であるが、館崎館が末永氏に関わる館であった可能性もある。

5．まとめ

1. 館崎館跡は石巻から女川方面にむかう交通上の要衝に立地している。
2. 館跡は独立丘陵上にあり、3 段の平場を構築していて、本丸・二の丸とみなせる平場や通路状の平場を確認した。
3. 土壙を検出したが時期性格ともに不明で、館に直接関係のある遺構遺物は検出されなかった。
4. 南北朝時代あるいは戦国時代に葛西氏や末永氏との関わりで館が利用された可能性がある。

引用参考文献（五十音順）

風土記御用書出（安永風土記）『宮城県史』第26巻

女川町誌編纂委員会（1960）：「女川町誌」　女川町

小井川　和夫（1979）：「要害館跡」　宮城県文化財発掘調査略報（昭和53年度分）宮城県教育委員会

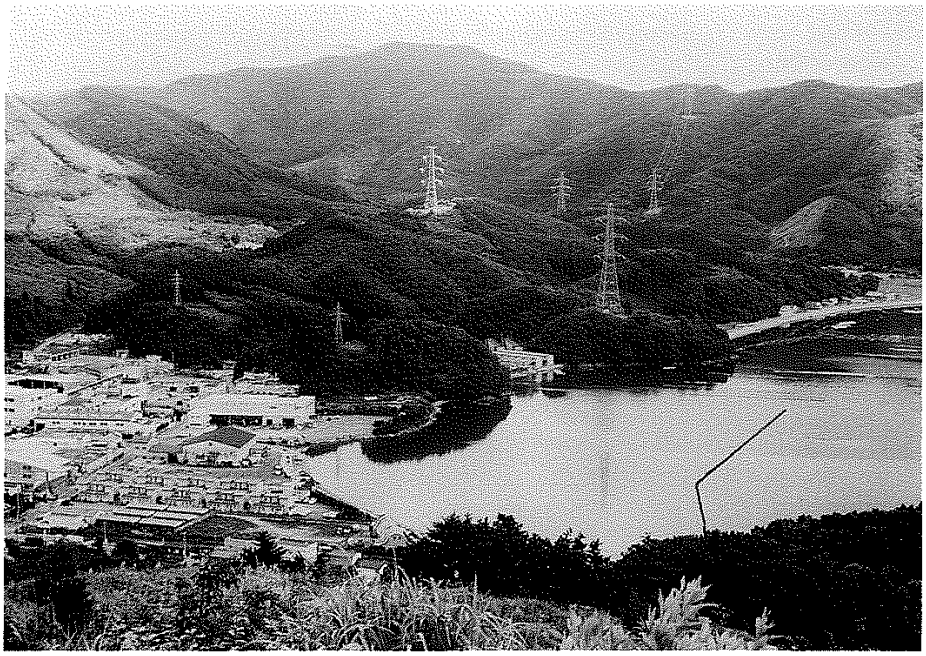
小林清治校注（1967）：「伊達正統世次考」『伊達史料集（下）第二期戦国資料叢書』新人物往来社

紫桃正隆　　（1973）：「史料　仙台領内古城・館」第二巻　　仙台宝文堂

藤沼邦彦・小井川和夫他（1981）：「日本城郭大系3」宮城県　　新人物往来社

宮城県教育委員会（1988）：「宮城県遺跡地図」

写　真　図　版



館崎館遠景（北より）

土 壙

写真図版１

出島貝塚（いずしまかいづか）

目　　次

Ⅰ：遺跡の立地と環境 …… 77
Ⅱ：調査の方法と調査の経過 …… 78
Ⅲ：調査の成果 …… 79
Ⅳ：まとめ …… 89

調 査 要 項

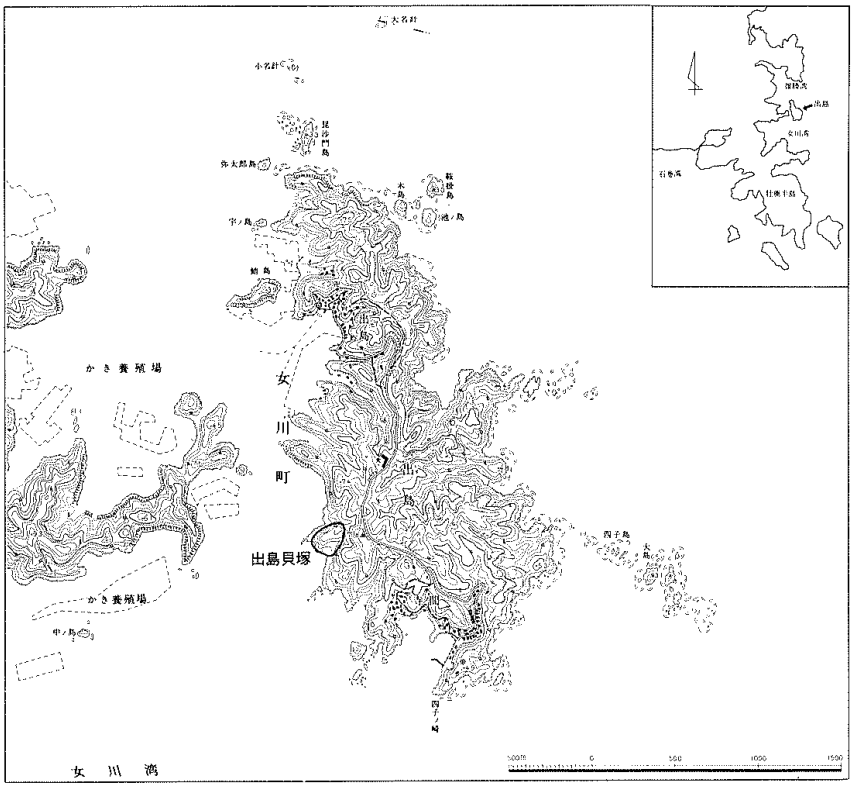
遺 跡 名：出島貝塚
遺跡記号：ＭＮ
遺跡番号：73005
所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町出島字寺間山下
調査面積：約 60 ㎡
調査期間：1989 年 8 月 1 日～8 月 8 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝　白鳥良一　真山悟　菊地逸夫　古川一明　吉田雅之　大和幸生
調査協力：女川町教育委員会　宮城県石巻土木事務所

出島貝塚（いずしまかいづか）

Ⅰ　遺跡の立地と環境

出島貝塚は牡鹿郡女川町出島字寺間山下に所在する。女川町は宮城県北東部に位置し、リアス式海岸で著名な三陸海岸の最南端にある牡鹿半島の付け根付近にあたる。遺跡の所在する出島は女川港から北東に約９㎞の海上に浮かぶ南北 3.8 ㎞、東西 1.5 ㎞、面積２㎢の小島で、対岸の岬との距離は 300ｍである。東岸は太平洋に、西岸は女川湾と雄勝湾に面している。遺跡の所在する西岸は東岸に比べ内湾に面しているために穏やかな自然環境で、現在も出島と寺間の集落は西側に立地している（第１図）。

本貝塚は出島の南西岸に位置し、半島状に突き出た標高約 40ｍの台地及びその斜面に立地している（第２図）。遺物が密に分布している範囲は大きくふたつに分かれ、南斜面の貝塚を四子館貝塚、北斜面の貝塚を山下貝塚と呼称していたが、現在は出島貝塚として統一している。ここでは混乱を避けるために山下貝塚を出島貝塚・山下地点、四子館貝塚を出島貝塚・四子館地



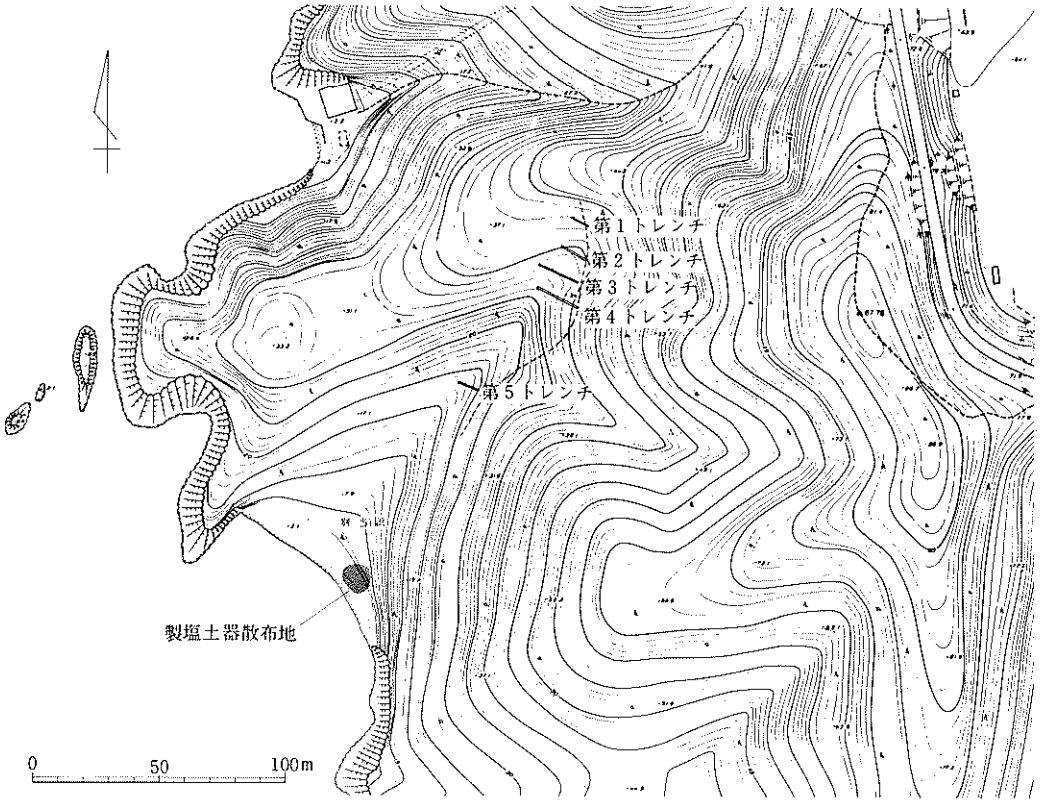
第１図　出島貝塚位置図

点と呼称する。

昭和30～40年代に小牛田農林高等学校郷土研究班が調査を行い、縄文前期・縄文後期の貝層を発掘したのは山下地点である(辺見鞆高：1971～1974、1977)。山下地点においては前期初頭の土器や多量の後期前葉の土器が出土した。また、石器、骨角器、土製品などや人工遺物やカキ、アワビ、ウニ、マグロ、シカなどの自然遺物が多数出土し、当時の出島貝塚での豊かな生活の一端が解明された。

II　調査の方法と調査の経過

今回の調査は出島と寺間を結ぶ県道の改良工事計画に関連する遺跡保存協議のための確認調査である。計画によれば本貝塚の立地している台地南向かいの尾根が切り盛りされ、斜面下にある本貝塚の遺物包含層の末端が盛土される可能性があった。このためにその遺物包含層の広がりを調べることを目的とし、台地南側斜面(四子館地点)の沢に直交して計画道路のセンター杭を基準に五本のトレンチを設定した。発掘面積は約60㎡である。遺構等は検出されなかったが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器などが出土した。



第2図　遺跡の立地と調査区

III　調査の成果

1　基本層位

調査区の基本層位は5枚の層に分けることができるが、第1トレンチでは2層の下に基盤の岩盤が確認でき、第2・5トレンチでは3層以下は未調査で、他はすべての層を確認した。第1・2トレンチの全域と第3・4トレンチの堆積土は南と北では異なるが、沢の傾斜や土砂の供給源の差に起因しているものと考え、基本的にほぼ同時期の堆積と考えた。

1 層：10ＹＲ4/3 のにぶい黄褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は約100cm である。縄文土器、少量の須恵器と土師器が出土している。

2 層：10ＹＲ2/2 の黒褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は 30cm～50 cmである。縄文土器、土師器などが出土している。

3 層：10ＹＲ4/4 の褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は 30 cm～40 cm である。炭化物を均一に少量含む。多量の縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。

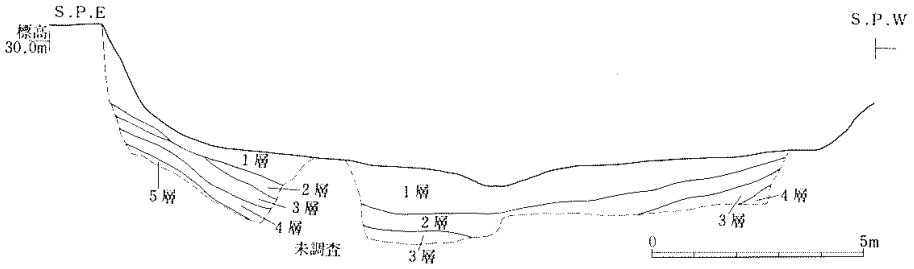
4 層：10ＹＲ3/2 の黒褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は 20 cm～30 cmである。縄文土器が若干出土した。

5 層：10ＹＲ5/3 のにぶい黄褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。小角礫の混入の割合が高くなる。無遺物層である。

これら調査区の各層は急斜面下の沢地に堆積し、時代の異なる縄文土器、弥生土器、土師器が混入していることから、いずれの層も集落のあったと思われる台地から廃棄されて堆積した遺物包含層が古代以降に崩落し、再堆積したものと認識した。また、遺物はトレンチ北側の斜面落ち際に集中し、沢の中央付近でやや希薄になるが、ほぼトレンチ全域で認められた(第 2 図の破線部が遺物包含層の範囲を示す)。

2　出土遺物

今回の調査では遺物包含層の広がりを確認することを目的としたために調査面積が狭かったが、遺物は比較的多量に出土した。しかし、前述の通り調査区の各層が遺物包含層の再堆積層のため、時期の異なる遺物が混入し、遺物の年代的なまとまりに欠けている。したがって、こ



第３図　基本層位（第３トレンチセクション図）

こでは各層の遺物を一括して扱い、土器、土製品、石器の順に説明を加えていきたい。

(1)土　器

出島貝塚からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。このなかでも縄文土器が多数を占めているが、すべて破片で、完全な形に復元できるものはない。今回報告する資料は破片のなかでも器形、文様などに特徴を持つ口縁部・胴部資料を抽出し、分類したものである。以下ではこれまでの研究成果に基いて年代的な位置付けを検討していきたい。

1)：縄文土器

文様により口縁部資料はⅠ類～Ⅶ類に、胴部資料はａ類～ｇ類に分類できた。口縁部・胴部資料の順にその概略について述べる。

口縁部資料

Ⅰ類(第4図,1～2)

隆線などにより貼り付け文様や区画が行われるもので、変形「Ｓ」字状隆沈線文(1)と楕円状隆線文が施されているもの(2)がある。器種は深鉢である。

Ⅱ類(第4図,3～22、第5図,1～3)

沈線により蕨手文や渦巻状沈線文などが施されるもので、文様の種類には以下のようなものがある。器種はすべて深鉢である。

蕨手文を有するもの(3～4)。方形区画文を有するもの(5)。下垂沈線文を有するもの(6～7)。「ノ」字状沈線文を有するもの(8～13)。無文に沈線が施されるもの(14～16)。渦巻状沈線文を有するもの(17～18)。多状沈線文を有するもの(19)。横位沈線文を有するもの(20～22)。弧状沈線文を有するもの(第5図,1～3)などが含まれる。

Ⅲ類(第5図,4～19)

平行沈線と帯状縄文による文様が施されるもので、以下の2類がある。4～17は深鉢、18・19は鉢あるいは浅鉢である。

ａ)多条の平行沈線と幅の狭い帯状縄文から文様が構成されるもの(4～9)。

ｂ)平行沈線と幅の広い帯状縄文から文様の構成されるもの(10～19)。

Ⅳ類(第5図,20～21)

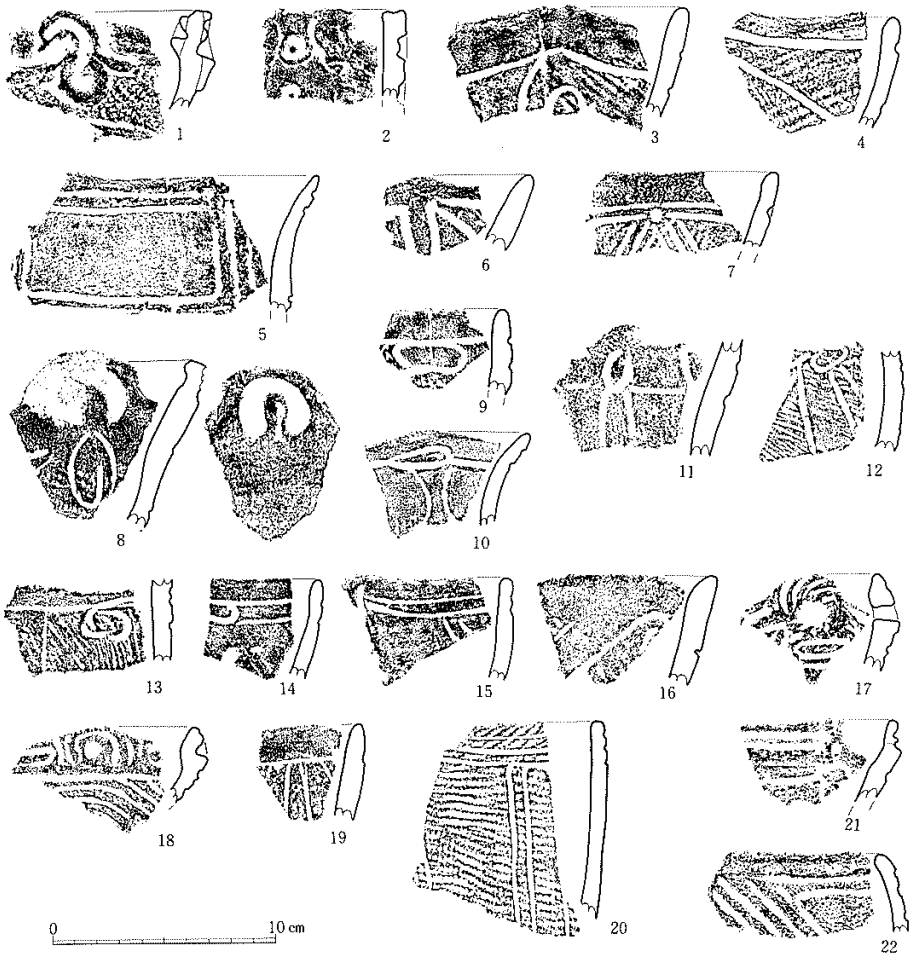
連続竹管文や刺突文が施されるもの。器種は深鉢である。

Ⅴ類(第5図,22～23)

地文だけのもの(撚糸文)。器種は深鉢である。

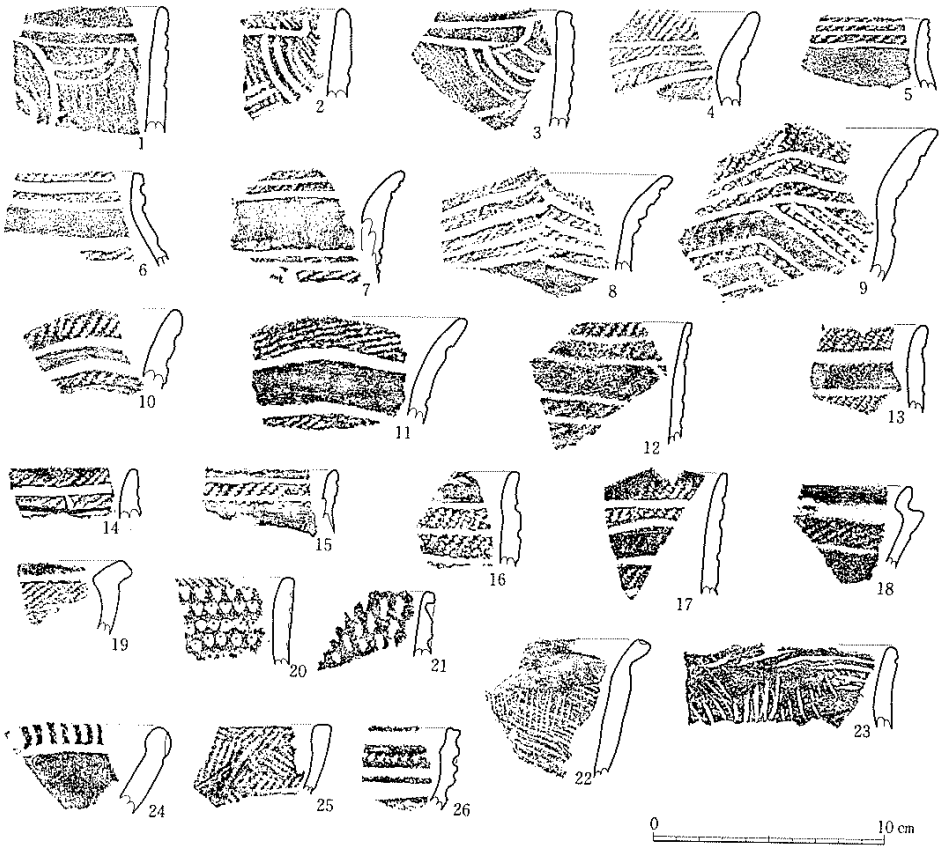
Ⅵ類(第5図,24～25)

口縁部に沈線と刻み目が施されるもの(24)や、入組文に羽状縄文が充填されるもの(25)がある。24は鉢で、25は深鉢である。



No	地区・層位	器種	部位	地　文	文　様　の　特　徴	図版
1	4トレ・ 3層	深鉢	口縁部	RL縄文	変形「S 」字状隆沈線文、盲孔	2- 1
2	4トレ・ 4層	深鉢	口縁部	なし	楕円状隆線、連続盲孔	2- 2
3	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	RL縄文	蕨手文	2- 3
4	3トレ・ 4層	深鉢	口縁部	LR縄文	斜行沈線文（蕨手文）	2- 4
5	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	R撚糸文	刺突付方形区画沈線文	2- 5
6	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	刺突付下垂沈線文	2- 6
7	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	刺突付下垂沈線文	2- 7
8	3トレ・ 4層	深鉢	口縁部	RL縄文磨消	「ノ」字状沈線文　・内面に沈線	2- 8
9	3トレ・1 ～2 層	深鉢	口縁部	なし	「ノ」字状沈線文	2- 9
10	4トレ・ 2層	深鉢	口縁部	なし	「ノ」字状沈線文	2-10
11	3トレ・ 3層	深鉢	口縁付近	R撚糸文磨消	「ノ」字状沈線文	2-11
12	3トレ・ 3層	深鉢	口縁付近	R撚糸文磨消	「ノ」字状沈線文	2-12
13	3トレ・ 3層	深鉢	口縁付近	R撚糸文磨消	「ノ」字状沈線文	2-13
14	4トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	沈線文、補修孔	2-14
15	5トレ・2 ～3 層	深鉢	口縁部	なし	沈線文	2-15
16	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	沈線文	2-16
17	4トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	渦巻状沈線、貫通孔	2-17
18	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	渦巻状沈線文、盲孔	2-18
19	4トレ・ 3層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	多条沈線文	2-19
20	4トレ・ 1層	深鉢	口縁部	LR縄文	横位沈線文	2-20
21	4トレ・ 2層	深鉢	口縁部	なし	横位沈線文	2-21
22	3トレ・ 3層	深鉢	口縁部	なし	横位沈線文	2-22

第４図　縄文土器　口縁部資料（１）



No	地区・層位	器種	部位	地　文	文　様　の　特　徴	図版
1	4トレ・3層	深鉢	口縁部	縄文	弧状沈線文	2-23
2	4トレ・1層	深鉢	口縁部	LR縄文充填	弧状沈線文，貫通孔	――――
3	4トレ・2層	深鉢	口縁部	撚糸文	弧状沈線文	2-24
4	4トレ・2層	深鉢	口縁部	LR縄文充填	平行沈線文，帯状縄文	2-25
5	4トレ・2層	深鉢	口縁部	RL縄文充填	平行沈線文，帯状縄文	2-26
6	4トレ・2層	深鉢	口縁部	RL縄文充填	平行沈線文，帯状縄文	2-27
7	3トレ・2層	深鉢	口縁部	LR縄文充填	平行沈線文，帯状縄文	2-28
8	4トレ・2層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文	2-31
9	4トレ・3層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文	2-30
10	4トレ・2層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文	2-29
11	5トレ・2層	深鉢	口縁部	LR縄文充填	平行沈線文，帯状縄文	2-32
12	4トレ・3層	深鉢	口縁部	LR縄文充填（磨消）	平行沈線文，帯状縄文	――――
13	4トレ・1層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文，盲孔	2-33
14	4トレ・3層	深鉢	口縁部	LR縄文	平行沈線文，帯状縄文	2-34
15	4トレ・1層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文	2-35
16	5トレ・2～3層	深鉢	口縁部	LR縄文充填（磨消）	平行沈線文，帯状縄文	2-36
17	4トレ・3層	深鉢	口縁部	LR縄文磨消	平行沈線文，帯状縄文	2-37
18	4トレ・3層	鉢？	口縁部	LR縄文	平行沈線文，帯状縄文	2-38
19	5トレ・2～3層	鉢？	口縁部	LR縄文	平行沈線文，帯状縄文	2-39
20	4トレ・2層	深鉢	口縁部	なし	連続竹管文	2-40
21	4トレ・3層	深鉢	口縁部	なし	連続刺突文	2-41
22	4トレ・3層	深鉢	口縁部	R撚糸文		2-42
23	3トレ・3層	深鉢	口縁部	R撚糸文	横位沈線	2-43
24	5トレ・2層	鉢	口縁部	なし	平行沈線，刻み目	3-28
25	5トレ・2層	深鉢	口縁部	LR/RL 羽状縄文充填	入組文	3-29
26	2トレ・2層	深鉢	口縁部	なし	刺突付横位沈線，口縁部に沈線	3-38

第5図　縄文土器　口縁部資料（2）

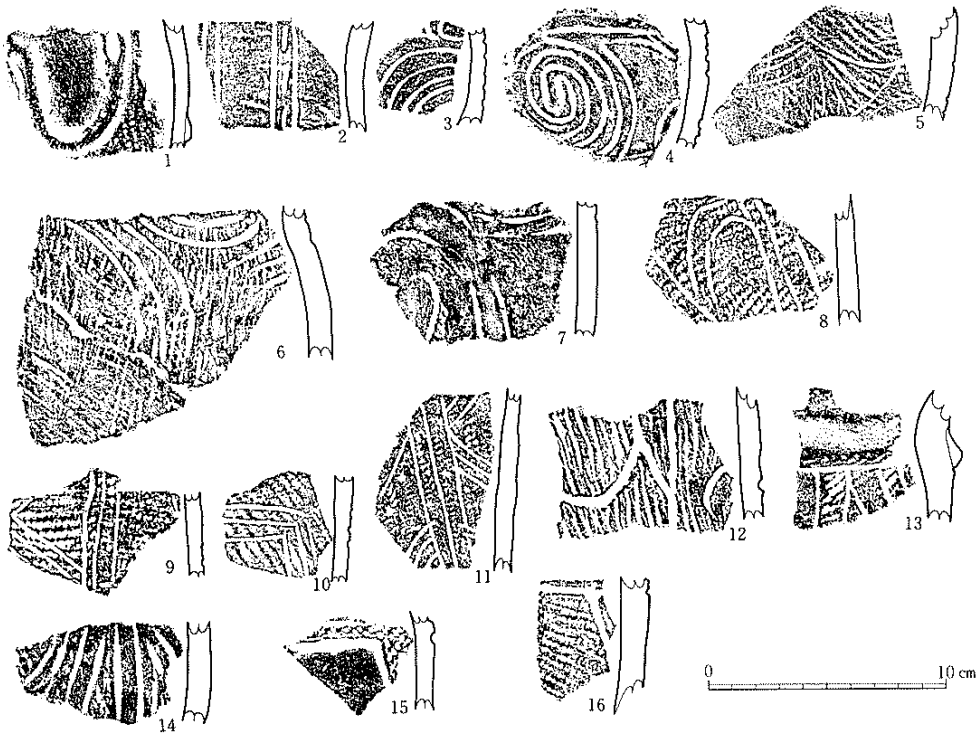
Ⅶ類(第5図,26)

体部に平行沈線、刺突が入り、口唇部に沈線が入る深鉢である。

また、胴部資料については口縁部資料の各類型に含まれるものがあり、Ⅰ類には(第6図1)、Ⅱ類には(2〜第7図,2)、Ⅲ類aには(3〜6)、Ⅴ類には(7)、Ⅵ類には(13〜14)などが相当する。これらの他に、口縁部資料の類型に含められないものとして、

a類：区画沈線曲線文や平行沈線文が施されている深鉢(第7図,3〜6)

b類：横位沈線が施される深鉢(8)。



No.	地区・層位	器種	部位	地　文	文　様　の　特　徴	図版
1	3トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文	楕円状陸線文	3-1
2	4トレ・2層	深鉢	胴部	LR縄文磨消	下垂沈線、破沈線文	3-2
3	4トレ・2層	深鉢	胴部	なし	渦巻状沈線文	3-3
4	4トレ・3層	深鉢	胴部	なし	渦巻状沈線文	3-4
5	4トレ・2層	深鉢	胴部	RL縄文	渦巻状沈線文	3-5
6	3トレ・3層	深鉢	胴部	R撚糸文	渦巻状沈線文	3-6
7	3トレ・3層	深鉢	胴部	R撚糸文（磨消）	渦巻状沈線文	3-7
8	4トレ・2層	深鉢	胴部	LR縄文	多条沈線文	3-8
9	3トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文	多条沈線文	3-10
10	3トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文	多条沈線文	3-9
11	2トレ・2層	深鉢	胴部	LR縄文	多条沈線文	3-11
12	3トレ・4層	深鉢	胴部	R撚糸文	多条沈線文	3-12
13	4トレ・2層	深鉢	胴部	LR縄文充填（磨消）	多条沈線文	3-13
14	4トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文充填（磨消）	多条沈線文	3-14
15	4トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文磨消	方形区画沈線文	――
16	3トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文	刺突付方形区画沈線文	3-15

第6図　縄文土器　胴部資料(1)

c類：連鎖状隆沈線文が施されている深鉢(9)。

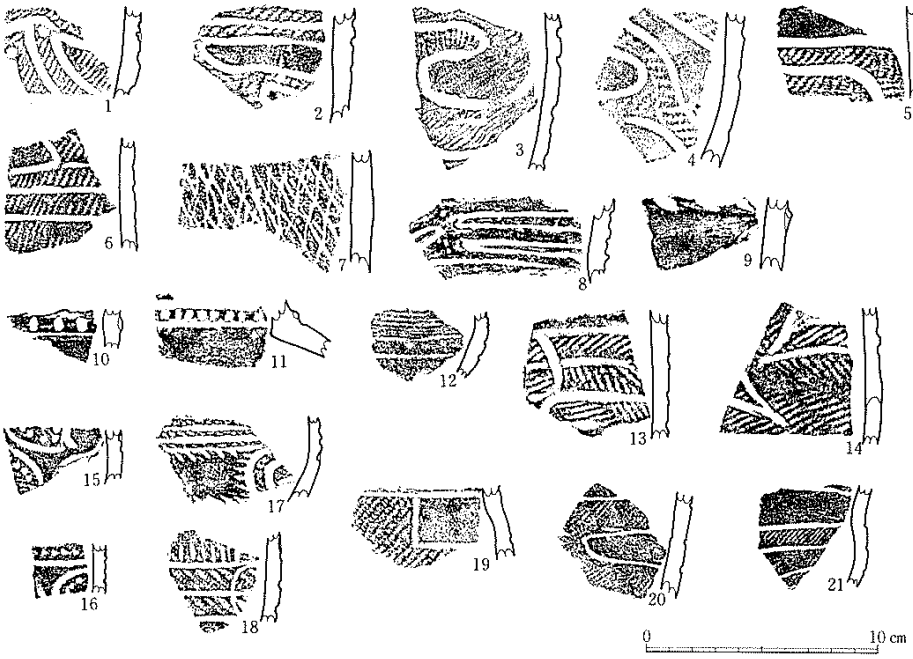
d類：単沈線入平行沈線が統されている深鉢(10)。

e類：頸部に連続竹管文が施されているもので器種は不明である。(11)。

f類：横位多条沈線文が施されているもので器種は不明である(12)。

g類：方形区画沈線文や区画沈線文が施されている深鉢で、区画内に連続刺突文が施されるもの(15〜18)と施されないもの(19〜21)に分かれる。

以上、分類された土器の特徴をこれまでの研究成果に照らし合わせると、Ⅰ〜Ⅲ類aとⅣ類



No	地区・層位	器種	部位	地　文	文様の特徴	図版
1	2トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文	弧状沈線，竹管文	3-16
2	3トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文充填（磨消）	弧状沈線文	3-17
3	3トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文充填	区画沈線曲線文	3-18
4	4トレ・2層	深鉢	胴部	LR縄文充填	区画沈線曲線文	3-19
5	4トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文充填（磨消）	区画沈線文，平行沈線	3-20
6	4トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文充填	区画沈線文，平行沈線	3-21
7	2トレ・2層	深鉢	胴部	網目状撚糸文R		3-22
8	4トレ・3層	深鉢	胴部	なし	刺突入横位沈線文	3-23
9	5トレ・2層	深鉢	胴部	なし	連鎖状隆線文	3-24
10	5トレ・2層	深鉢	胴部	なし	単沈線入平行沈線文	3-25
11	5トレ・2層	不明	胴部	なし	連続半截竹管文	3-26
12	3トレ・3層	不明	胴部	なし	横位多条沈線文	3-27
13	3トレ・2層	深鉢	胴部	LR/RL 羽状縄文充填	入組文	3-30
14	3トレ・2層	深鉢	胴部	LR/RL 羽状縄文充填	入組文	3-31
15	4トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文充填（磨消）	区画沈線内連続刺突文	3-32
16	4トレ・3層	深鉢	胴部	なし	区画沈線内連続刺突文	3-33
17	4トレ・3層	深鉢	胴部	なし	区画沈線内連続刺突文	3-34
18	2トレ・2層	深鉢	胴部	RL縄文	区画沈線，単沈線文	3-35
19	4トレ・3層	深鉢	胴部	LR縄文磨消	方形区画沈線文	3-36
20	3トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文磨消	区画沈線文	――
21	4トレ・3層	深鉢	胴部	RL縄文充填（磨消）	区画沈線文	3-37

第7図　縄文土器　胴部資料(2)

～Ⅴ類と細部資料のａ類～ｆ類は後期前葉の南境式（伊東信雄：1957, 1981）に、Ⅲ類ｂ・Ⅵ類と胴部資料のｇ類は中葉の宝ケ峯式（伊東：1957）に、Ⅶ類は晩期の大洞C_2式（山内清男：1930）にそれぞれ比定されるものと考えられる。

なお、南境式については蔵王町二屋敷遺跡（加藤道雄他：1984）において３段階の変遷が示されており、ここではそれに従い県北での類例を求めていきたい。

Ⅰ類は二屋敷遺跡の第１群土器に相当し、石巻市南境貝塚（後藤勝彦：1974）のＡ群土器や一迫町青木畑遺跡（加藤：1982）のＤ類・Ｅ類に類例がみられる。Ⅱ類は二屋敷遺跡の第２群土器に相当し、南境貝塚のＢ群土器、色麻町大谷地遺跡（茂木好光：1984）の第１群土器、大和町金取遺跡（小野寺祥一郎：1980）の第Ⅱ群土器に類例がみられる。Ⅲ類ａは二屋敷遺跡の第３群土器に相当し、南境貝塚のＣ群土器（後藤：1974）、松島町西ノ浜貝塚（後藤：1965）などに類例がみられる。Ⅳ類・Ⅴ類とｂ類～ｆ類の土器については南境式全般にみられ、その詳しい所属時期については不明である。

宝ヶ峯式に比定されるⅢ類ｂ・Ⅳ類やｇ類については、資料数が少なく、まとまりがみられないことから類例だけ求めていきたい。

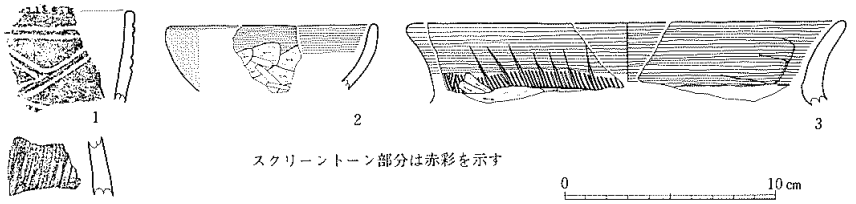
岩手県大槌町崎山弁天遺跡（草間・玉川他：1974）の第Ⅴ群４・５類の土器、丸森町入大遺跡（一條孝夫：1989）の深鉢Ｂ類や気仙沼市多田柄貝塚（手塚均他：1986）の第Ⅲ群土器などに類例がみられる。

2）：弥生土器（第８図, 1）

変形工学文が施され、口唇部に刻み目が入る鉢で、沈線に赤彩が残っている。その特徴から桝形囲式のものと考える。

3）：古代の土器（第８図, 2～4）

2 は土師器坏で、体部から口縁にかけてやや丸みを帯び、外面には赤彩が施されている。3 は土師器甕で口縁部がやや外反し、体部が球形を呈すると考えられる。3 と 4 は器形の特徴から南小泉式のものと考えられる。また、4 は須恵器の甕の体部破片である。

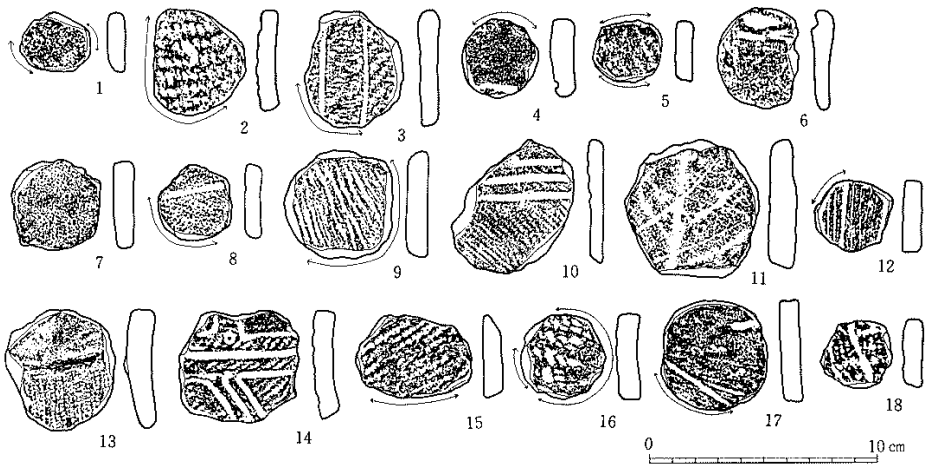


No.	地区・層位	器種	部位	特徴	図版
1	5トレ・2～3層	深鉢	口縁部	変形工字文、口唇部に刻目、外面に赤彩	3-39
2	5トレ・2層	土師器坏	体部～口縁部	外面：横ナデ→ヘラケズリ→ミガキ、内面：横ナデ、外面に赤彩	3-40
3	4トレ・1層	土師器甕	頸部～口縁部	外面：ヘラケズリ→ハケメ→横ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラナデ→横ナデ	3-41
4	4トレ・1層	須恵器甕	体部	外面：叩き目、内面：ヘラナデ	――――

第８図　弥生土器・古代の土器

(2)円盤状土製品(第9図,1〜18)

18点出土している。土器片を利用したもので、円形あるいは隅丸方形を呈している。土器片の周縁部を打ち欠いただけのもの、研磨しているもの(研磨部は矢印で示した)がある。11は底部を、18は口縁部を、他はすべて胴部破片を利用している。大きさは径5㎝前後のものと2〜3㎝のものにわかれる。利用している土器片の時期はその特徴から縄文時代後期前葉と考えられるが、18は胎土に植物繊維を含み、外面は斜行縄文に押圧縄文が施され、内面にケズリ調整されている点から早期末〜前期初頭の土器と考えられる。

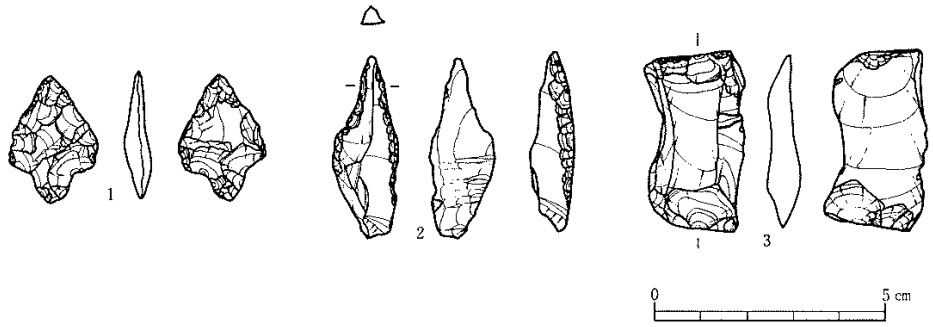


No.	地区・層	No.	地区・層	No.	地区・層	No.	地区・層	No.	地区・層
1	第2トレンチ2層	5	第3トレンチ3層	9	第4トレンチ2層	13	第4トレンチ3層	17	第5トレンチ2層
2	第3トレンチ2層	6	第3トレンチ3層	10	第4トレンチ2層	14	第4トレンチ3層	18	第5トレンチ2層
3	第3トレンチ3層	7	第4トレンチ2層	11	第4トレンチ2層	15	第4トレンチ3層		
4	第3トレンチ3層	8	第4トレンチ2層	12	第4トレンチ3層	16	第4トレンチ3層		

第9図　円盤状土製品

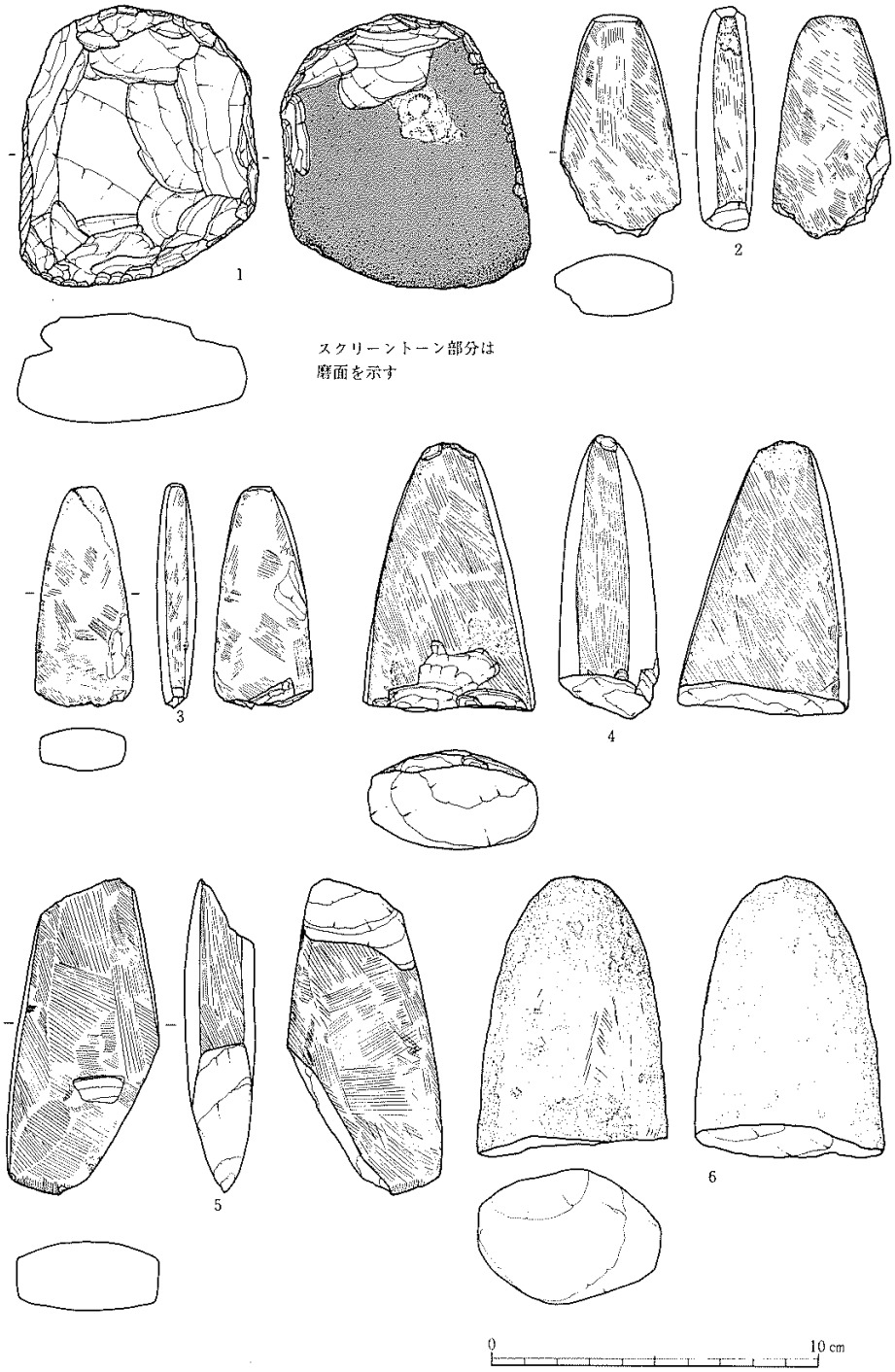
(3)石器(第10図1〜3,第11図,1〜6,第12図,1〜2)

剥片石器、打製石斧、磨製石斧や礫石器(磨石．凹石．敲石など)が出土した。石器の形態や

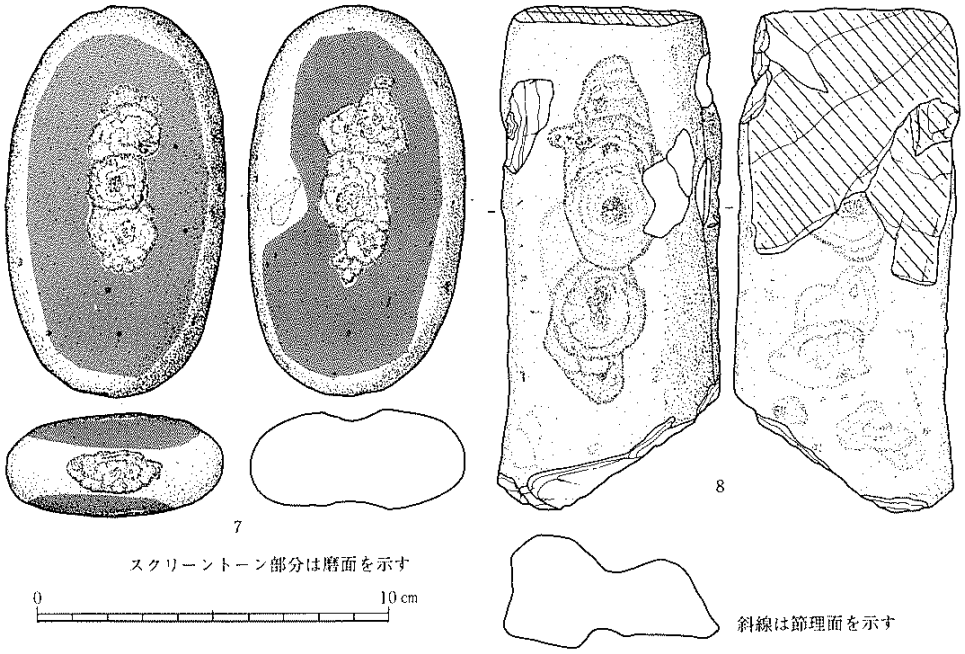


No.	器種	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	図版
1	石鏃	4トレ・3層	272	181	52	2	珪質頁岩		4-18
2	石錐	4トレ・2層	385	138	82	4	珪質頁岩		4-19
3	ピエス・エスキーユ	5トレ・2層	393	241	68	8	珪質頁岩		4-20

第10図　剥片石器



第11図　打製石斧・磨製石斧



No.	器種	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	図版
1	打製石斧	3トレ・2層	87.2	73.0	33.6	288	珪化凝灰岩		4-22
2	磨製石斧	4トレ・2層	(68.1)	(36.6)	(17.6)	(72)	花崗閃緑岩		4-23
3	磨製石斧	2トレ・2層	(67.8)	(19.6)	(11.8)	(39)	珪化凝灰岩		4-24
4	磨製石斧	4トレ・1層	(83.3)	(51.8)	(29.8)	(172)	珪化凝灰岩		4-25
5	磨製石斧	4トレ・3層	(96.4)	(51.0)	(20.8)	(140)	珪化凝灰岩		4-26
6	磨製石斧	3トレ・3層	(83.4)	(57.0)	(42.0)	(304)	安山岩		4-27
7	凹石＋敲石＋磨石	4トレ・2層	110.0	61.2	27.8	140	安山岩		4-28
8	凹石	3トレ・4層	141.0	62.2	33.9	304	粘板岩		4-29

( ) は現存値

第11,12図　打製石斧・磨製石斧・凹石十磨石十敲石・凹石

種類から土器同様に後期～晩期のものと思われる。

剥片石器(第10図,1～3)

4点出土している。すべて珪質頁岩製である。1は有茎の石鏃である。2は剥片の一端に二次加工により錐部を作出している石錐である。3 は両極剥離痕を有する剥片で、二個一対の刃部を持つ。また、ポイント未製品が出土している(写真図版4－21)。

石斧(第11図,1～6)

7 点出土している。1 は凹石＋磨石を再生利用した打製石斧である。2～6 は磨製石斧で、2～4は刃部が欠損している。また、4には製作時の敲打痕が残っており、折面には二次加工が加えられている。5は刃部が若干残っているものの、基部が欠損している。6は刃部が欠損し、自然面に僅かに研磨が見られる。これらのほかに磨製石斧の未製品が1点出土している。

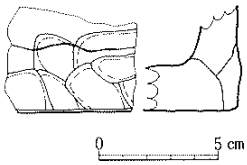
礫石器(第12図,1～2)

磨石が 10 点、凹石が 7 点、凹石＋磨石＋敲石が 1 点出土している。ここでは凹石＋磨石＋敲石と凹石を図示した。

1 は楕円礫の下部に敲打痕を、両面に磨痕と凹孔を持っている。2 は両面に凹孔を持つ凹石である。

3. 出島貝塚別当浜地点採集の製塩土器について(第 13 図)

今回の調査に並行して出島貝塚の分布調査を行い、その結果、別当浜地点で製塩土器が採集された(図版 4－30～37)。



第13図　製塩土器

第 13 図に示した製塩土器は、体部外面を軽くナデたのち粘土紐の重ね目を指で押さえているだけで輪積み痕跡がよく残り、内面にはナデ調整が施され、底部からの立ち上がりは直立ぎみになる。推定底径が 19 ㎝、器厚が約 2 ㎝ある。類似するものには、供伴する土師器から平安時代に位置付けられている塩釜市新浜Ｂ遺跡(佐藤則之：1986)の第Ⅱ類があり、別当浜地点の製塩土器もこの時代のものと考えられる。また、製塩土器が分布している場所には焼土面が露出しており、製塩遺構が存在することが確認された。なお、女川地方では万石浦沿岸に立地する女川町唐松山下貝塚などでも古代の製塩土器が採集されている。

Ⅳ　まとめ

1. 出島貝塚は縄文時代早期～古代にかけての重複遺跡である。
2. 今回の調査で検出した層はいずれも遺物包含層の再堆積層である。遺物は南斜面の落ち際に集中し、沢の中央あたりでやや希薄になり、ほぼトレンチ全域に認められた。
3. 遺物には年代的なまとまりは見られなかったが、縄文時代後期前葉の土器が主体を占め、その他に縄文時代後期中葉の土器、晩期の土器、弥生時代の土器、古代の土器、土製品、石器等が出土した。
4. 発掘調査では遺構は発見できなかったが、貝塚が立地する台地上には遺構の存在する可能性がある。
5. 今回新たに製塩遺跡が発見され、出島でも古代に製塩が行われていることが確認された。

引用・参考文献

伊東信雄(1957)：「古代史－縄文式文化の変遷」『宮城県史』第1巻

伊東信雄他(1981)：「縄文時代－縄文土器」『宮城県史』第34巻

女川町(1960)：『女川町誌』

小野寺祥一郎(1980)：「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集

加藤道雄(1982)：「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集

加藤・阿部他(1984)：「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ　宮城県文化財調査報告書』第99集

草間・玉川他(1974)：『崎山弁天遺跡』岩手県大槌町教育委員会

後藤勝彦(1957)：「陸前宮戸島里濱台囲貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教委教育論文』第2集

後藤勝彦(1962)：「陸前宮戸島里濱台囲貝塚出土土器について－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－」『考古学雑誌』第48巻1号

後藤勝彦(1967)：「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13集

後藤勝彦(1974)：「縄文後期宮戸Ⅰｂ式周辺の吟味」『東北の考古・歴史論集』

後藤勝彦(1981)：「縄文後期の土器－東北－」『縄文土器大成』

佐藤則之(1986)：「新浜Ｂ遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第113集

手塚均他(1986)：「田柄貝塚(2)」『宮城県文化財調査報告書』第111集

東北歴史資料館編(1989)：『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25

林　謙作(1967)：「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学』Ⅱ

辺見鞆高(1971)：『出島山下貝塚第1次調査概況報告書』

辺見鞆高(1972)：『出島山下貝塚第2次調査概況報告書』

辺見鞆高(1973)：『出島山下貝塚第3次調査概況報告書』

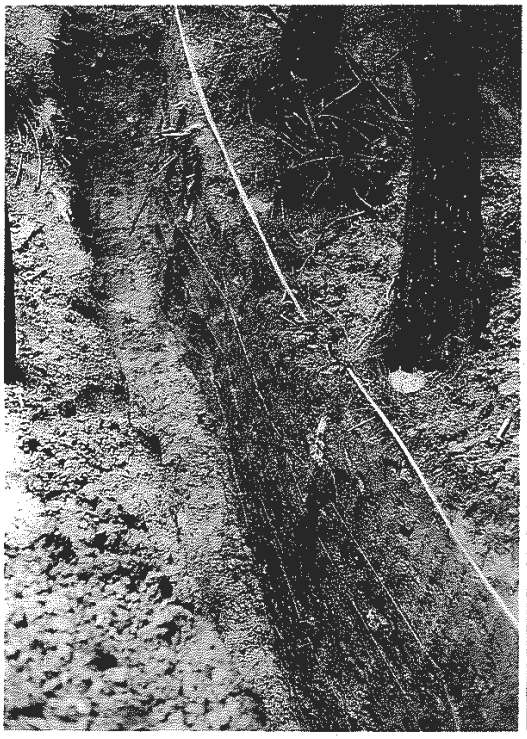
辺見鞆高(1974)：『出島山下貝塚第4次調査概況報告書』

辺見鞆高(1977)：『出島山下貝塚第5次調査概況報告書』

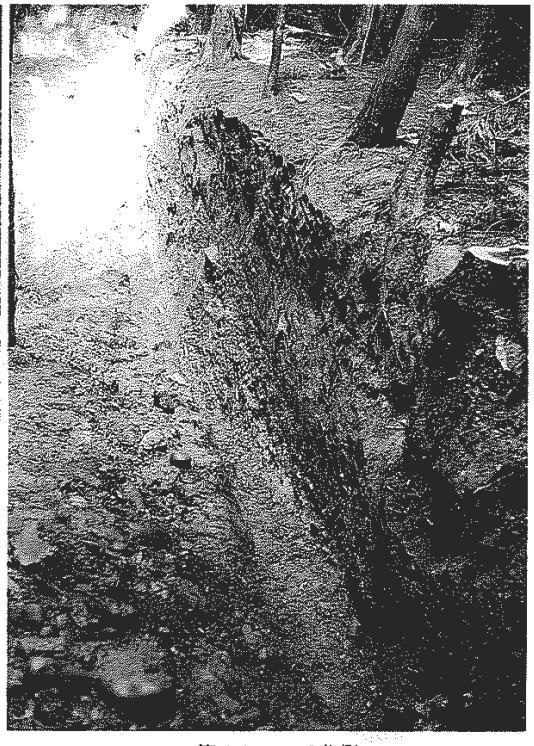
茂木好光(1984)：「大谷地遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第100集

山内清男(1930)：「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の始末」『考古学』第1巻3号

写　真　図　版



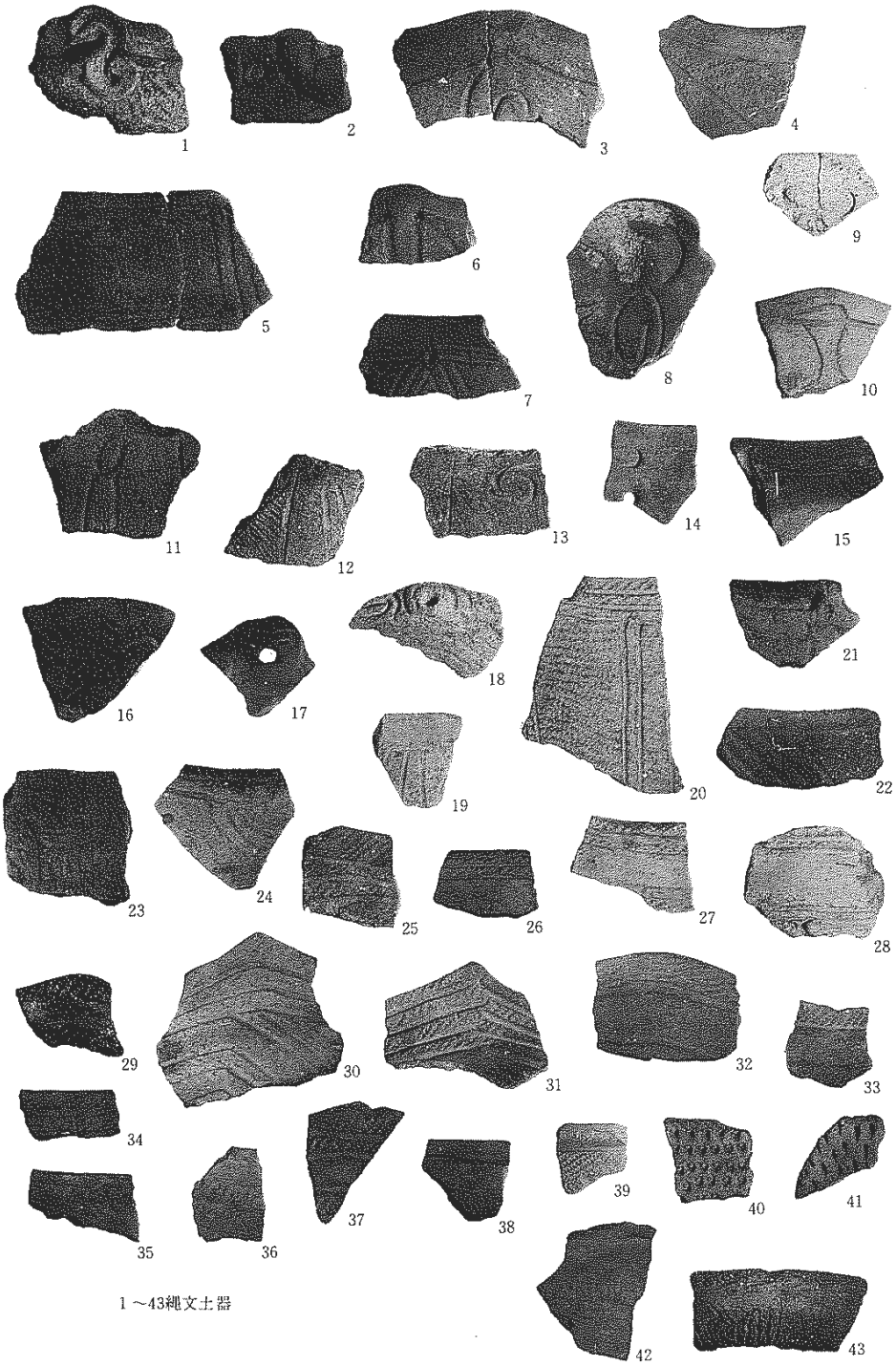
第３トレンチ北側



第４トレンチ北側

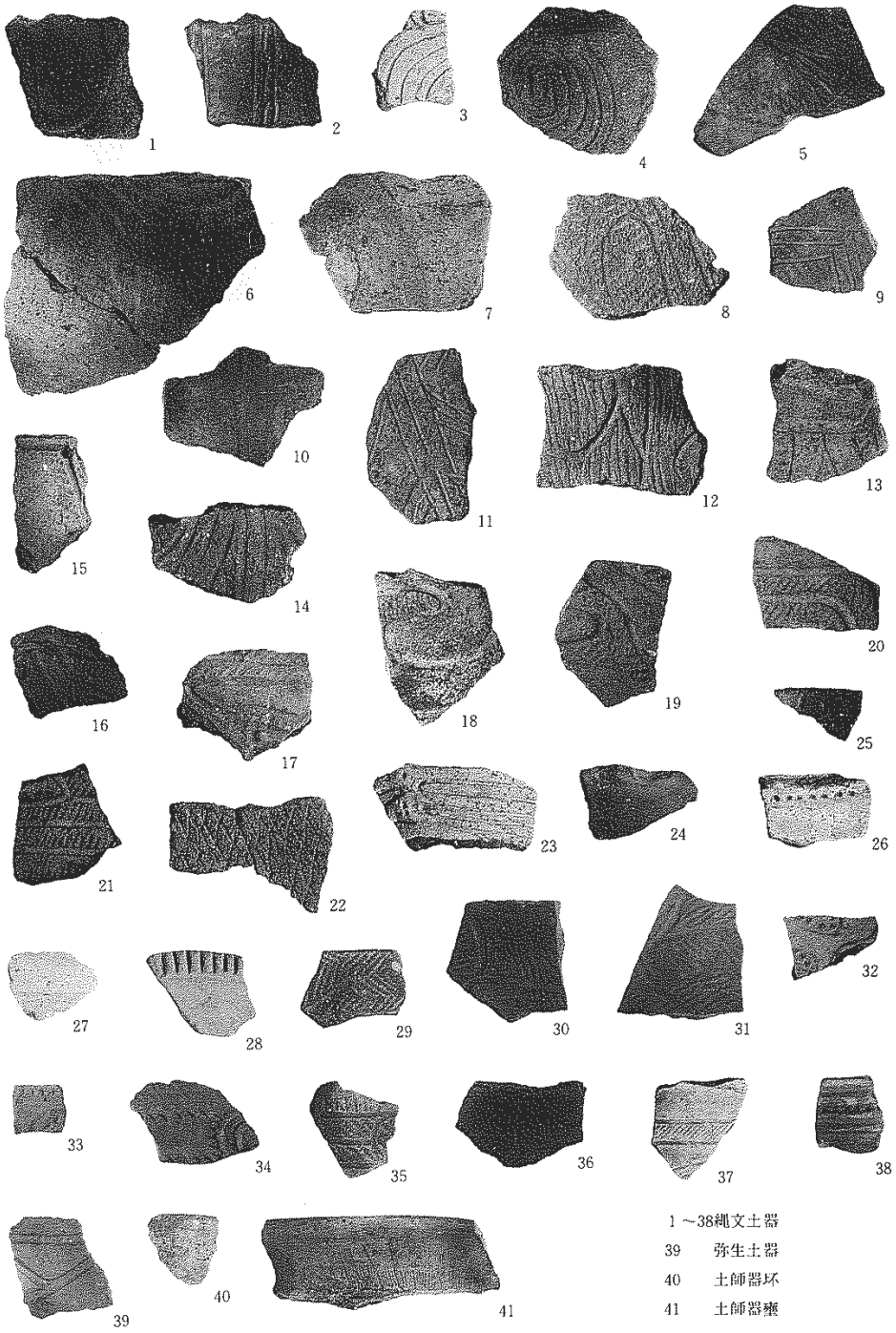
第３トレンチ南側

図版１


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

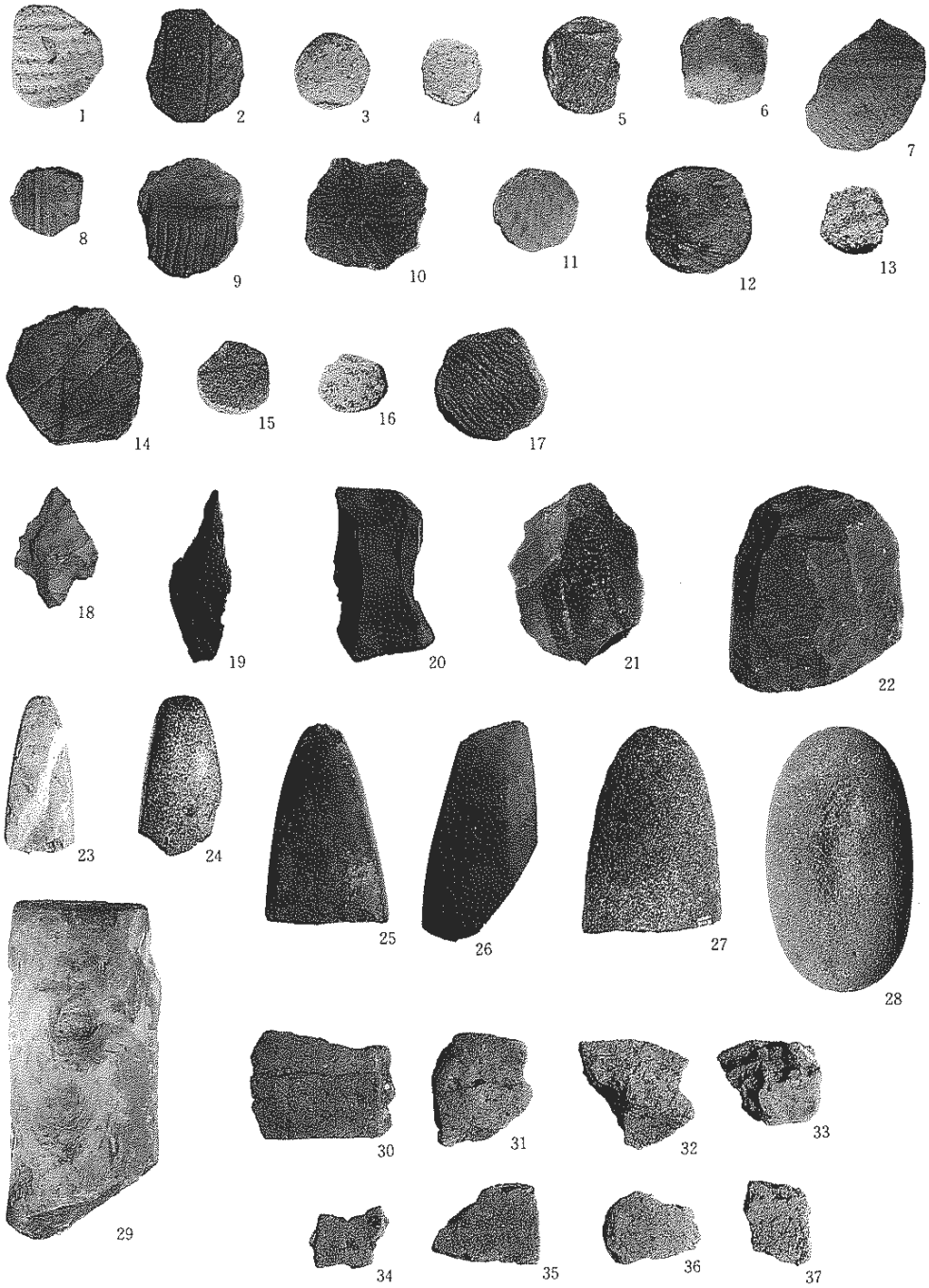
1～43縄文土器

図版 2



1～38縄文土器
39　弥生土器
40　土師器坏
41　土師器甕

図版 3



図版 4　　1～17円盤状土製品・18～29石器・30～37製塩土器

倉崎貝塚（くらざきかいづか）

目　　次

1. はじめに ･･･ 99
2. 調査の経過 ･･･ 101
3. 発見された遺構と遺物 ･･･ 102
4. 考察 ･･･ 116
5. まとめ ･･･ 117

調 査 要 項

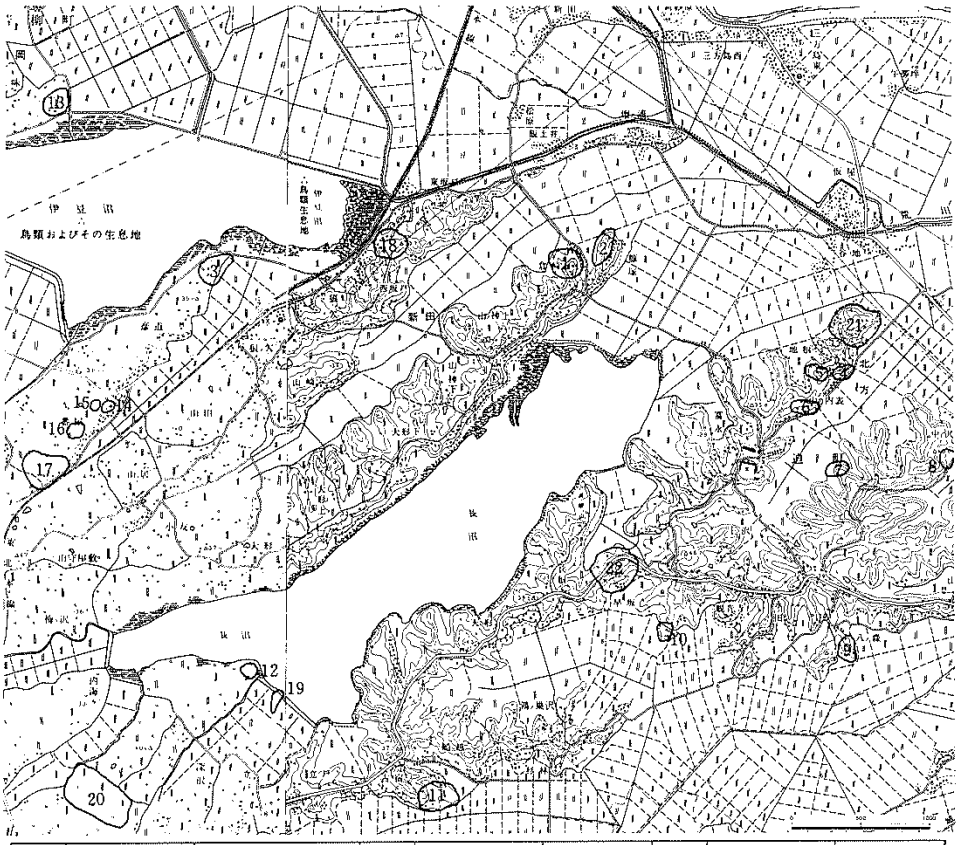
遺 跡 名：倉崎貝塚(宮城県遺跡番号：51007)
遺跡記号：ＭＦ
所 在 地：宮城県登米郡迫町新田字倉崎
発掘面積：約 200 ㎡
調査期間：平成元年 5 月 8 日～17 日
調査主体：迫町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：白鳥良一・斉藤吉弘・阿部恵

倉崎貝塚（くらざきかいづか）

1. はじめに

倉崎貝塚は宮城県登米郡迫町新田字倉崎に所在する。貝塚は迫町の中心佐沼の町並みからは北西に約5.5㎞離れた地点にあり、ＪＲ東北本線新田駅の東2.2㎞に位置している。

迫町西部の地形を概観すると、奥羽脊梁山脈から派生した築館丘陵は迫町内に入ると東に向かって次第に低平になり、迫川とその支流によって形成される迫川低地に接している。築館丘陵は迫川低地に接する部分では複雑に開析され樹枝状になっており、その間には迫川の遊水地



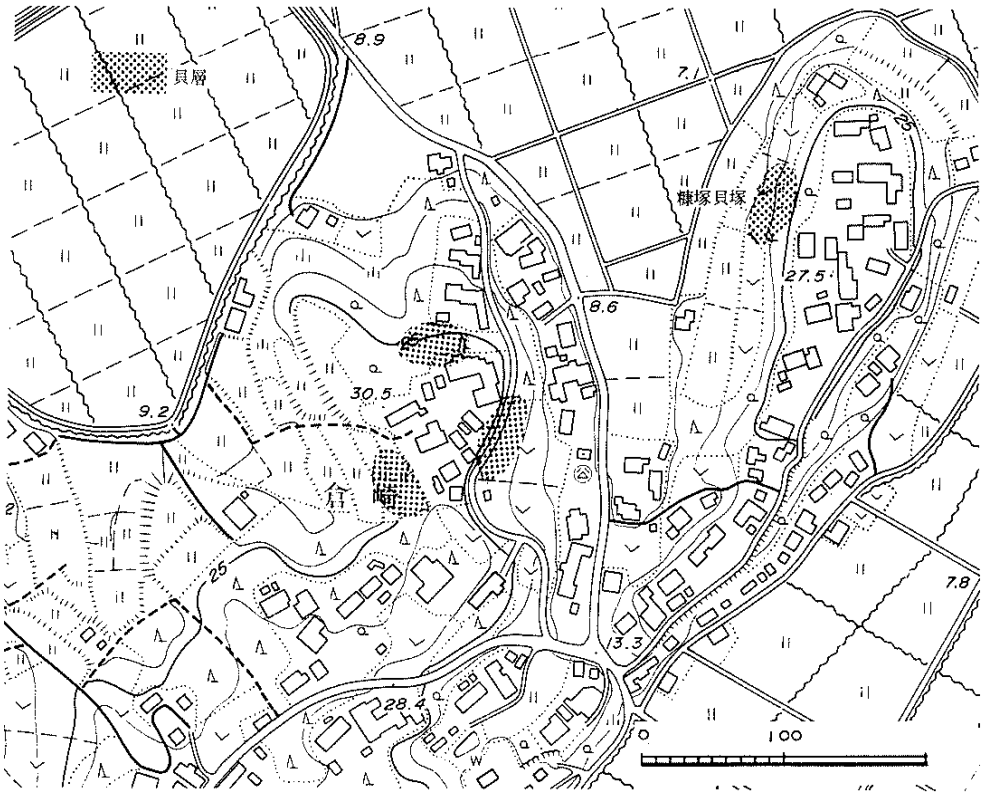
番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	倉崎　貝塚	縄文後・晩	10	観音寺貝塚	縄文前～晩	18	西坂戸遺跡	縄文後・晩
2	糠塚　貝塚	縄文前～後	11	上ノ台貝塚	縄文前～晩		坂戸　遺跡	縄文前～晩
3	唐木崎貝塚	縄文後・晩	12	深沢B貝塚	縄文後・晩	19	深沢　遺跡	縄文後
4	堀花　貝塚	縄文前～後	13	敷味　貝塚	縄文後・晩	20	館林　館跡	中世
5	地狼　貝塚	縄文前～晩	14	茂栗横穴古墳	古墳	21	南行　遺跡	古墳
6	山ノ内表貝塚	縄文前・中	15	茂栗　古墳	古墳後？		南行　館跡	中世
7	大多古貝塚	縄文後・晩　古代	16	茂栗　遺跡	縄文	22	早坂　館跡	中世
8	川戸沼貝塚	縄文前	17	番谷　遺跡	縄文後			
9	八ノ森貝塚	縄文前　古代		番谷　館跡	中世			

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

であったと推定される伊豆沼・内沼・長沼などの沼が位置している。

倉崎貝塚は長沼の北岸を画して北東方向に低平になりながら延びる丘陵のほぼ北端部に立地しており、北に分岐した小丘陵の先端部の斜面に形成されている。

迫川低地には迫川の遊水地としての湖沼地帯が発達していたと考えられ、この湖沼地帯に接する築館丘陵の縁辺には多くの貝塚が残されている。特に迫町西部は貝塚が集中して分布することで知られており、倉崎貝塚の周辺にも多くの貝塚がある。これらの貝塚をみると貝塚が形成され始めるのは縄文時代前期のことで、倉崎貝塚の東隣の丘陵に所在する糠塚貝塚や川戸沼貝塚・八ノ森貝塚など鹹水性の貝塚が形成されるようになる。次いで八ノ森貝塚・堤花貝塚はヤマトシジミを主体とする汽水性の貝塚に変化し、糠塚貝塚はイシガイ科やオオタニシなどの淡水性の貝塚となる。倉崎貝塚を始めとして唐木崎貝塚・地粮貝塚・大多古貝塚・観音寺貝塚・上ノ台貝塚・深沢Ｂ貝塚や若柳町敷味貝塚などの後・晩期の貝塚は、いづれも淡水性の貝塚で、この淡水性の貝塚が集中して分布するのがこの地域の特徴である。鹹水性から汽水性さらに淡水性への貝塚の変化は、この地域の環境が臨海型から潟湖化して次第に湖沼地帯の環境に変化したことを示しており、この湖沼地帯の環境の変化に適応しながら盛んに貝塚が形成さ



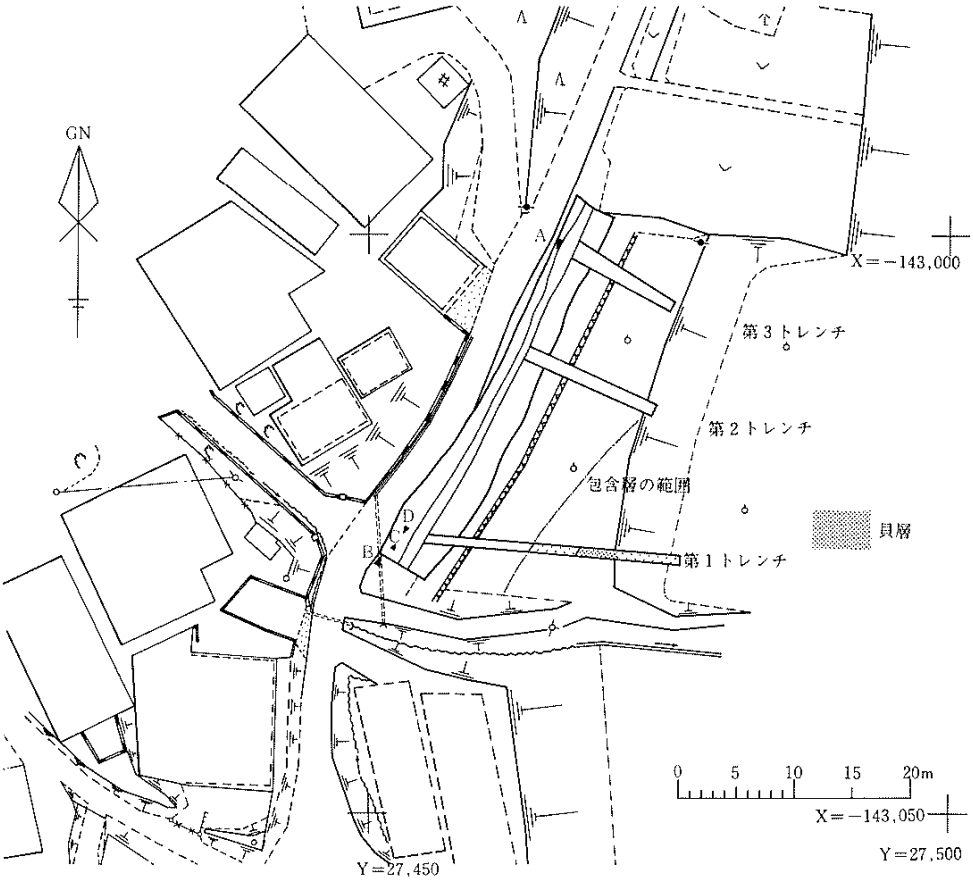
第２図　遺跡全体図

れていたことを物語っている(第1図)。

2. 調査の経過

今回の調査は迫町農政課が昭和 63 年度の事業として町道倉崎線の改良工事を進めて行く過程で、倉崎貝塚の東斜面の道路法面に従来知られてなかった貝層が露出した事を契機として実施したものである(第2図)。平成元年1月に現地を見た文化財保護課は、工事の停止を指示すると共に農政課・町教育委員会と今後の取扱について協議を重ねたが、道路と貝塚の関わりは避けられないとの結論に達したため、平成元年度に発掘調査を実施することとした。

発掘調査は平成元年5月8日に開始した。まず、昨年度の工事停止後埋め戻された貝層を露出させる事とし、重機で埋土を排除した。露出した貝層断面の清掃をし、観察したところ、人骨を伴う土壙が1基検出された他、貝層・包含層が厚く残っていることやこの貝層が過去の開田工事によって一部削平されていることなどが知られた。このため開田工事によって貝層がど



第3図　調査区平面図

の程度破壊されているかを知るために、開田されたあと梅林となっている部分に梅の木を避けながら3本のトレンチを設定して残存状況を確認する調査を実施した。その結果、部分的には貝層・包含層の伸びが残っていることが確認されたものの通路工事による貝塚に対する影響はほとんど無い事が判明した(第3図)。

このため、調査は土壙の精査と、道路法面に露出した貝塚の断面の実測図を作成することとした。断面図は1/20の縮尺で作成し、調査区全体図は1/100の平板図で作成した。写真撮影は随時行い、最終的には断面の各層から遺物を採取し、さらに少量のブロックサンプリングをして、5月17日に調査を終了した。発掘面積は約200㎡である。

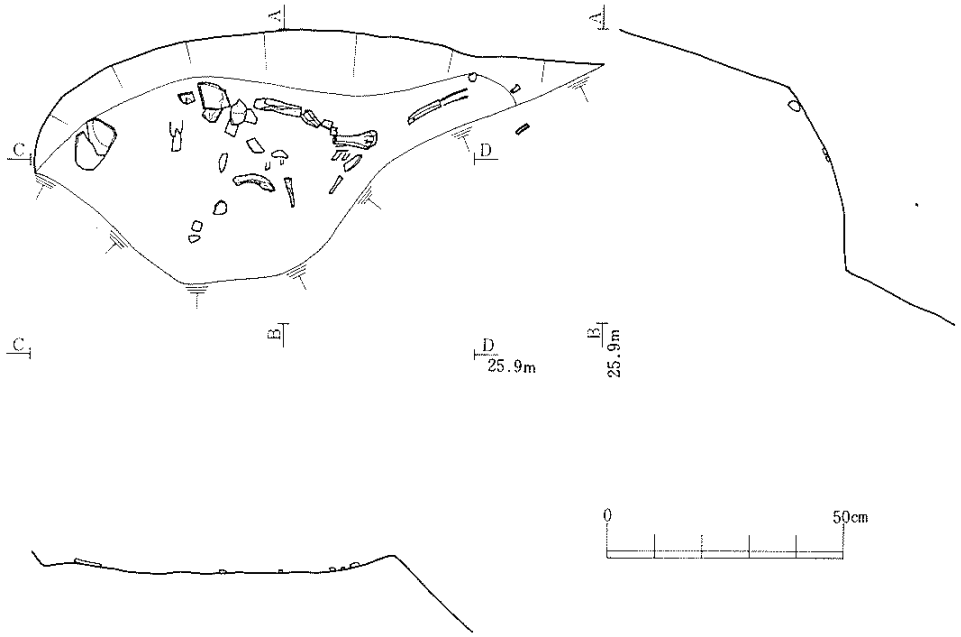
3．発見された遺構と遺物

発見された遺構としては精査を行った人骨を伴う第1土壙と、さらにこの第1土壙の下の断面で検出された未精査の土壙が2基(第2・3土壙)ある。このほか、道路法面では最も厚い所で約90㎝ある貝層及び厚い包含層が、第1トレンチで包含層と貝層が確認された。

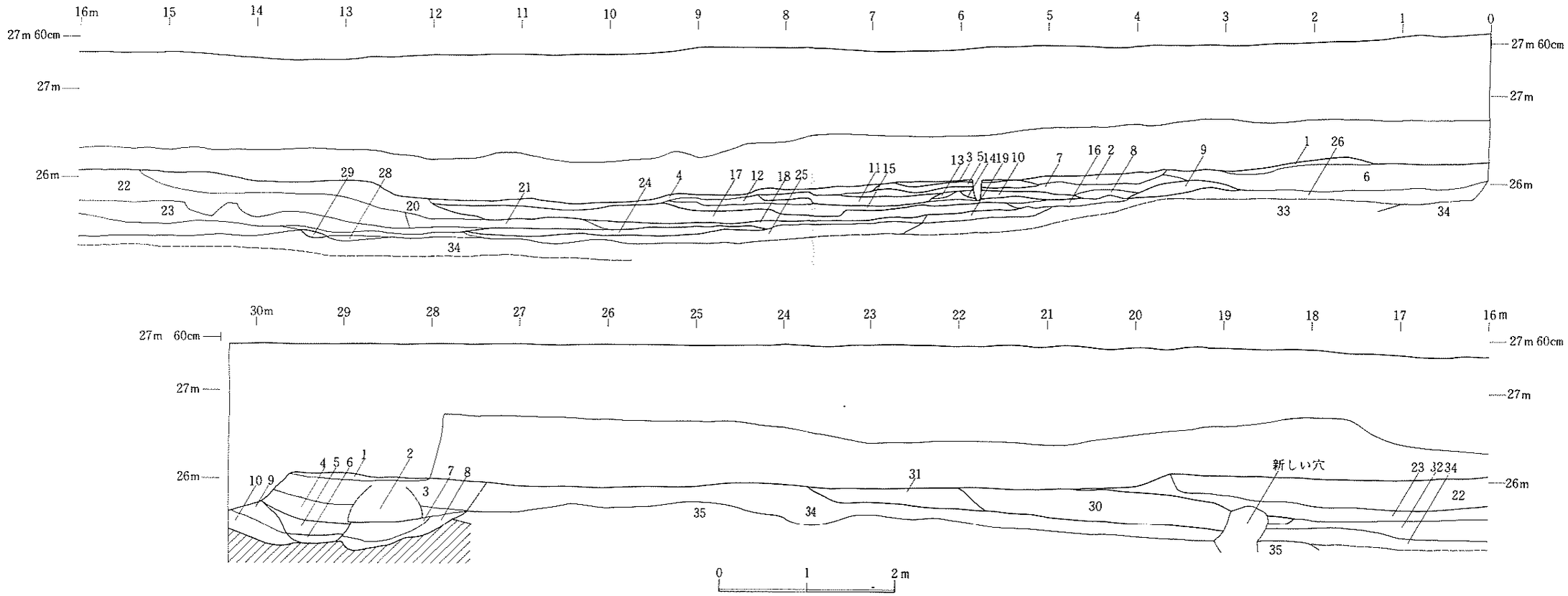
遺物には貝層・包含層などを中心に出土した縄文土器・土製品・石器・骨角製品や、貝・人骨・各種動物の骨などがある。

A．遺　構

土壙が3基検出されている。これらの新旧関係は第3土壙→第2土壙→第1土壙の順に新しくなっている。以下では主として精査を行った第1土壙について述べる。



第4図　第1土壙人骨出土状況

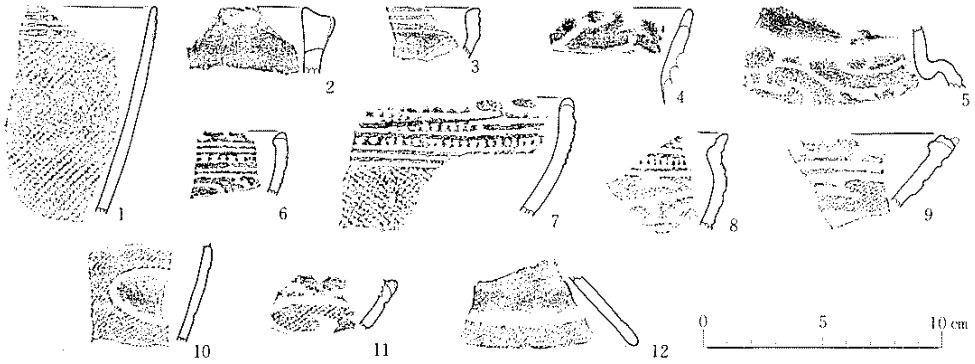


層No.	層名	土色	土性	備考
1	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
2	土層	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	埋葬人骨を伴う第1土壙堆積土
3	土層	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	
4	土層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物を含む
5	混土貝層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	貝が多い } 第2土壙堆積土
6	土層	褐色 (10YR4/6)	シルト	
7	混貝土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	貝の細片が入る } 第3土壙堆積土
8	土層	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
9	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
10	土層	褐色 (10YR4/6)	シルト	

層No.	層名	土色	土性	備考
1	土層	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物を含む
2	土層	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	炭化物を含む
3	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
4	土層	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	
5	貝層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	ヌマガイ・オオタニシの貝層(貝層1)
6	土層	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物・焼土粒を含む
7	土層	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	炭化物を含む 魚骨が上面に乗っている
8	混貝土層	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	貝の細片が入る 魚骨が多い
9	貝層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	炭化物混入 粘性あり(貝層2の続き)
10	貝層	褐色 (10YR4/4)	シルト	ヌマガイ・オオタニシの貝層(貝層2)
11	貝層	褐色 (10YR4/4)	シルト	貝層(貝層2の続き)
12	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
13	土層	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	貝の細片を含む
14	土層	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	貝の細片を含む
15	土層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	粘性あり
16	土層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	貝の細片を含む
17	貝層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ヌマガイ・オオタニシの貝層(貝層3)
18	土層	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	貝の細片を含む
19	土層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ややしまりあり
20	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	

層No.	層名	土色	土性	備考
21	土層	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	
22	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	炭化物を含む
23	土層	褐色 (10YR4/6)	シルト	
24	貝層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	ヌマガイ・オオタニシの貝層(貝層4)
25	土層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	貝の細片を含む
26	土層	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
27	土層	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	粘性あり 貝の細片を含む
28	土層	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	粘性がある
29	貝層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	貝層4の続き?
30	貝層	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	ヌマガイ・オオタニシの貝層(貝層5)
31	混貝土層	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	貝層4の続き 貝がブロック状に入る。
32	土層	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	炭化物・焼土粒を含む
33	土層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
34	土層	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	
35	土層	極暗褐色(10YR2/3)	シルト	廃棄層

第5図　道路法面の堆積層断面図



第６図　第３土壙出土土器

第１号土壙(第４図)：調査区南端の道路法面で検出された墓壙である。土壙の東半部はすでに削平されている。第５図に示すように第2･3土壙および34層を切って掘り込まれているが、他の層はこの部分まで延びていないため第１土壙との新旧関係は不明である。平面形は残存部から長楕円形をなすと思われる。規模は残存長で南北120cm、東西50cm、深さは40cmである。底面は皿状となり、壁の立ち上がりは急である。

〔埋葬人骨〕土壙の東半部を失っているため、人骨の残存状況は悪い。西壁ぞいで頭骨の一部と左上腕・橈骨がわずかに原位置を保っている。頭骨の付近には左下顎骨が、上腕骨の東には左鎖骨と数本の肋骨が位置している。大部分の骨を失っているため埋葬形態などは知ることができない。

〔出土遺物〕第１土壙からは明確に時期の判る遺物の出土はなかったが、参考として第１土壙に切られる第３土壙の堆積土から出土した土器を第６図に示した。1・2・4・6～10は深鉢・鉢、12は台部破片、3・9は浅鉢で、5は壷、11は注口土器である。これらの土器は次の項目で述べる堆積土出土土器と特徴などは同じで１・2は後期の土器としたものに、3～5は晩期の土器Ⅰ類としたものに、6・7はⅡ類としたものに相当すると思われる。8～11は胴部に雲形文が施されることから晩期Ⅲ類としたものに相当すると考えられる。

Ｂ．道路法面の堆積層と出土土器

(1)堆積層(第５図)

道路法面の断面で長さ約1mの道路盛土や旧耕作土の下から厚さ約90cmの堆積層が検出された。この堆積層は貝層・包含層からなり、前述した土壙部分を除いて全部で３層に細分された。それらの土色・土性や層の性質などについては第５図の表に示してある。調査区北半部では貝層と土層が互層となって堆積しており、合計４枚の貝層が検出された。調査区南半部でも厚い貝層が１枚検出されている。貝層はヌマガイ・オオタニシなどの淡水産の貝種によって構成されており、30層からはハマグリも検出されている。これらの堆積層は基本的には西北西から東

南東方向の丘陵斜面に沿って堆積していると考えられ、それを横断する形の調査区断面では調査区中央に向かって両方向から僅かに傾斜して堆積している。

(2)出土土器

道路法面の堆積層から出土した土器には、各層の断面から抜き出したものと、二次的に移動した土の中から出土したため表土出土として扱ったものとがある。以下、堆積層出土土器と表土出土土器とに分けて説明する。

堆積層出土土器(第7・8図)

堆積層から出土した土器は各層の断面から抜き出した資料であるためその量は多くない。これらの中から土器の特徴や年代を考える資料として精製土器を中心に抽出し、各層毎に並べて示したのが第7・8図である。これらには縄文時代中期の土器、後期の土器、晩期の土器が含まれているが、中・後期の土器は少量である。

中期の土器(第7図26)深鉢の胴部小破片で、1点だけある。隆沈線による縦位の隆線が2条認められる。

後期の土器(第7図47・48・51・52・61・62, 第8図24～26, 32～34)各層から少量づつ出土している。第7図61が浅鉢、その他が深鉢である。口縁部資料には大波状の口縁となるもの(第7図61)と、頂部が2分される山形突起をもつもの(第8図33)とがある。第8図24・25も突起をもつと思われる。第7図61は黒色研磨されている。施文文様としては横位平行沈線が多様され、沈線間に刻目が施されものがある(第7図62,第8図24～26・34)。沈線間に縄文をもつものを含め、入組文となるものが多い(第7図48・51・52,第8図26)。また、三叉文が施されるものがあり(第7図62,第8図32)、第7図62はボタン状貼付文を持つ。第8図34は胴部上端の横位平行沈線間に横長楕円状沈線が施され、口頸部との区画帯となっている。

晩期の土器　出土土器の大部分を占めている。器種としては深鉢・鉢・浅鉢・壷・注口土器・皿などがある。このなかでは深鉢・鉢が多い。浅鉢のなかには明らかに台付となるものが認められる(第7図37・第8図16・17)。台部破片も目につき(第7図5・9・12・16・44・45,第8図 22・23)、鉢・浅鉢・香炉形土器など台の付く器種が多いことを示している。特殊な器形としては体部に突起の巡る浅鉢もある(第7図38)。晩期の土器は器種間で装飾や文様などに強い共通性を持っている。それを器種別にまとめると次のようになる。

深鉢・鉢(第7図2・3・6・8・10・11・13・14・18・19・21～24・27～31・33～36・49・50・54～59, 第8図1～3・5～7・10～13・21・27・28)

器形的には口頸部で屈曲して口縁部が外傾するもの(第7図19, 第8図5・7・11・27)とやや内弯気味に外傾あるいは直立するものとがあり、後者が多い。

口縁部に装飾と文様帯をもち、1条から数状の横位沈線文をもつもの(第7図13・27・

29〜31・36・第8図1・2)、いわゆる入組三叉文を基調とした文様をもつもの(第7図2・21・33〜35・49・50・56〜58, 第8図3・5〜7・10〜12)、羊歯状文を基調とした文様をもつもの(第7図3・6・8・10・11・14・18・19・22〜24・27・28・54・55・59, 第8図13・27・28)がある。羊歯状文を基調とした文様をもつものの中には第7図6・22・27, 第8図27・28のように入組三叉文の要素をのこす文様をもつものがある。第8図21は胴部資料で胴部下半まで三叉文を基調とした文様が施されている。

台付浅鉢(第7図1・20・32・37・38, 第8図4・9・16)

口縁部資料には口縁部で屈曲し端部が直立ないし内傾するもの(第7図1・20・32・37, 第8図4)と胴部から口縁部に緩やかに内弯するもの(第8図9・16)とがある。

胴部は研磨され、口縁部に文様帯をもつ。文様としては3ないし4条の横位平行沈線が口縁部を巡り、4条のものは入組三叉文をもつ(第7図1・32, 第8図4・16)。第8図9の口縁部には玉抱き三叉文が4単位施文されている。第7図37・第8図16では胴部下端にも沈線が巡る。第7図38も台付浅鉢と思われ、縁帯状突起の上面に三叉文が施される。

台部破片(第7図5・9・12・16・44・45, 第8図22・23)

器形のわかるものでは膨らみを持つ脚部と、大きく外反あるいは外傾する裾部からなる。

脚部に玉抱きなどの三叉文の文様をもち、裾部が無文帯となるもの(第7図44, 第8図22・23)と、脚部から裾部にかけて入組三叉文を彫刻的な深い彫りで施すもの(第7図5・9・12・16・45)とがある。5・12・44の裾端部には羊歯状文的な文様が見られる。

皿(第7図17・46, 第8図14・15)

この中には皿か浅鉢か器形の良く判らないものも含めた。

第7図17・第8図14には入組三叉文状の文様、第8図15は羊歯状文が施されている。

壷(第7図4・7・40〜43・60, 第8図19・20・31)

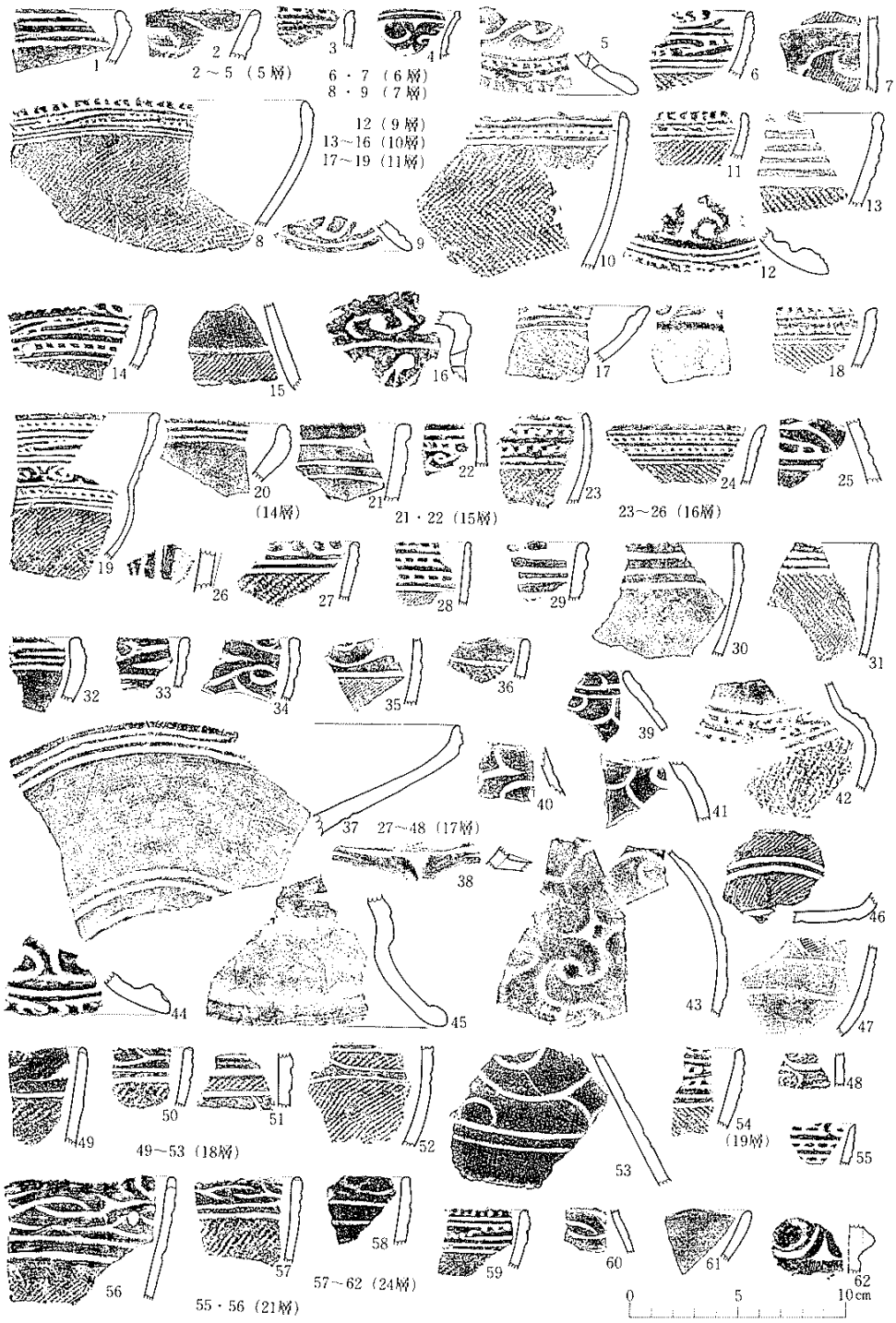
全体的な器形の判るものはない。

第7図4は小型壷の口縁部で、X字文が浮き彫りにされおり、朱彩されている。第7図42・第8図31は頚部から胴部にかけての破片で、頚部は無文で、胴部上半に42は羊歯状文が、31は縄文帯と羊歯状文が施されている。その他はいづれも胴部破片で、第7図40・41・43・60, 第8図19・20は入組三叉文や玉抱き三叉文を基調とした文様をもつ。第7図7には浮彫的な雲形文が施されている。

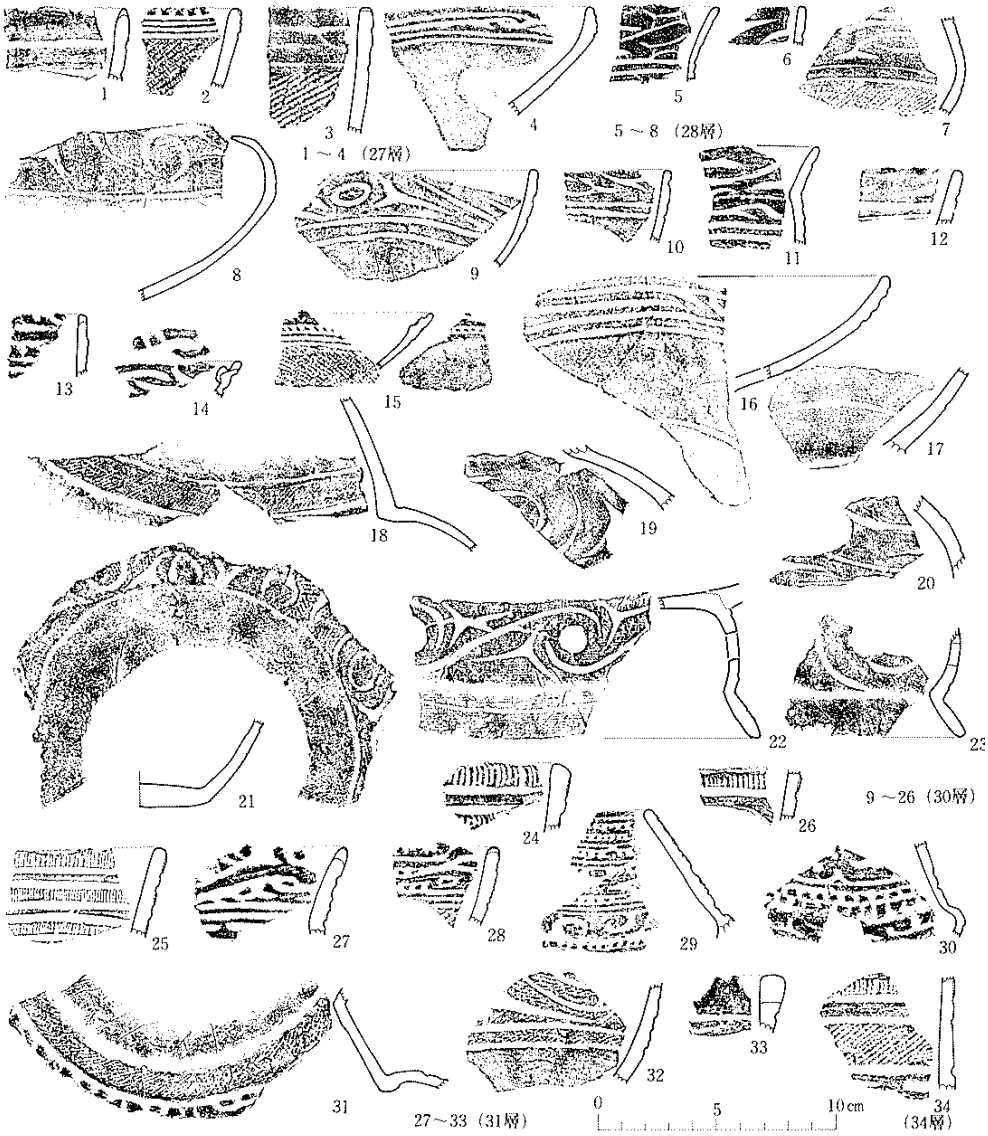
注口土器(第7図15・25・39・53, 第8図8・18・29・30)

口頚部破片が多く、胴部が残るのは第8図8・18・30だけである。第7図39と第8図29は口縁端部まである。

文様は第7図15と第8図18の口頚部は無文で口頚部下端に縄文帯が1条巡る。18は胴部も無



第7図　堆積層出土土器（1）



第８図　堆積層出土土器（２）

文である。第７図25・39・53は口頸部に、第８図８は胴部上半部に入組三叉文が流される。第８図29・30はＺ字状・Ｘ字状の羊歯状文とともに退化した梯子状文が多段に施されている。

以上、器種毎に説晩を加えた出土土器は、文様の特徴から次のような分類が可能である。

Ⅰ類　入組三叉文を含む三叉文を基調とした文様をもつもの

Ⅱ類　羊歯状文を基調とした文様をもつもの

Ⅲ類　雲形文が施されるもの

Ⅰ類は出土したすべての器種に認められ、図示資料の大半を占めている。また、台付浅鉢に見られるように横位平行沈線文をもつもののなかに入組三叉文が組み合っているものがあることから、深鉢・鉢・浅鉢に見られる横位沈線文をもつものも、このⅠ類に含まれるものと思われる。

Ⅱ類は量的にはⅠ類に次いで多い。深鉢・鉢に多く見られ、浅鉢・壷・注口土器にも施されている。

Ⅲ類は第7図7に見られるもの1点だけである。

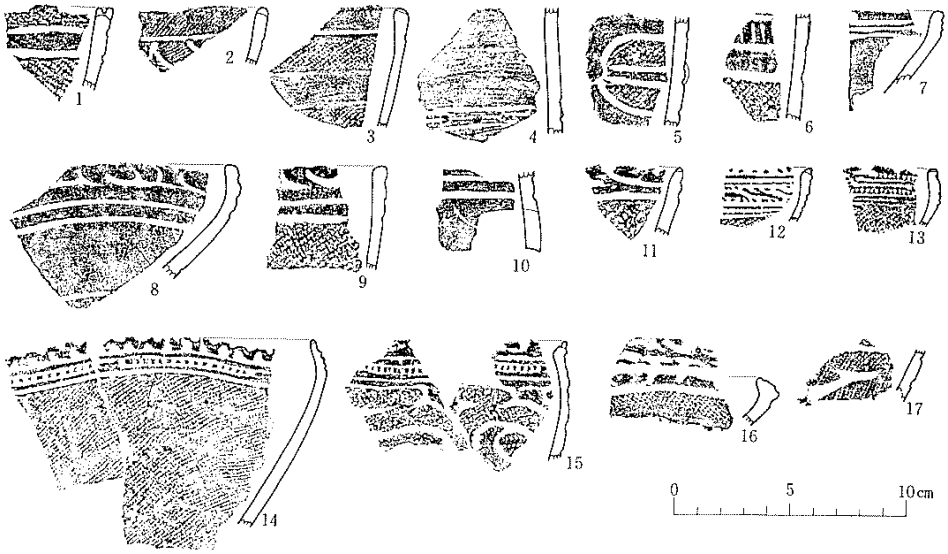
表土出土土器(第9図)

1～6・9・11～15は深鉢・鉢で、8・9が台付浅鉢、10が台部破片で、16・17が皿もしくは浅鉢と思われる。堆積層出土土器と特徴は同じで、1～6は後期の土器としたものに、7～11は晩期の土器Ⅰ類としたものに、12・13はⅡ類としたものに相当すると思われる。14・15は口縁部に平行沈線間刻目列が施される。15の胴部と17には雲形文が施され、16の胴部文様も雲形文になる可能性がある。このため15～17は堆積層出土土器でⅢ類としたものに相当する。

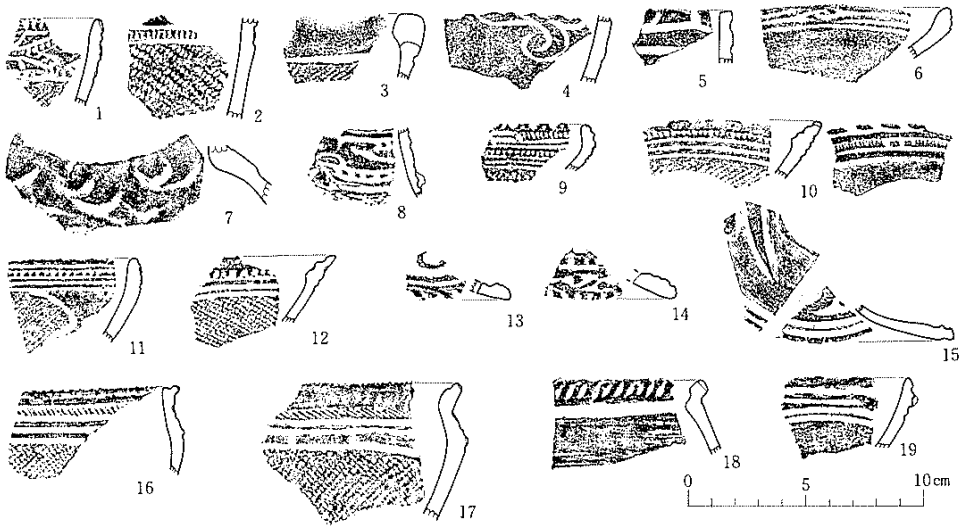
C．第1トレンチと出土土器

第1トレンチからは開田工事で削平を免れた貝層と包含層がトレンチの東半部で検出されたが、今回は調査を検出面に止め貝層・包含層の精査は行っていない。しかし、検出面に到るまでの盛土の中から開田工事の際に押されてきたと考えられる土器などが多数含まれていた。出土遺物は土器のほかに袖珍土器・耳飾りなどの土製品がある。

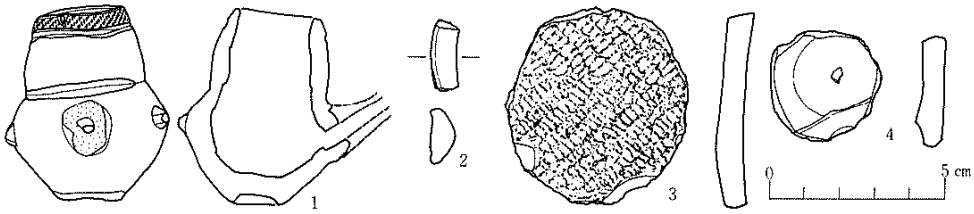
出土土器(第10図)



第9図　表土出土土器



第10図　第１トレンチ出土土器



番号	名　　称	地区・層位	大きさ(mm)	番号	名　　称	地区・層位	大きさ(mm)
1	袖珍土器	１トレ１層	56×47(高さ×幅)	3	円盤状土製品	X－X	57×52×8(長さ×幅×厚さ)
2	滑車状耳飾り	１トレ１層	16×21(幅×現存長)	4	円盤状土製品	X－X	32×32×8(長さ×幅×厚さ)

第11図　出土土製品

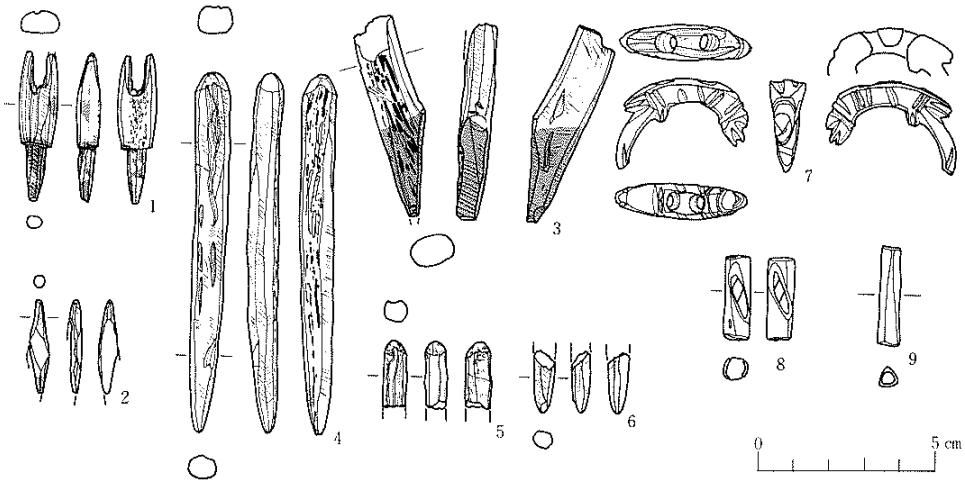
1～5・16～18 は深鉢・鉢、6 が台付浅鉢、9～12・19 が浅鉢もしくは皿で、13～15 が台部破片、7 が壷、8 が注口土器である。土器の特徴は堆積層出土土器と同じで、1～4 が後期の土器、5～7・13・14 が晩期の土器Ⅰ類としたものに、8・9 がⅡ類としたものに、10～12・15 がⅢ類としたものに相当すると思われる。16～18 は頚部で屈曲する器形のもので、口縁端部に刻目をもち 16・17 は頚部にも刻目帯が巡る。これらの土器をⅣ類とする。19 は隆線によりいわゆる工字文が施されるもので、瘤状に盛り上がる突起をもつ。これをⅤ類とする。

D．その他の出土遺物

(1)土製品(第 11 図)

出土した土製品には袖珍土器・耳飾り・円盤状土製品がある。

袖珍土器(1)注口土器の小型品で、注口部を欠いている。口縁端に沈線で画された縄文帯をもち、それ以下は口縁部と胴部の境に沈線が巡るだけで無文となっている。口縁部と胴部中央



番号	名　　称	層位	大きさ(mm)	材質	番号	名　称	層位	大きさ(mm)	材質
1	根ばさみ	7層	(43)×11×7(長×幅×厚)	鹿角	6	棒状角製品	24層	(18)×6×5(長×幅×厚)	鹿角
2	骨　鏃	8層	(27)×(6)(長×幅)	骨	7	装　身　具	30層	26×37×11(長×幅×厚)	鹿角
3	ヤ　ス	30層	(57)×(14)×9(長×幅×厚)	鹿角	8	〃	30層	24×8×7(長×幅×厚)	鳥骨
4	棒状角製品	8層	102×10×9(長×幅×厚)	鹿角	9	〃	11層	29×6×6(長×幅×厚)	鳥骨
5	〃	12層	(19)×9×9(長×幅×厚)	鹿角					

第12図　出土骨角製品

に瘤状小突起をもつ。

耳飾り(2)滑車状耳飾りの破片で、断面は三角形状となり側縁は直線的で両端がわずかに外反している。

円盤状土製品(3・4)土器片の周縁を打ち欠いて円形・楕円形にしたものである。3 は胴部破片を、4 は底部破片を使用している。4 の周縁は打ち欠いた後に研磨されている。

(2)骨角製品(第 12 図)

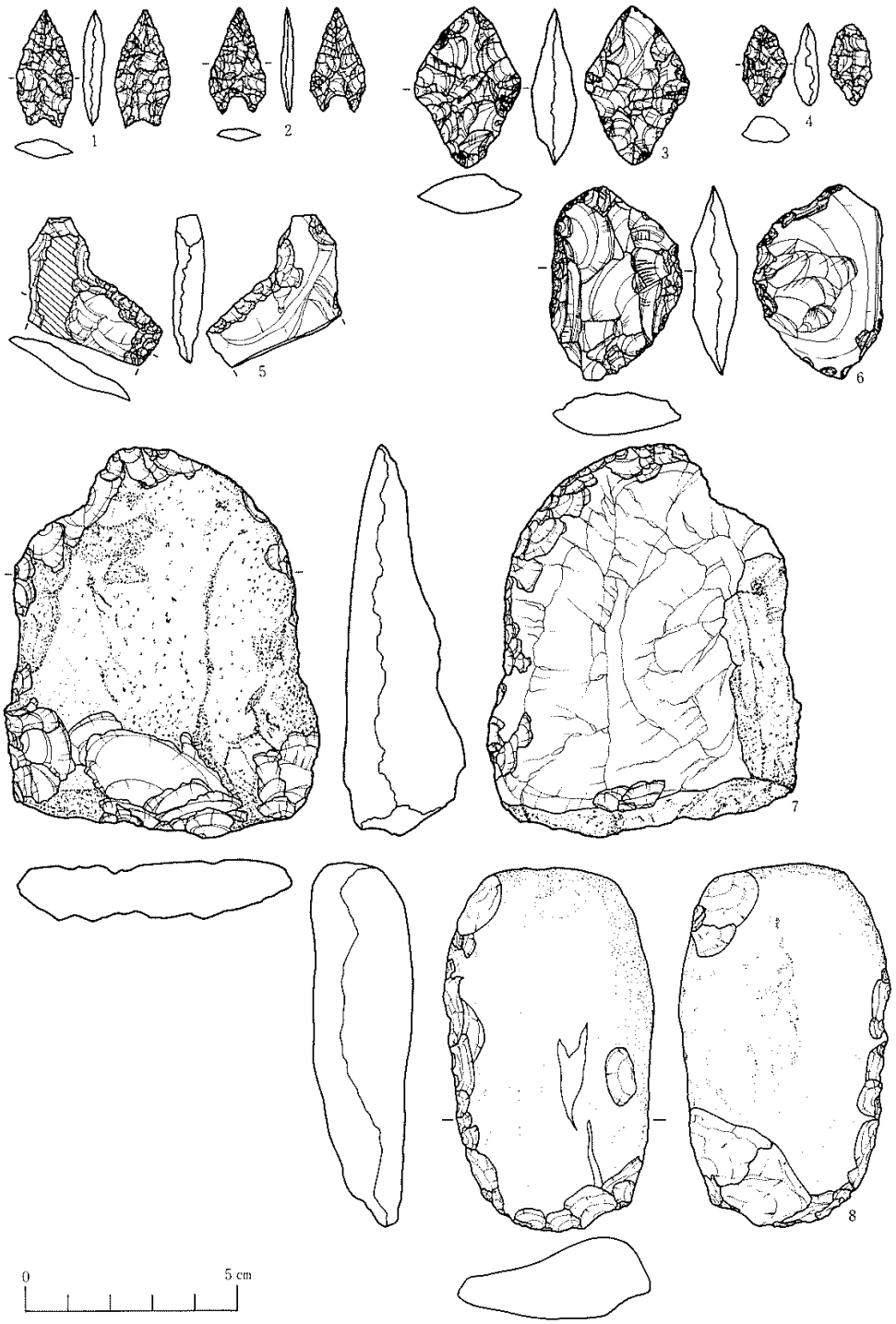
骨角製品には根ばさみ・骨鏃・ヤス・棒状角製品・装身具などがある。

根ばさみ(1)鹿角製で、先端部は二又状に切り込みが入り分岐している。基部と二又部の片側先端を僅かに欠いている。二又部と基部にはアスファルトが厚く付着している。

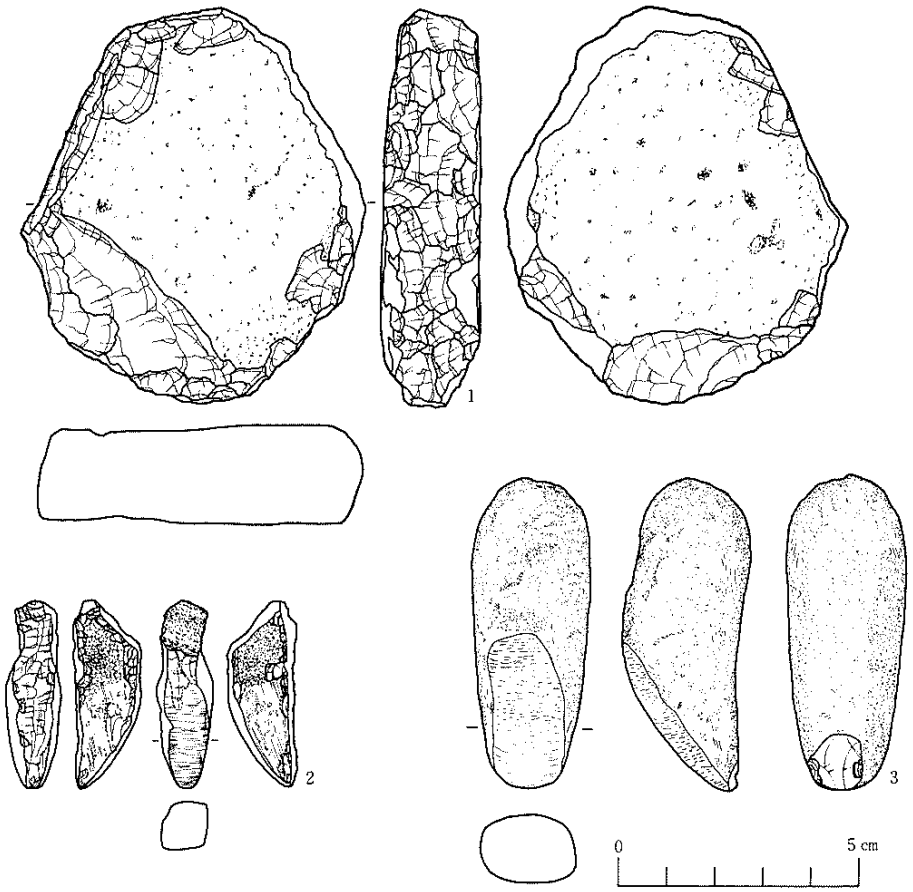
骨鏃(2)骨製の細身の鏃で、身部から基部の半身が欠けている。基部にはアスファルトの付着がみられる。

ヤス(3)鹿角製で、表面に血管孔が裏面に海綿質が残る。挟み込み式ヤスか組み合わせヤスの胴部から基部と思われる。胴部は湾曲しており、基部には全体的にアスファルトが付着している。

棒状角製品(4〜6)鹿角製で、全体の形のわかるもの(4)と頭部破片(5)と先端部破片(6)とがある。鹿角を縦に割ったものを棒状に仕上げたもので、一端は丸みを持ち一端は尖る。5 には使用痕とみられる鋭い傷が付いている。



第13図　出土石器（1）



番号	層位	器種	石質	長さ×幅×厚さ(mm)
13－1	30層	石鏃	珪質頁岩	25×13×3
2	7層	石鏃	玉髄	28×13×5
3	30層	尖頭器	珪質頁岩	38×25×11
4	5層	石錐	珪質頁岩	19×10×6
5	17層	石匙	珪質頁岩	(35)×32×7
6	18層	不定形石器	珪質頁岩	46×31×11

番号	層位	器種	石質	長さ×幅×厚さ(mm)
7	17層	不定形石器	珪化凝灰岩	92×75×29
8	X-X	不定形石器	珪化凝灰岩	85×50×24
14－1	18層	円盤状石製品	珪化凝灰岩	81×71×21
2	6層	その他の石器	玉髄	39×12×14
3	34層	〃 〃	玉髄	65×25×24

第14図　出土石器（2）

装身具(7～9)7は鹿角の緻密質を上手に使った彫刻のある装身具で、胴部中央に2孔をもつことから垂飾品と考えられる。全体的に沈線による文様が施されているが、頭部にはやや太い沈線で目と口が表現されている。頭部の反対側には長い尾を表現していると思われことから、この装身具は小動物を表現している可能性がある。8・9は鳥の長管骨を切断して管玉状にしたもので、8には斜位に長楕円形の窓が2か所彫刻されている。

(3)石器(第13・14図)

石器には石鏃・尖頭器・石錐・石匙・不定形石器・円盤状石製品などとその他の石器とがある。

石鏃(第 13 図 1・2)どちらも無茎の石鏃で、基部が凹基となり 2 の抉りは深い。身部は二等辺三角形状で、側縁は大きく外弯している。

尖頭器(第 13 図 3)石鏃より大型の三角形状をした石器である。厚く、尖った基部をもち、両面に粗い剥離が施されている。

石錐(第 13 図 4)つまみ部をもつ石錐で、棒状の錐部は摩滅してわずかしか残っていない。

石匙(第 13 図 5)縦長の石匙と思われるが、下半分以上を欠いている。打点に右側縁の両面から抉りと剥離を加えてつまみ部と刃部を作り出している。右側縁の刃部は腹面からの片面加工である。

不定形石器(第 13 図 6〜8)6・7 は剥片に、8 は礫に刃部を作り出しているものである。6 は主として背面に剥離が施され、刃部はほぼ全周している。7 は自然面を残す大型の剥片の 3 縁辺に片面あるいは両面からの剥離が施され、刃部が作り出される。8 は細長い円礫の 2 縁辺に両面加工で刃部が作り出される。7・8 の刃部は潰れている。

円盤状石製品(第 14 図 1)偏平な礫の縁辺を打ち欠いて長楕円形にしたもので、一部が欠けている。

その他の石器(第 14 図 2・3)どちらも玉髄と思われる石を素材としている。両者の大きさは異なるが小型で、幅が狭く肉厚の鑿形石斧状の形態をもつ石器である。どちらも敲打によって形を整えており、2 では基部の一部を除く部分が研磨されている。2 の基部はやはり敲打によりつまみ状に薄く作られている。片刃の部分は平坦ではなく全体的に湾曲しており、使用によるとみられる顕著な摩耗痕がある。これらはきわめて特殊な形態の石器で機能的にも興味が持たれるが、管見の限りでは類例は見当たらない。

(4)自然遺物

倉崎貝塚の堆積層断面からは、貝層の構成貝以外は少量の大型の動物の骨が出土したにすぎないが、整理作業に入って、堆積層の各層から採取してきた少量のブロックサンプリング資料を 1mm メッシュの篩で水洗したところ、各層には魚骨を中心として多くの自然遺物が含まれていることが判明した。しかし、今回は時間的な制約もあり、自然遺物の選別・同定・分析まで手が回らなかった。このため、ここでは現段階で判明している種名を記すに止める。

1) 軟体動物

腹足綱ーオオタニシ

二枚貝綱ーヌマガイ・イシガイ科・ヤマトシジミ・ハマグリ

2) 脊椎動物

硬骨魚綱ーサケ類・フナ・コイ科・ギギ科・ウナギ・スズキ

両生綱ーカエル類

爬虫綱ーヘビ類

鳥綱ーキジ・マガモ・コガモ・オオハクチョウ・ヒシクイ・マガン・フクロウ目

哺乳綱ーノウサギ・ムササビ・キツネ・イタチ・アナグマ・イノシシ・シカ・ヒト

量的に多いのは貝層の主構成貝であるヌマガイ・オオタニシで、これ以外にもイシガイ科の貝種が含まれていると思われるが、保存状態が悪く種まで明らかにできない。魚ではフナ・ギギ科の諸骨や鱗が多量にある。鳥ではハクチョウ・ガン・カモ類が多く、キジも目につく。哺乳類で多いのはシカ・イノシシである。貝・魚などは周辺の湖沼地帯に多産するものを獲得していたと考えられ、鳥は冬期間に湖沼地帯に飛来してきたものを中心に捕っていたものと考えられる。また、本遺跡でもサケ類の骨が出土したことは注目される。明らかに湖沼地帯の環境に生息していないものにはハマグリやスズキがある。これらは海浜地域の集落との交流によってもたらされたものであろう。

4. 考　察

出土土器について

今回の調査で出土した土器には、縄文時代中期・後期・晩期のものがある。ここではこれらの編年的位置について検討する。

中期の土器は堆積層から1点出土しているのみで、文様の特徴から大木9式と思われる。

後期の土器は土壙・堆積層・表土・第1トレンチなどから出土している。これらの土器は器形や文様の特徴の類似により後期後葉の金剛寺式に位置付けられると考えられる(伊東:1957)。さらにその多くは金剛寺式の中でも比較的新しい段階とされている中沢目貝塚第 1 群土器(須藤：1984)や田柄貝塚第Ⅶ群土器(阿部・手塚：1986)に類似している。

晩期の土器は Ⅰ～Ⅴ類に分類された。Ⅰ類は入組三叉文を含む三叉文を基調とした文様が施されるものである。Ⅱ類は羊歯状文を基調とした文様が施されるものである。Ⅲ類は雲形文が施されるものである。Ⅳ類は口縁端部や頚部に刻目をもつもの、Ⅴ類は口縁部に瘤状突起と工字文をもつもので、いずれも第1トレンチからだけ出土し量的には少ない。

晩期の土器編年は山内清男によって岩手県大洞貝塚の資料を使って6型式に分けられ、その模式図が提示されている(山内：1930)。それに従えば倉崎貝塚のⅠ類は大洞Ｂ式に、Ⅱ類は大洞ＢＣ式に、Ⅲ類は大洞C_1式に、Ⅳ・Ⅴ類は大洞C_2式に相当すると考えられる。

以上、倉埼貝塚出土土器の編年的位置付けをしたが、問題点もある。大洞Ｂ式に位置付けられた晩期Ⅰ類と大洞ＢＣ式に位置付けられたⅡ類が堆積層の上部の5層から下部の31層までの各層で共伴していることである。このことは古くは岩手県雨滝遺跡の調査例から芹沢長介が指摘しており(芹沢：1960)、近年では須藤隆が田尻町中沢目貝塚の調査成果をもとに「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」としてまとめており、そのなかで詳しく述べている(須藤：

1984)。それによれば中沢目貝塚第3群土器では倉崎貝塚と同様に「入組三叉文」と「羊歯状文」が併存しており、この土器群を晩期第2期の北上川下流域・仙北湖沼地帯に分布する土器型式としている。詳細に比較すると倉崎貝塚Ⅰ・Ⅱ類土器と中沢目貝塚第3群土器は、三叉文をもつ土器と羊歯状文を持つ土器の比率などの点で相違は認められるが、相似する点も多い。このため現時点では倉崎貝塚Ⅰ・Ⅱ類土器は中沢目貝塚第3群土器と同一の時期の土器と考えておきたい。

遺構の年代

人骨を伴った第1土壙からは時期を特定できる遺物の出土は無かったが、この土壙に切られる第3土壙の堆積土から大洞B・BC・C_1式に比定される土器が出土している。このことから第3土壙の年代は大洞C_1式期以降と考えられ、それを切って掘り込まれる第1土壙も同様と考えられる。

5．まとめ

1. 本貝塚が初めて生活の場として利用されたのは縄文時代中期の大木9式期とみられる。
2. その後、後期後葉から晩期中葉にかけてはほぼ継続的に集落が営まれている。出土土器からみると、この中でも晩期前半に中心をおく貝塚で、この時期に貝層を含む厚い堆積層が形成されている。
3. 本貝塚は淡水産の貝種によって形成されており、ヌマガイ・オオタニシを主体としている。

引用・参考文献

阿部恵・手塚均(1986)：「田柄貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第111集

伊東信雄(1957)：「古代史」『宮城県史』1

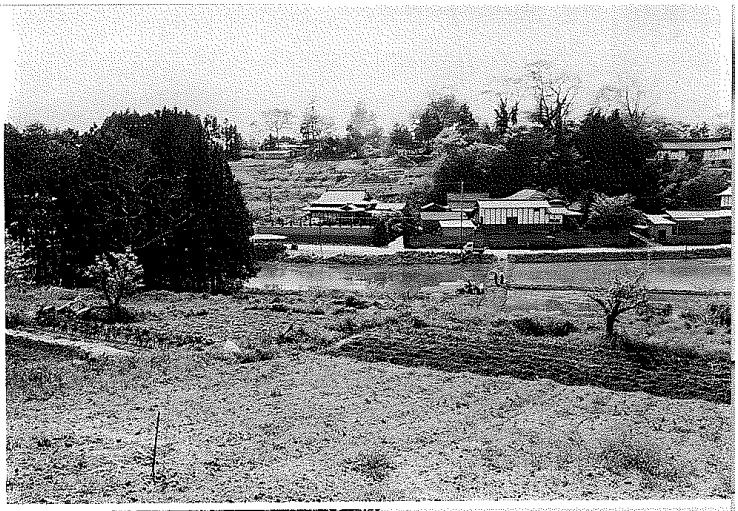
須藤隆(1984)：「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」『考古学雑誌』第69巻第3号

芹沢長介(1960)：『石器時代の日本』

山内清男(1930)：「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式上器の終末」『考古学』第1巻第3号

写　真　図　版

遺跡遠景
（東より）



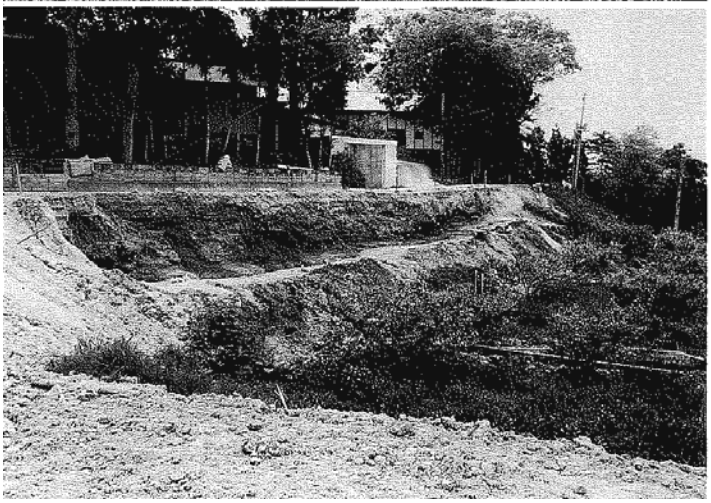
調査前の遺跡全景
（南より）

調査区全景

図版 1

第１土壙人骨出土状況

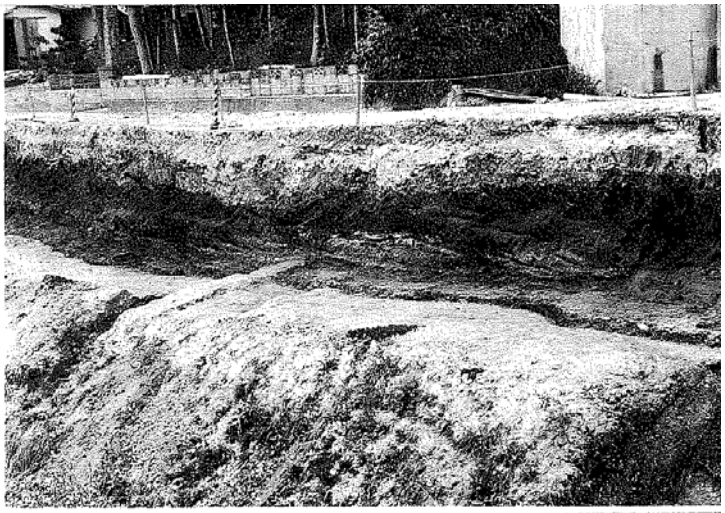
第１トレンチ



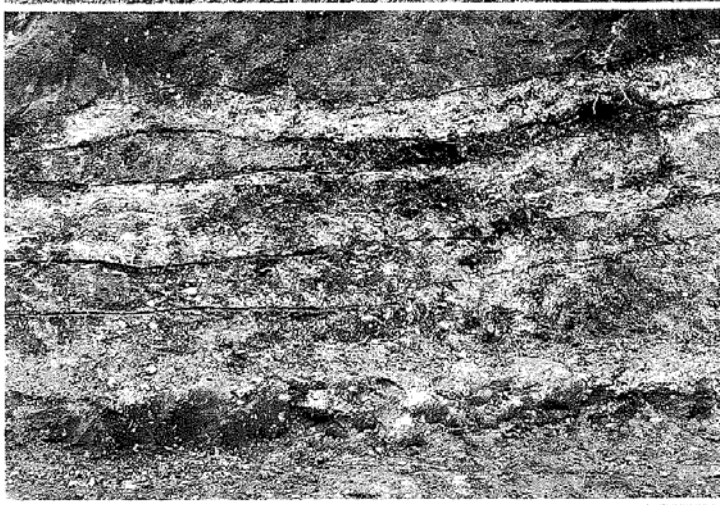
堆積層全景

図版２

堆積層（貝層）の状態

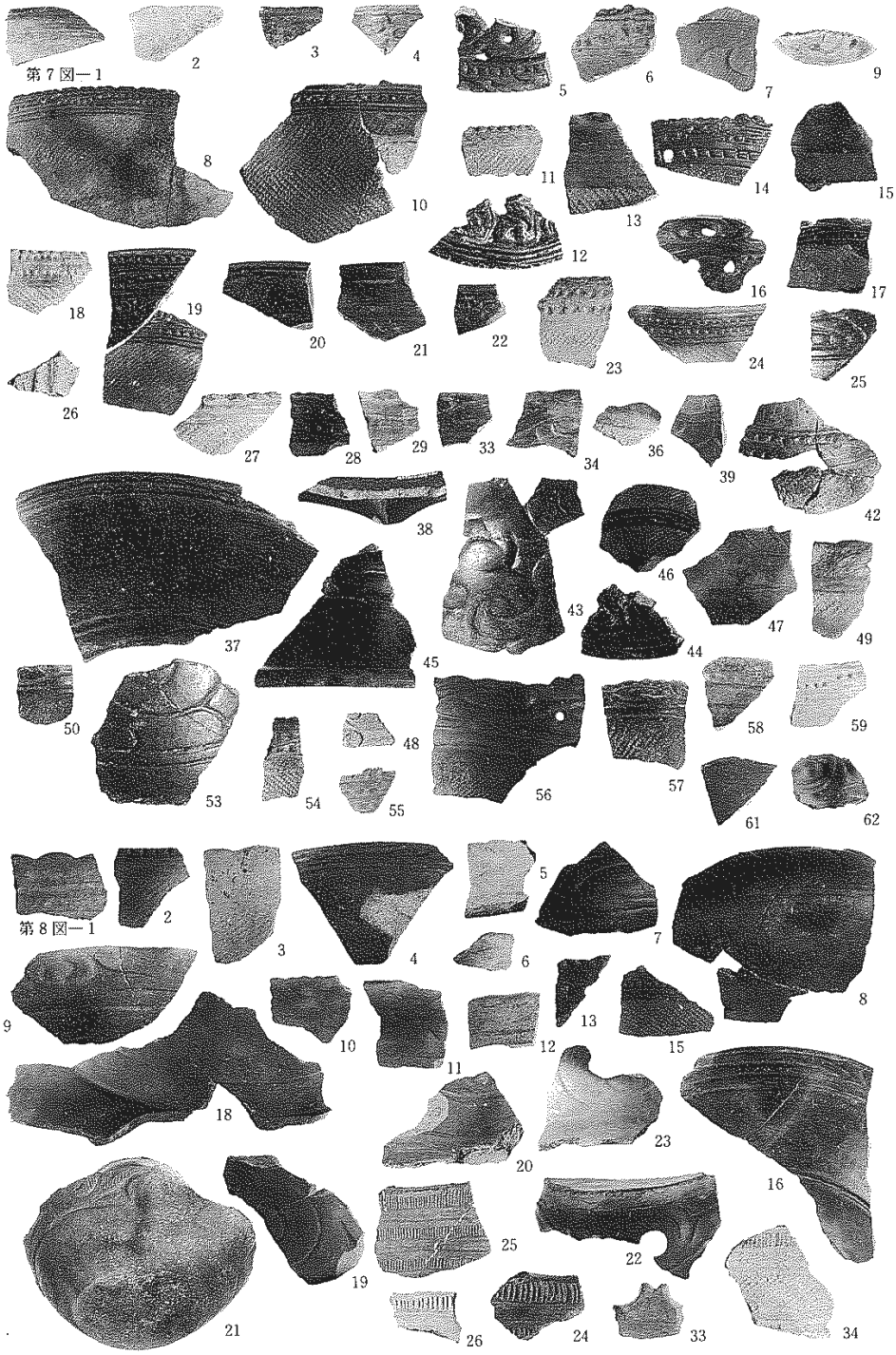


貝層細部

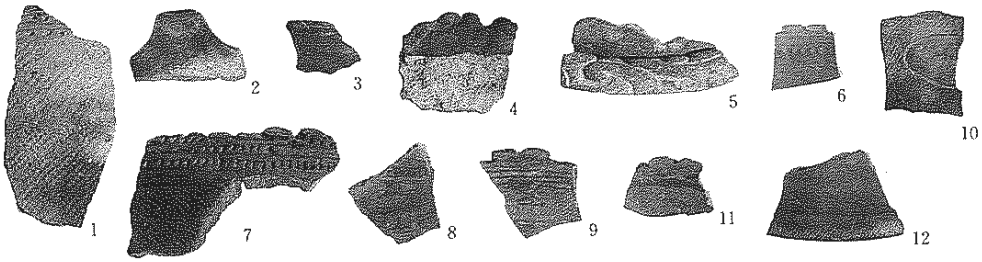


遺物出土状況

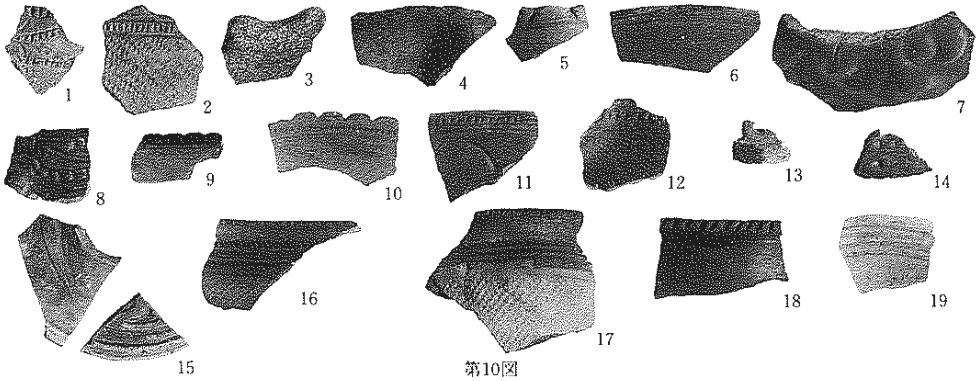
図版 3



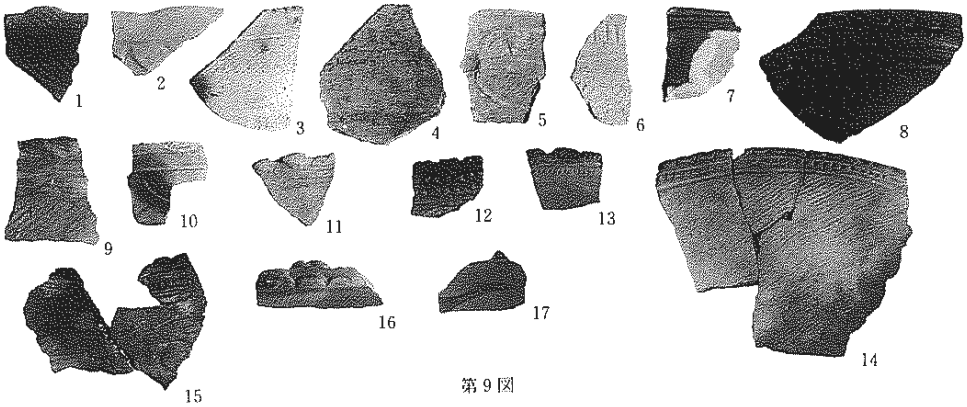
図版4　出土土器



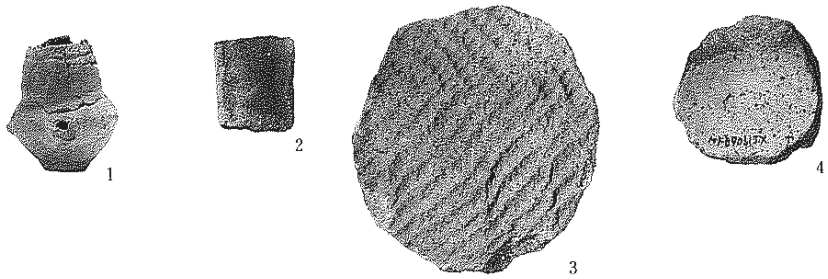
第６図



第10図

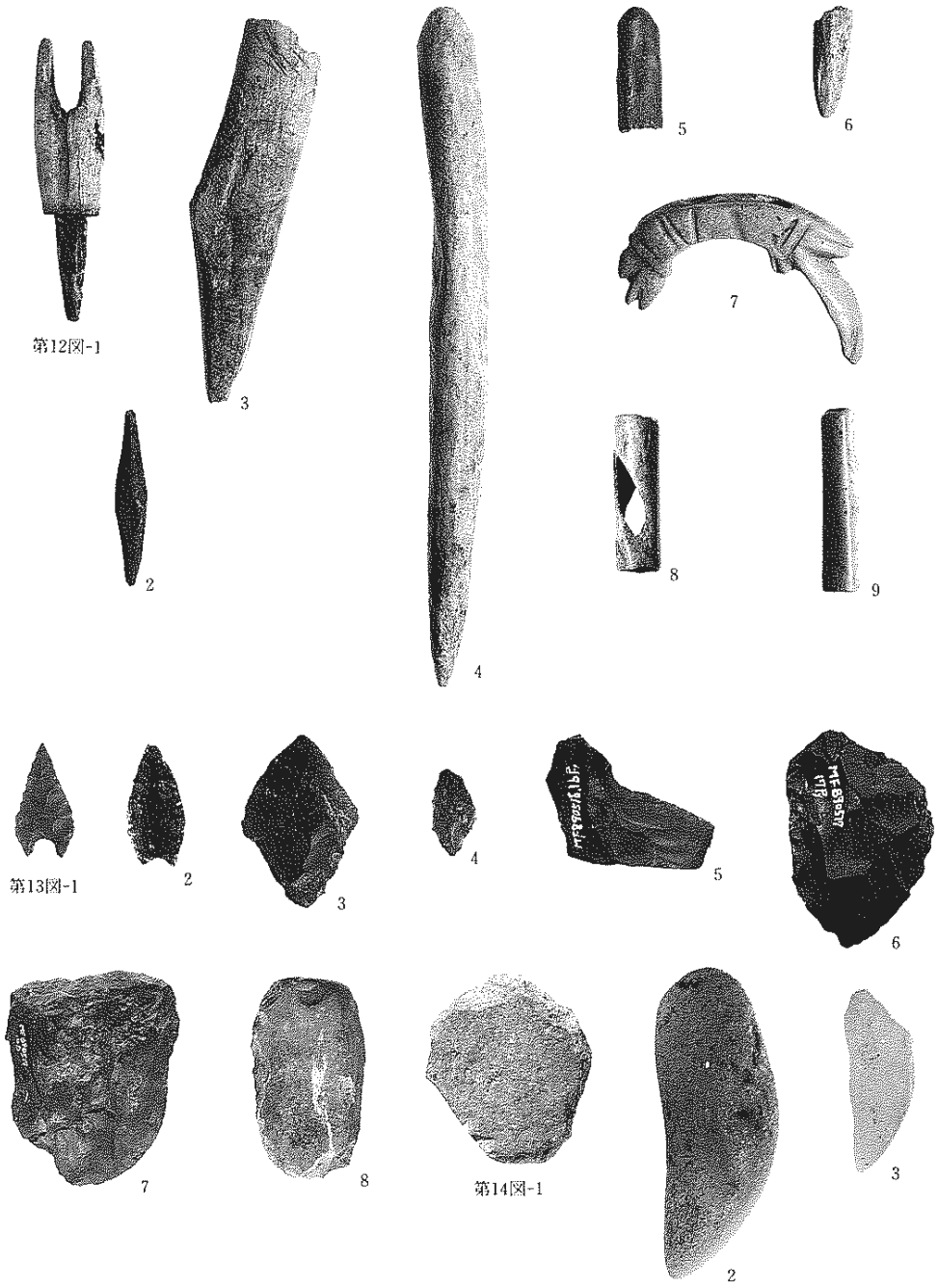


第９図



第11図

図版５　出土土器・土製品



図版６　出土骨角製品・石器

花山寺跡（かざんじあと）

目　　次

1. はじめに ･･･ 129
2. 調査の内容 ･･･ 131
3. 発見された遺構と遺物 ･･･ 131
4. 考察 ･･･ 139
5. まとめ ･･･ 141

調 査 要 項

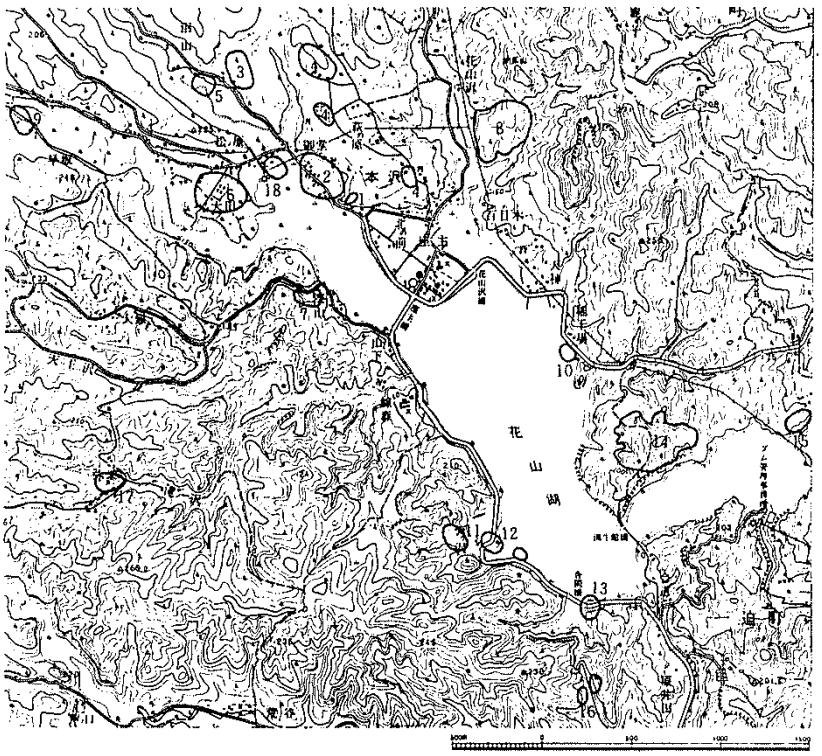
遺 跡 名：花山寺跡　ＮＧ（宮城県遺跡番号：50017）
所 在 地：宮城県栗原郡花山村字本沢御堂
発掘面積：300 ㎡
調査期間：平成元年 10 月 11 日～16 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・古川一明・吉田雅之・大和幸生

花山寺跡（かざんじあと）

1. はじめに

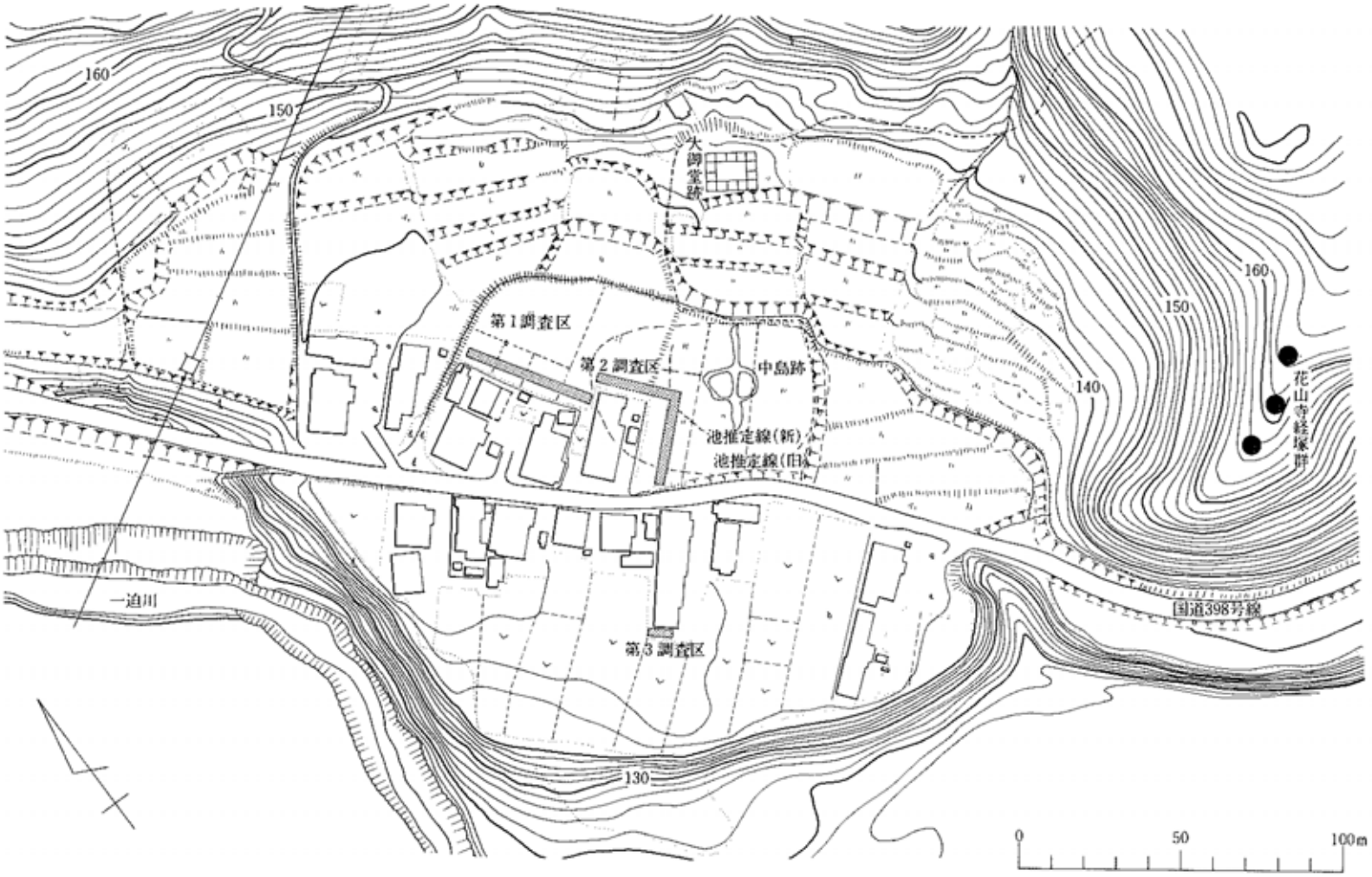
花山寺跡は栗原郡花山村本沢字御堂に所在する。花山村は宮城県の北西部に位置し、栗駒山や御駒山などの山に囲まれ、谷あいに開けた村である。花山寺跡は栗駒山に源を発する一迫川が開析した谷の中の、一迫川左岸の河岸段丘上の平坦地に立地している。

現在花山村には 50 ヶ所の遺跡が確認されている。その多くは縄文時代の遺跡である。これらの遺跡のうち本格的に調査の行なわれたのが花山寺跡と 3 基からなる花山寺経塚群である。花山寺跡は昭和 31 年東北大学教授伊東信雄氏によって発掘調査が行なわれ、この調査によって大



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	花山寺経塚群	丘陵	経塚	平安	10	荒井田遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中～晩）
2	花山寺跡	段丘	寺跡	平安	11	入角坊遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文，弥生，古代
3	花山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中～晩），弥生，古代	12	天沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中・晩）弥生，古代
4	萩の原遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（晩），弥生	13	合道D遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中），弥生
5	山大堂遺跡	扇状地	包含地・寺跡	縄文，平安	14	花山城跡	丘陵	城館	平安？中世
6	松の原遺跡	谷底平野	包含地	縄文（前・中・晩）	15	鹿入山横穴古墳群	丘陵斜面	包含地・横穴古墳	縄文，弥生，古代
7	天王坂遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中～晩）	16	原井田遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器，縄文（早～中）
8	百目木館跡	丘陵	城館	室町	17	長窪遺跡	丘陵斜面	集落跡	縄文（前・中）
9	早坂遺跡	谷底平野	包含地	縄文（前・後・晩），弥生	18	上関屋遺跡	段丘	包含地	縄文（中）

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図　花山寺跡調査区全体図

御堂とみられる5間4間の礎石建物跡1棟と池跡(橋脚・中島)が発見された。また昭和53年花山村教育委員会と宮城県教育委員会とによって地形測量調査が行なわれ、大御堂の南北の軸線と橋脚の方向が一致し、花山寺の中軸線とみなせることを確認した（花山村教委：1979）。これらの調査をもとにして伊東氏は花山寺が「浄土庭園をもつ臨池伽藍の一例」であり、「平安時代までにさかのぼり得る」とされた(伊東：1979他)。一方花山寺経塚群は昭和63年に宮城県教育委員会によって発掘調査が行なわれ、その中の1基が12世紀の経塚であることが確かめられた(赤沢：1989)。なお同報告では角田市高蔵寺・高蔵寺経塚群や平泉毛越寺・金鶏山経塚群とが平安時代の末期の同年代、そして共に浄土思想を背景として作られたことから、花山寺と花山寺経塚群が同じ頃(12世紀)に作られた可能性があると示唆している。

花山寺跡や花山寺経塚群のそばを国道398号線が通っているが、交通量の増加により、国道398 号線の改良拡幅工事が必要になり、路線敷にかかる住宅の移転が求められた。その移転予定地が花山寺跡内に位置することがわかったため、遺構の有無(分布)の確認調査を行なうことになった。

2．調査の内容

移転予定地で任意の調査区3か所(第2図)を設定した。調査区は大御堂跡からは西に、推定池跡からは北西に位置し、大御堂から約150mの圏内で設定した。第1調査区(約120㎡)は花山寺の北西の広がりを確認するため第2調査区の北端から設定した。第2調査区(約150㎡)は池跡の大きさを確認するため、池の中にあたる地点から北と西へ延長して設定した。第3調査区(約30㎡)は花山寺の西への広がりを確認するため国道の西側に設定した。調査区は細長いため、遺構が一部しか検出されなかったものもある。そのため大きさ・形状・方向などが不明なものも多い。

遺構については任意の基準点を設定し、1/20で測量を行ない、平面図を作成した。また写真撮影も行なった。調査区全体とこの基準点については、1/100および1/1000の平面図を作成し国家座標に対応させた。

3．発見された遺構と遺物

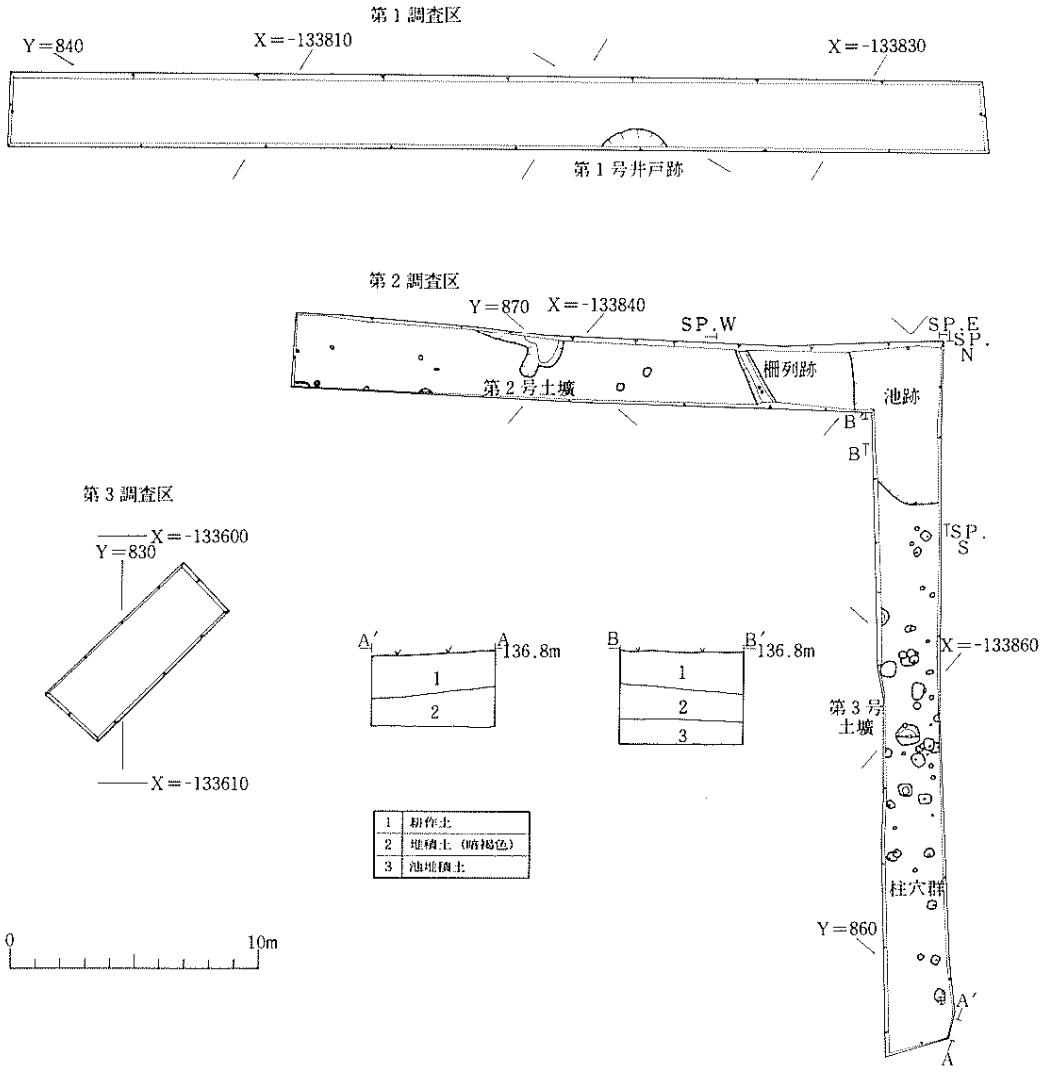
発見された遺構と遺物について簡単に触れる。第1調査区では井戸跡を検出し、井戸跡の出土遺物として中世陶器・土師質土器・砥石・漆器などがある。第2調査区では池汀を検出し、その周辺に柵列跡・柱穴群・土壙を確認した。遺物は土師器質土器・砥石を出土した。第3調査区では遺構遺物は検出されなかった。基本層位は以下のようになる。第1層は現耕作土で第2層は旧耕作土(暗褐色土)である。第2調査区では上2層の下に一部分であるが、第3層として旧表土がある。第4層は礫混じりの黄褐色土で地山であり、遺構確認はこの面で行なった。(第3図・第4図)

第１調査区

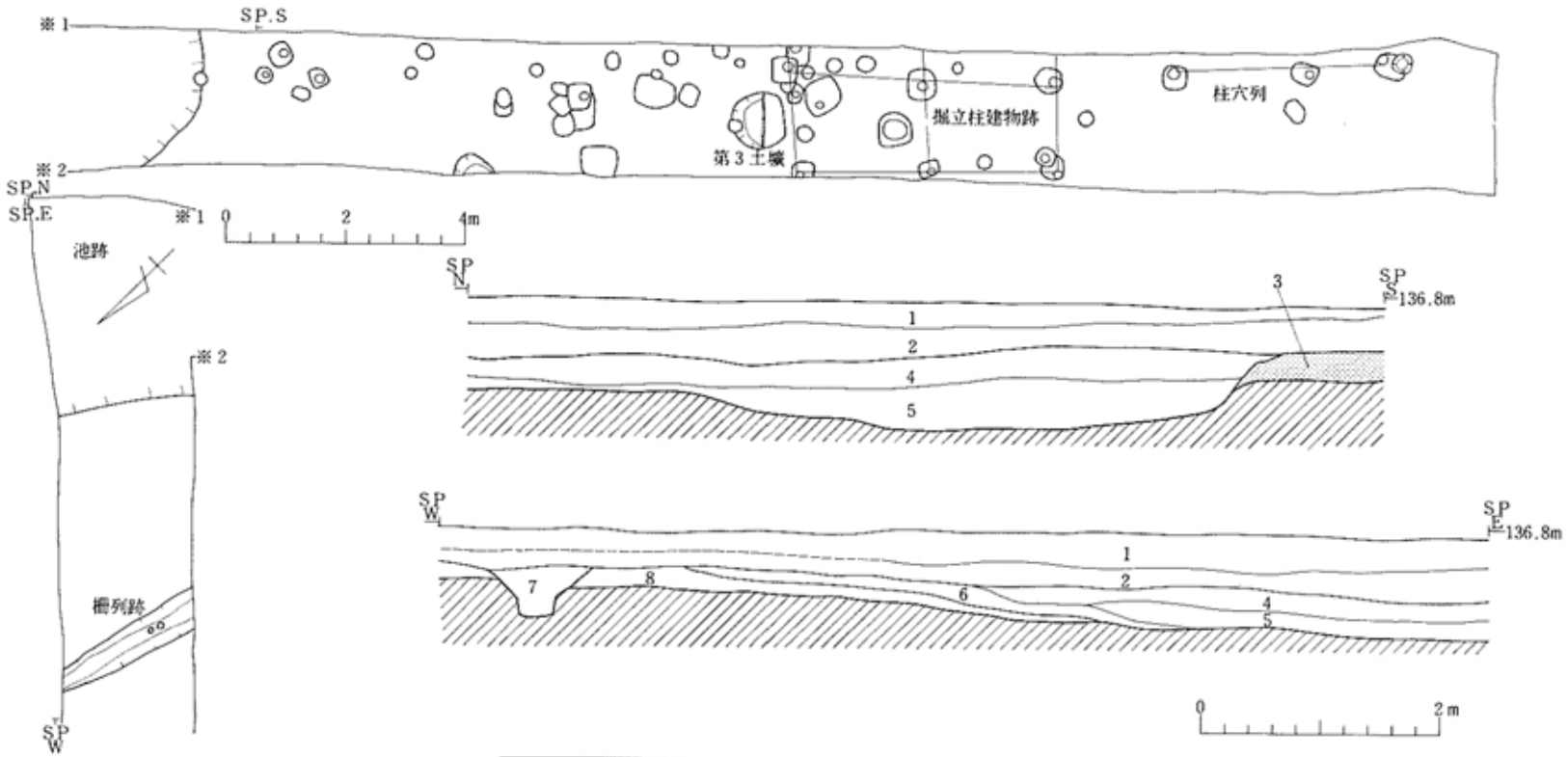
第１号井戸跡　第１号井戸跡は調査区の中央やや南よりの調査区の西端で遺構の一部を検出したが、遺構の大部分は調査区外にある。遺構確認面は旧耕作土の下の地山面である。平面形は円形を呈すると推定される。堆積土は粘性の強い黒褐色土である。出土遺物は堆積土層から中世陶器・土師質土器(かわらけ)・漆器(小皿・椀)・木製品・石製品がある。

第２調査区

第２調査区は鍵形に設定した。南北方向の部分を北区、東西方向の部分を南区として２つに分けて述べる。



第３図　調査区遺構配置図



No	土　　色	土　性	そ の 他
1	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	現耕作土
2	暗灰色(N　3/0)	粘質シルト	旧耕作土
3	褐　色(10YR4/4)	シルト	積土　炭・地山粘土を含む
4	暗褐色(10YR4/3)	シルト	池埋土　炭化物を含む
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	池埋土　炭・地山粘土を含む
6	暗灰色(N　3/0)	砂質シルト	池埋土
7	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	柵列跡埋土
8	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	旧表土層

第4図　第2調査区部図・土層断面図

北　区

第2号土壙

北区のほぼ中央、東寄りのところで一部が検出された。遺構確認面は旧表土層下の地山面である。平面形は不整な楕円形と考えられる。堆積土は粘性の強い黒色土である。

柵列跡

北区の南より池跡の東汀線から北へ約 4m付近で検出した東西方向に延びる溝状の柵列据え方である。掘り込み面は断面図が示すように旧表土層からであるが、遺構確認は旧表土層下地山面で行なった。確認面での据え方上幅は40〜60㎝、下幅は20〜25㎝になる。構築は30㎝ほどの溝を掘り、その中央部の材木を立て並べる部位をさらに20㎝ほど溝状に掘り込むという二段階を経ており、その過程が東壁断面図(第4図)からわかる。堆積土は黒褐色土の粘土である。底面から2個の柱痕跡を検出した。

北区の北端から若干のピットが検出された。ピットの大きさ・形状は多様で、柱痕跡は確認できなかった。埋土はおおむね褐色土である。

池　跡

北区と南区の角に位置し、池全体から見れば北西の一部を検出したことになる。遺構確認は旧耕作土層下で確認した。その構築にあたっては西の汀で積土をした後、池を掘り込んでいる。堆積土は2枚あり、暗褐色土でその下は黒褐色土になる。遺物は堆積土中から土師質土器・砥石が出土した。

南　区

第3号土壙

南区のほぼ中央で検出された。遺構確認面は旧耕作土層下の地山面である。平面形は不整な方形で70×80㎝程度の大きさになる。深さは遺構確認面から約10cmほどである。

柱穴列(掘立柱建物跡)

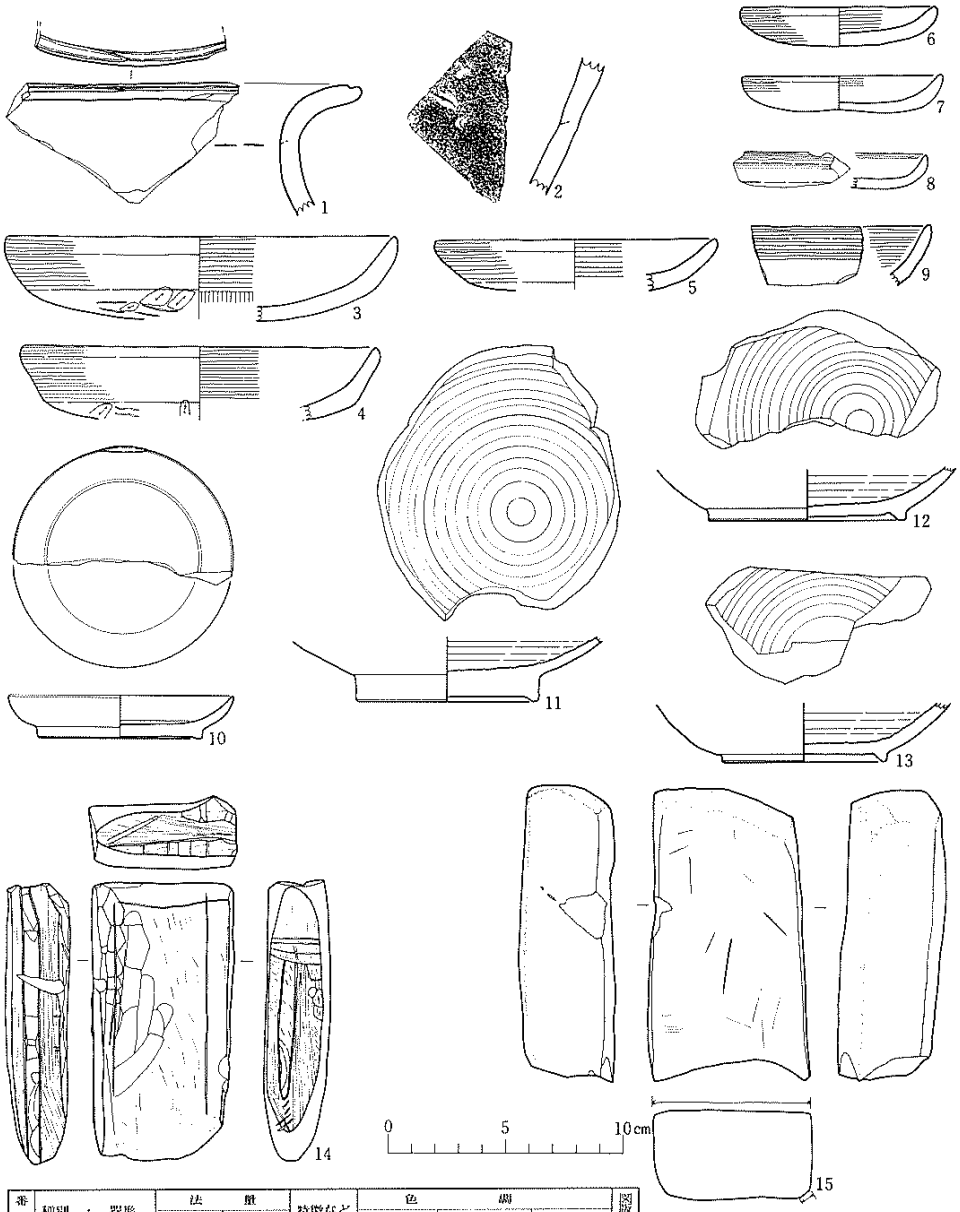
柱穴は南区のほぼ全域で検出された。遺構確認面は第3号土壙と同様の旧耕作土下の地山面である。柱穴の一辺が30〜60㎝の方形を呈する大型の柱穴と直径20〜30㎝の円形を呈する小型の柱穴の2つに分けられる。大型の柱穴の中には直径10〜20㎝の柱痕跡を有するものもある。柱穴埋土は褐色土もしくは黄褐色土である。これらの柱穴の中には図示したように組み合う柱穴がいくつかある。

遺　物

第1号井戸跡出土遺物(第5図)

中世陶器(1・2)

(1)甕の口縁部で、頸部から外反し口縁端部に続き、口縁部の最末端部に沈線が施されてい



番号	種別・器形	法量		特徴など	色調			図版No.
		口径	器高		内面	外面	胎土	
1	中世陶器・甕				赤褐色	緑灰白色	明褐灰色	1
2	中世陶器・甕				灰白色	にぶい赤褐色	赤褐色	
3	土師質土器・皿	16.6 cm	(3.6) cm	手づくね	灰白色	灰白色	灰白色	7
4	土師質土器・皿	15.2 cm	(3.2) cm	手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	6
5	土師質土器・皿	11.9 cm	(2.2) cm	手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	
6	土師質土器・小皿	8.3 cm	1.8 cm	手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	9
7	土師質土器・小皿	8.2 cm	1.6 cm	手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	11
8	土師質土器・皿			手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
9	土師質土器・皿			手づくね	暗褐色	暗褐色	暗褐色	

第5図　第1調査区井戸跡出土遺物

る。沈線は幅3㎜程度で切りあいが見られ、ロクロの回転が右回りであることがわかる。口縁の形態は受け口状の口縁といえるものではない。

(2) 甕の体部破片で、内側は降灰をうけていて、粘土紐の積み上げ痕もみられる。1・2 共に常滑系の中世陶器である。

土師質土器(3〜11)

すべてが手づくねの成形でロクロ成形の土師質土器はない。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部では上方に向いている。胎土には砂分の少ない精良なもので、焼成もよくかなりしまっている。外面は口縁から体部上方上方にかけてヨコナデがみられ、底面から体部下方にかけて、ケズリの調整が見られる。内面はすべてナデである。

漆器(10〜13)

小皿(10)黒漆塗無文の小皿である。漆は高台内面を除くすべてに塗られ、見込みはかなり厚く塗られている。口径9.2㎝、高台径7.0㎝、器高1.8㎝

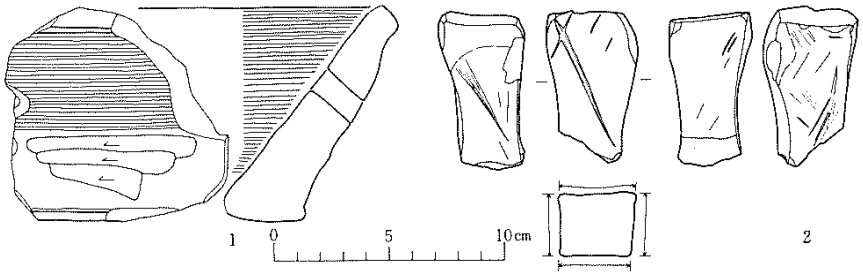
椀(11〜13)黒漆塗り無文の椀で、口縁部の残っているものはなく法量は不明である。成形はロクロ挽き成形で、ロクロ挽きの痕跡は内面に顕著で、漆が塗られているにもかかわらず、指でその凹凸がわかる。漆は高台内部を除き全面に塗られている。高台は1㎝を超える高いもの(11)と0.5㎝程度の低いもの(12・13)からなる。

硯未製品(14)板状の石製品であり、左右両端及び上方部をすり切っている。両側から徐々に切り込んでいき、最後に打撃を加えて折っている。右側面にはすり切った後に表面を平坦にするための削った痕跡がある。前面にも削った痕跡と、研磨したために生じた擦痕が多く見られる。平行する2条の線刻とそれに直交する1条の線刻があり、硯の縁と海部・陸部を分けるための線刻と考えられる。長さ11.4㎝幅6.2㎝厚さ2.9㎝。

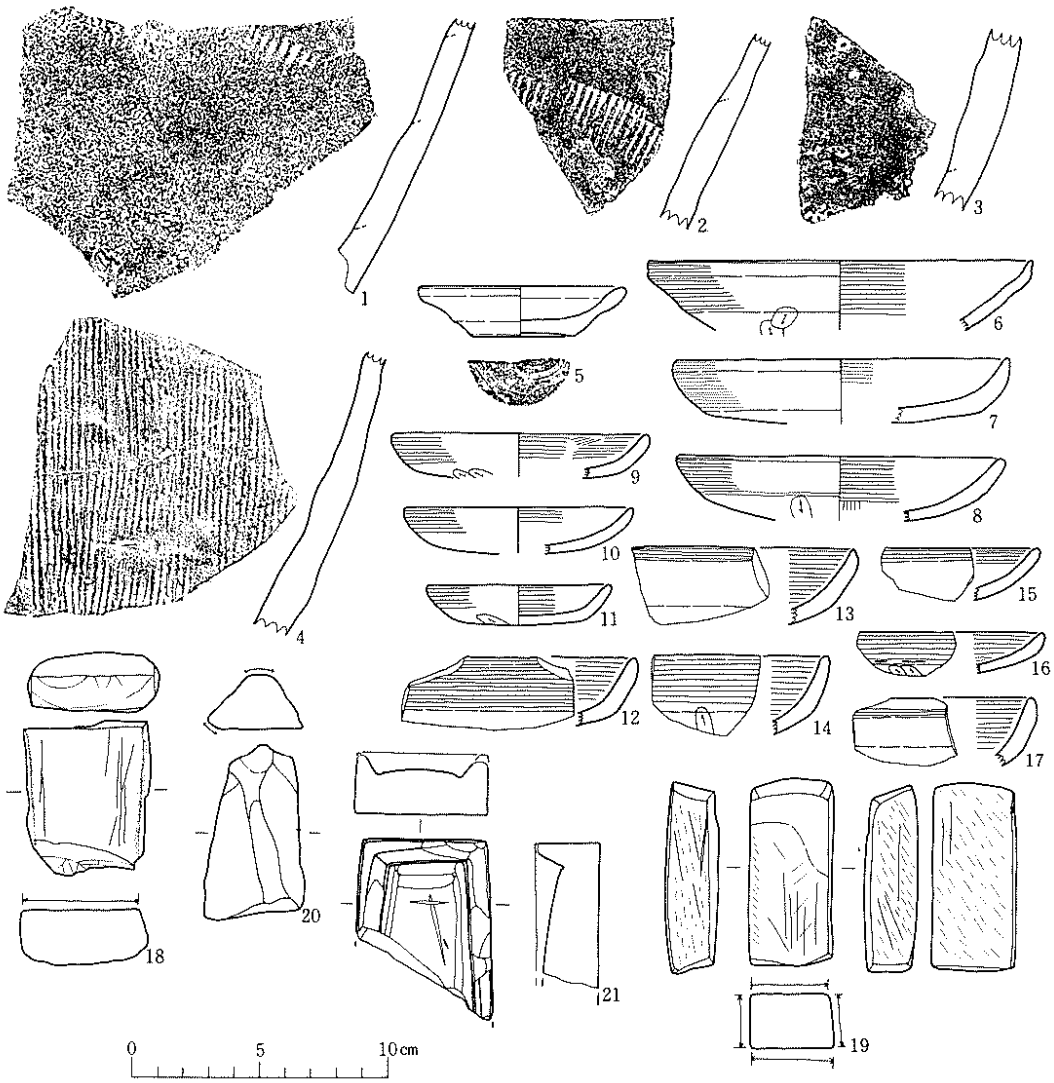
砥石(15)板状の砥石で擦痕を有する使用面が1面ある。長さ12.5㎝幅6.9㎝厚さ4.1㎝。

池跡出土遺物(第5図)

土師質土器(1)この土器は全体的に分厚く、体部が直線的に立ち上がっていて、かなり分厚い口縁端部を形成している。色調は灰白色である。外面は体部上方がヨコナデが行なわれ、体



第6図　池跡出土遺物



番号	種別・器形	法量 口径	法量 器高	特徴など	色調 内面	色調 外面	色調 胎土	図版No.
1	中世陶器・甕			押印	灰色	緑灰白色	灰白色	2
2	中世陶器・甕			押印	明褐灰色	にぶい赤褐色	明褐灰色	3
3	中世陶器・甕			押印	灰黄褐色	緑灰白色	明褐灰色	
4	中世陶器・甕			タタキメ	緑灰色	緑灰色	青灰白色	5
5	中世陶器・皿	8.0 cm	2.0 4.1	回転糸切	青灰白色	青灰白色	青灰白色	4
6	土師質土器・皿	15.1 cm	(3.5) cm	手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	
7	土師質土器・皿	13.2 cm	(2.5) cm	手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	8
8	土師質土器・皿	12.8 cm	(2.6) cm	手づくね	灰白色	灰白色	灰白色	
9	土師質土器・小皿	10.0 cm	(1.8) cm	手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	

番号	種別・器形	法量 口径	法量 器高	特徴など	色調 内面	色調 外面	色調 胎土	図版No.
10	土師質土器・小皿	9.1 cm	(1.8) cm	手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	10
11	土師質土器・小皿	7.2 cm	(1.7) cm	手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
12	土師質土器・皿			手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	
13	土師質土器・皿			手づくね	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	
14	土師質土器・皿			手づくね	灰白色	灰白色	灰白色	
15	土師質土器・皿			手づくね	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
16	土師質土器・皿			手づくね	灰白色	灰白色	灰白色	
17	土師質土器・皿			手づくね	灰白色	灰白色	灰白色	

第７図　第１調査区遺構外の出土遺物

部下方は粘土を張りつけ、引き伸ばしている。内面はヨコナデである。なお体部には貫通孔があり、このためこの土器の用途は特別なものと考えられるが、詳細は不明である。

砥石(2)長さ6.5㎝、幅4.0㎝、厚さ2.8cm　使用面は4面あり、研磨溝・擦痕がある。

遺構外の遺物(第7図)

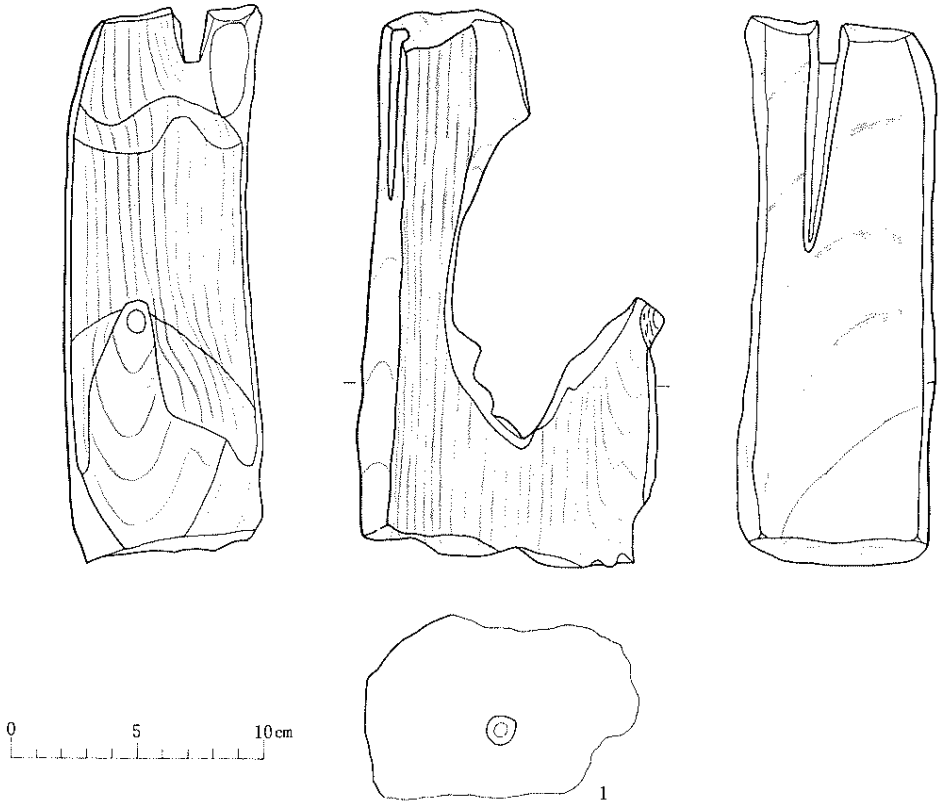
第1調査区の遺物は遺構確認中の出土で第1号井戸跡周辺が多い。

中世陶器(1〜5)

瓷器系陶器1〜3は甕の体部破片で、1・2にはスダレ状押印がみられる。1〜3は内外面・胎土の色などから常滑系の中世陶器と見られる。

須恵器系陶器(4・5)4 は還元炎焼成でタタキメは浅く上下がそろえられて、埋めつくされている。このタタキメの特徴や還元炎の焼成などから須恵器系の中世陶器と見られる。5 は還元炎焼成の小皿で、ロクロの成形である。体部は直線的に立ち上がり、体部中央では器壁が薄く、口縁部では厚くふくらんでいる。

土師質土器(6〜17)



第8図　池跡周辺出土遺物

すべてが手づくねの成形でロクロ成形の土師質土器はない。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部では上方に向いている。胎土には砂分の少ない精良なもので、焼成もよくしまっている。外面は口縁から体部上方にかけてヨコナデがみられ、底面から体部下方にかけて、ケズリの調整が見られる。内面はすべてナデである。

砥石(18～20)

18 は前面に擦痕が認められる。長さ 5.7 ㎝、幅 4.9cm、厚さ 2.5cm

19 は前後面など 5 面に多くの擦痕が認められる。長さ 7.4 ㎝、幅 3.4 ㎝、厚さ 2.2 ㎝

20 は擦痕はないが、研磨によりくぼんでいる面がある。長さ 6.9 ㎝、幅 4.0 ㎝、厚さ 2.2 ㎝

硯(21)海部が残った硯の破片である。全体の形は陸部に行くにしたがって幅が広くなる台形を呈すると考えられる。海部には海部を作る際の削りの細長い痕跡が見られる。

第 2 調査区遺構外(池周辺)出土遺物(第 8 図)

不明木製品(1)

かなり破損しているが、角材を加工したものである。加工としては 3 種の孔がある。(1)、この角材を上から下に貫通する最大の貫通孔、この孔の現存幅は約 7 ㎝あり、本来の最大幅は 7～8 ㎝と推定される。(2)(1)の孔の脇にある長さ 9 ㎝深さ 3㎝幅 0.5～1.5 ㎝の溝状の孔(3)(1)の孔の横から穿たれて、(1)の孔まで貫通している直径 1 ㎝ほどの貫通孔　この木製品はこれらの加工を有する建築材とみられる。

4. 考察

(1)遺物

中世陶器　出土した中世陶器の中では常滑系の陶器が多い(井戸跡出土 1・2、遺構外出土 1・2・3)特に井戸跡出土 1 は縁帯がなく、口縁端部に沈線が施されている点から、12 世紀後半の陶器と見られる。遺構外出土 4 は須恵器系の中世陶器であるが、典型的な珠洲系陶器とも平泉柳之御所出土の須恵器系陶器とも異なる(愛知県教委：1988、赤羽：1984)。遺構外出土(5)は小皿であるが、器形が山皿といわれるものに類似する。※註

土師質土器(かわらけ)

今回の調査で出土した土師質土器はすべてが手づくね成形のものである。しかし数が少なく、また大半が破片であるため、十分な検討分析はできない。その中で口径・器高を復原できたもの、器高をある程度推定できるものを集め検討していく。その際井戸跡出土の遺物だけでなく、井戸周辺出土の遺物も用いることにする。

法量の数値をまとめるならば、口径が 12～17 ㎝のものの器高は 2～4 ㎝程度になり(1)、口径が 7～9 ㎝のものは器高が 2 ㎝未満になる(2)。この結果(1)と(2)に二つの大小のグループに分けてみることも可能であろう。

このような大きさのグループは平安京・平泉・多賀城でみられ、坏と小皿、大皿と小皿のセット関係があるととらえられている。

器形の特徴としては体部が内彎して立ち上がり、口縁端部が上方に直立する特長がみられる。

土器に施される調整は外面の上方と内面はヨコナデであり、手づくねの土師質土器には一般的な調整である。外面の体部下方から底部にかけてケズリの調整が見られる。このケズリは岩手県毛越Ａ遺跡出土の土師質土器に類似の調整例(岩手県教育委員会：1980)がある。Ｆｂ27 地点Ⅱｂ層出土の土器であり、Ⅰ－1 に分類されている手づくね成形の大皿である。体部が内彎して立ち上がり、口縁端部がつまみあげられ丸味を帯びるという特徴が掲載図面からわかる。毛越Ａ遺跡出土の土師質土器の年代は柳之御所など平泉周辺の遺跡出土の土器との類似性を指摘し、平安時代末期から鎌倉時代初期にしているようである。

花山寺で出土した土師質土器の年代を検討する。花山寺跡で出土した土師質土器は平泉柳之御所跡(平泉教育委員会：1989 など)、多賀城跡第 50 次調査(多賀城跡調査研究所：1989)、上述した毛越Ａ遺跡および平安京出土の土師質土器に類似例を見いだす。柳之御所では平安時代 12 世紀、毛越Ａ遺跡と多賀城では平安時代末期から鎌倉時代初期とされている。平安京では平安時代から江戸時代まで分類と編年が行なわれている(横田洋三：1984)。花山寺の土師質土器この編年のなかではＡタイプ中のA2 タイプに類似している。Ａタイプの特徴は①手づくね成形②茶褐色から赤褐色を呈す③大血小皿の 2 種類の規格で構成する。A2 タイプと他のＡタイプとの関係を簡単にまとめるとA1 タイプは口縁端部が外傾し、A2 タイプの特徴は口縁部が 1 段または 2 段のナデにより内彎しながら立ち上がるというものである。A3 タイプは体部から口縁端部まで直線的に立ち上がる。年代的にはA1→A2→A3 と新しくなり、絶対年代では 11～13 世紀頃までみられるとしている。このA2 タイプの年代は 12 世紀になる。これらの検討を通じて花山寺で出土した土師質土器の年代は 12 世紀を中心にして 13 世紀に入る可能性もあるとしたい。前述したように井戸跡から出土した常滑系の甕口縁部破片は 12 世紀代の甕と考えられることからも、井戸跡出土の遺物は平安時代末期のものである可能性が強い。

(2)遺　構

遺構の年代は次のように考えられる。まず井戸は 12 世紀に使われている。池は年代のわかる遺物がないが、やはり 12 世紀には水をたたえていたと考えられよう。柵列跡、第 2・3 号土壙、柱穴跡は遺物がないが、井戸と同時期であるという可能性はある。次に遺構の性格や配置について簡単に触れていくことにする。

池跡　今回の調査で南西の一部が確認されたことになるが、推定よりは西で 20mほど小さくなることがわかった。

柵列跡　柵列は池跡の南にはこのような柵列はなく、本柵列は池の東側に限って区画した施

設であることがわかる。

第1号井戸跡　井戸跡の花山寺内の位置付けや性格を考える場合、参考になるのは東大寺である。東大寺には二月堂閼伽井屋(若狭井屋)があり、そこの井戸から汲む水は仏事にのみ使われるという(平岡：1973)。花山寺でもこの第1号井戸跡がそれに似た役割をもつものと考えられる。『安永風土記書出』栗原郡一迫花山村の旧蹟条大御堂項には「閼伽井派」とあり、閼伽井があったのであろう。僧侶の日常生活に使われる井戸さらにその井戸を有する僧坊は御堂地区内でも少し離れた場所にあると推定できる。『同風土記』には「山居坊・釜田坊・学坊」とあり、僧坊の存在は十分ありうる。

掘立柱建物跡　池をはさんで大御堂と対面する配置の建物があったということがわかる。宇治の平等院には池をはさんで河弥陀堂と対面する小御所があったとされている(杉山信三:1981、森蘊：1986)。花山寺でもそれに類する建物と考えられよう。

5．まとめ

1. 花山寺跡は一迫川左岸の河岸段丘上に立地している臨池伽藍様式の寺院跡である。
2. 調査区を3ヶ所設定したが、そのうち第1調査区から井戸跡、第2調査区から池跡・柵列跡・掘立柱建物跡・土壙を検出した。
3. 井戸跡から常滑系の陶器など中世陶器、土師質土器(かわらけ)、漆器、砥石、硯、硯未製品などを出土し、その周辺でも中世陶器・土師質土器などを出土した。
4. 出土土器の年代は常滑系の甕の口縁部破片は 12 世紀後半、土師質土器がおおむね平安時代末期(12 世紀)を中心とするものと考えられた。
5. したがって井戸跡・池跡・掘立柱建物跡などの遺構の年代も平安時代末(12 世紀)と考えられる。
6. 池の大きさが北西の一部でわかり、柵列が寺域の東を区画していること、また井戸・掘立柱建物など施設の配置をある程度考えられるようになった。

引用参考文献(五十音順)

愛知県教委(1988)：『愛知県古窯跡分布調査報告Ⅵ(常滑古窯跡群)』　愛知県教委

赤沢靖章(1989)：「花山寺経塚群」『宮城県文化財調査報告書』第131集　宮教委

赤羽一郎(1984)：『常滑焼』　ニュー・サイエンス社

伊東信雄(1974)：「花山寺考」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』　同大学文法経学会

伊東信雄(1979)：「花山寺跡について」『花山村文化財調査報告書』第1集

岩手県教委(1980)：「毛越Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ｖ』岩手県文化財調査報告書第54集

杉山信三　(1981)：『院家建築の研究』　吉川弘文館

多賀城跡調査研究所(1989)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報(第50次調査)』

東大寺教学部編(1973)：『東大寺』　学生社

花山村(1978)：『花山村史』　花山村史編纂委員会

平泉町教委(1989)：「柳之御所跡発掘調査報告書」『岩手県平泉町文化財調査報』第15集

真山　悟(1979)：「花山寺跡」『花山村文化財調査報告書』第1集

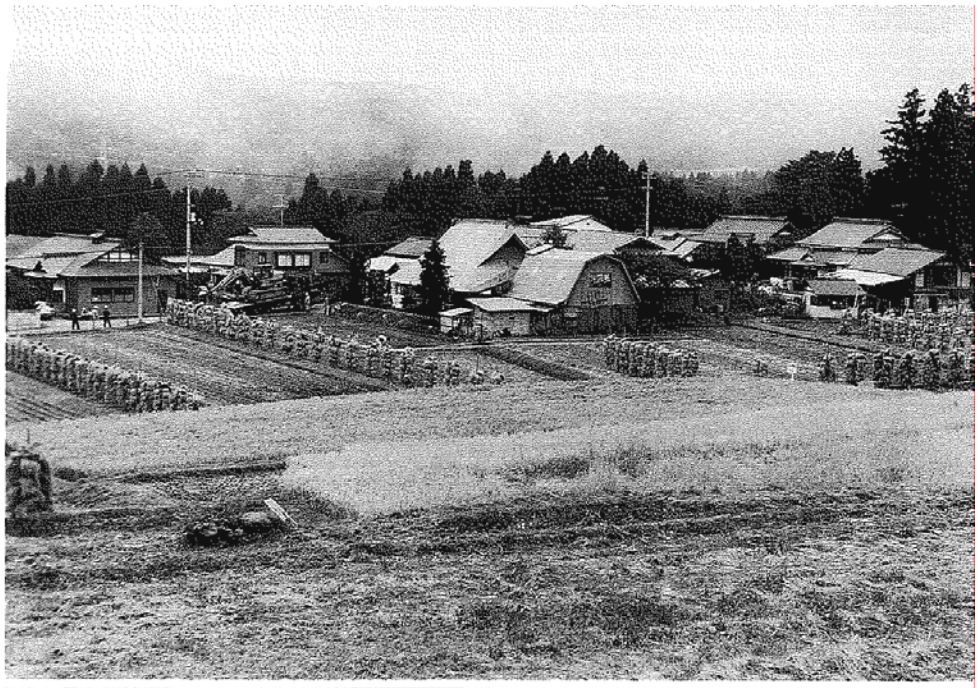
宮城県(1952)　：　「安永風土記書出」『宮城県史』第25巻

森　蘊　　(1986)：『「作庭記」の世界』　日本放送出版協会

横田洋三(1984)：「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡研究調査報告第11輯平安京左京四条三坊十三町』古代学協会

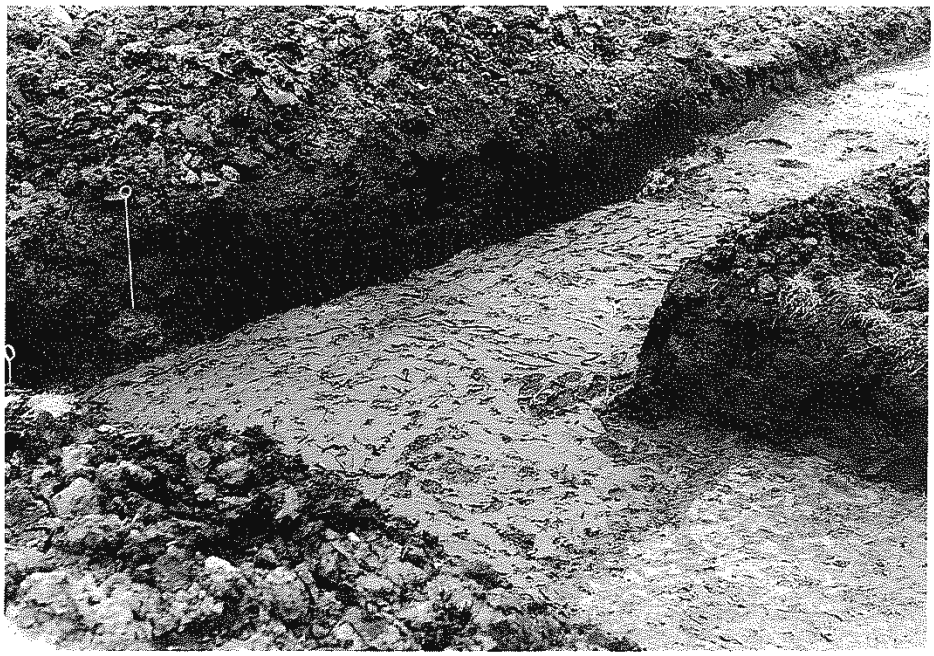
註　中世陶器や土師質土器について、東北歴史資料館藤沼邦彦氏に御教示頂いた。また仙台市教育委員会の佐藤洋氏にも御教示頂く機会があった

写　真　図　版

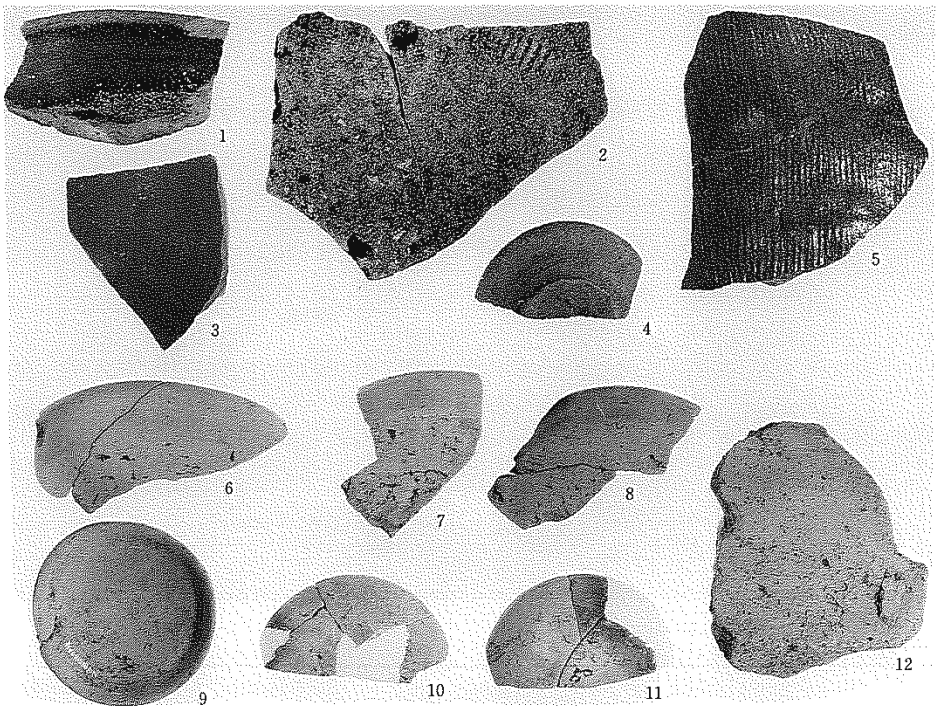


上．調査区遠景（大御堂より）
下．第２調査区（南西より）

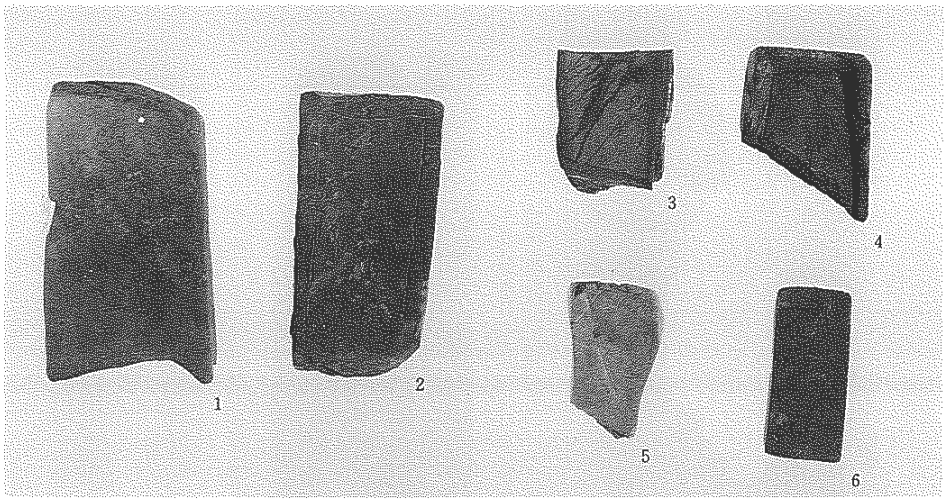
図版１



図版２―１　池跡検出状況



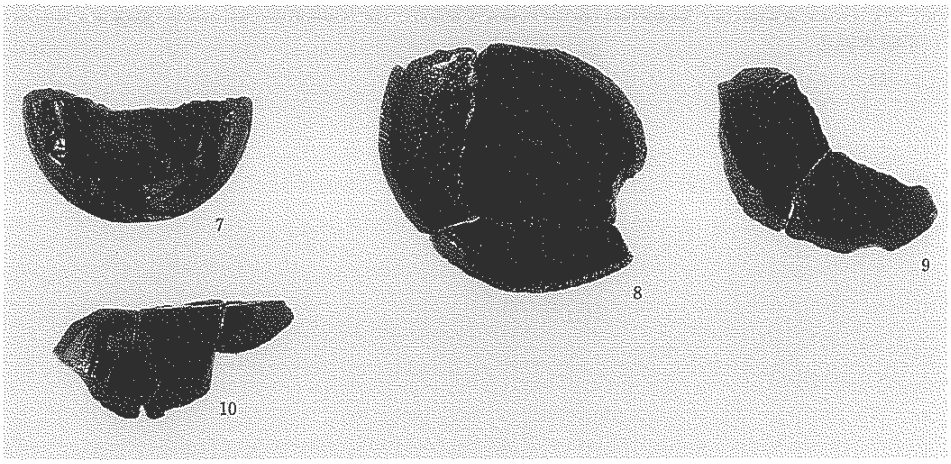
図版２―２　出土土器（中世陶器・土師質土器）



図版３－１

硯石・硯・硯未製品

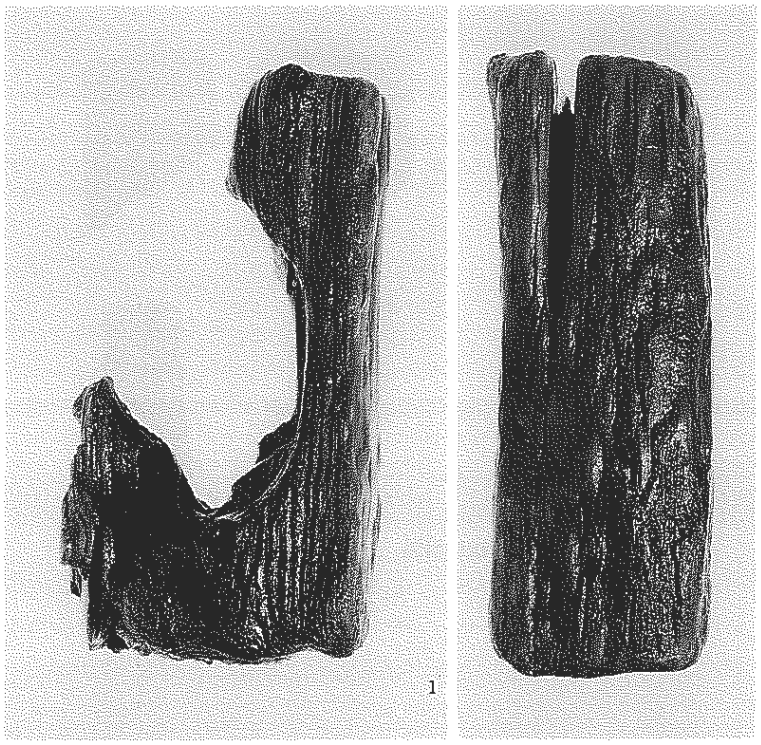
１－図５・16　３－図７・８　５－図６・２
２－図５・15　４－図７・21　６－図７・19



図版３－２

漆　器

７－図５・10　８－図５・11　９－図５・12　10－図５・13



図版 4

不明木製品

1 ―図 8 ・ 1

小林（こばやし）・稗柄（ひえがら）遺跡（いせき）

調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県柴田郡大河原町小山田字小林
宮城県柴田郡村田町沼田字稗柄

調査面積：小林遺跡（06001）　2000 ㎡　稗柄遺跡（07115）　550 ㎡

調査期間：1989 年 10 月 2～6 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調　査　員：白鳥良一　菊地逸夫　古川一明　吉田雅之　大和幸生

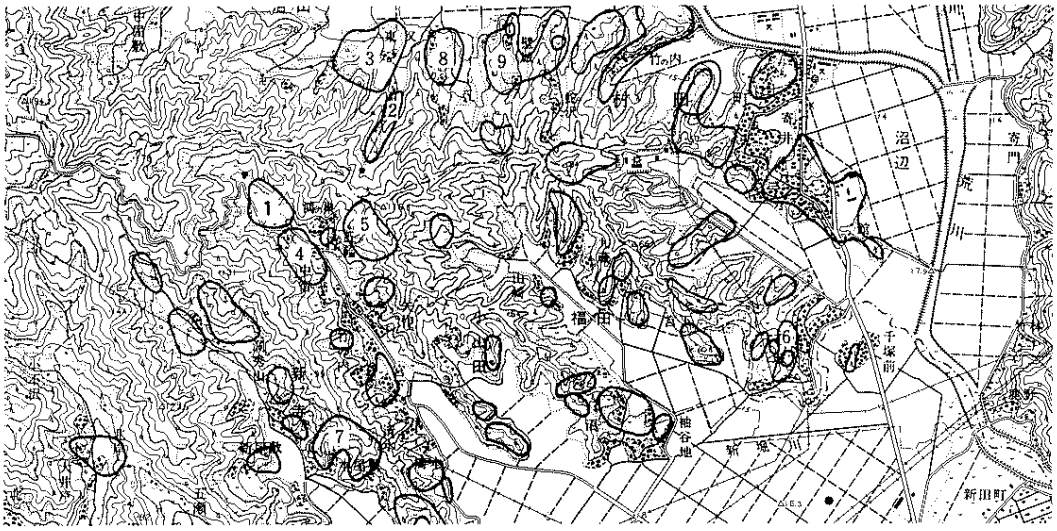
小林（こばやし）・稗柄（ひえがらい）遺跡

小林遺跡は大河原町小山田字小林に、稗柄遺跡は村田町沼田字稗柄に所在する。

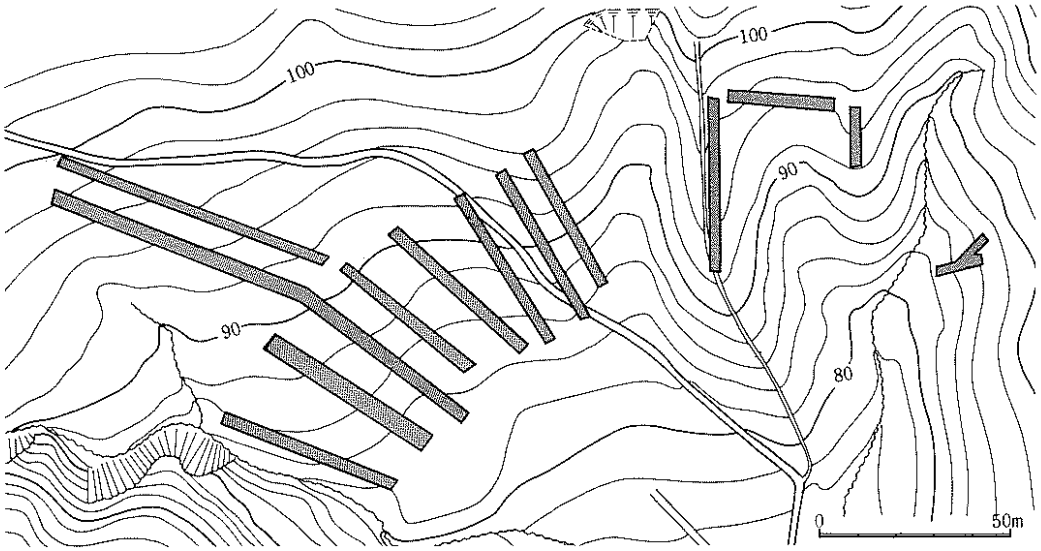
遺跡は高館丘陵から南東方に派生した愛宕山丘陵上にあり、東側に村田盆地、西側に円田盆地、南側には槻木低地が広がっている。この丘陵は大河原周辺では、槻木低地に向かって６つの舌状小丘陵となって延びており、この小丘陵の基部の谷頭に小林遺跡が、丘陵上に稗柄遺跡が立地している。また、これらの舌状小丘陵には縄文～古代までの様々の時代の遺跡の分布が数多くみられ、さらに丘陵端部付近には古墳、横穴墓なども多数認められている。

今回の調査は南仙台ゴルフクラブの造成に伴う確認調査で、ゴルフ場の造成工事による盛土範囲が小林遺跡の北西端、稗柄遺跡の南端まで及ぶかどうかを把握することを目的で行った。調査は工事対象地で遺構の存在が考えられる緩斜面については 3～5m幅のトレンチを任意に配置して遺構の検出を試みた。遺構は、表土を重機により除去し、その直下で認められる地山ローム面で行った。

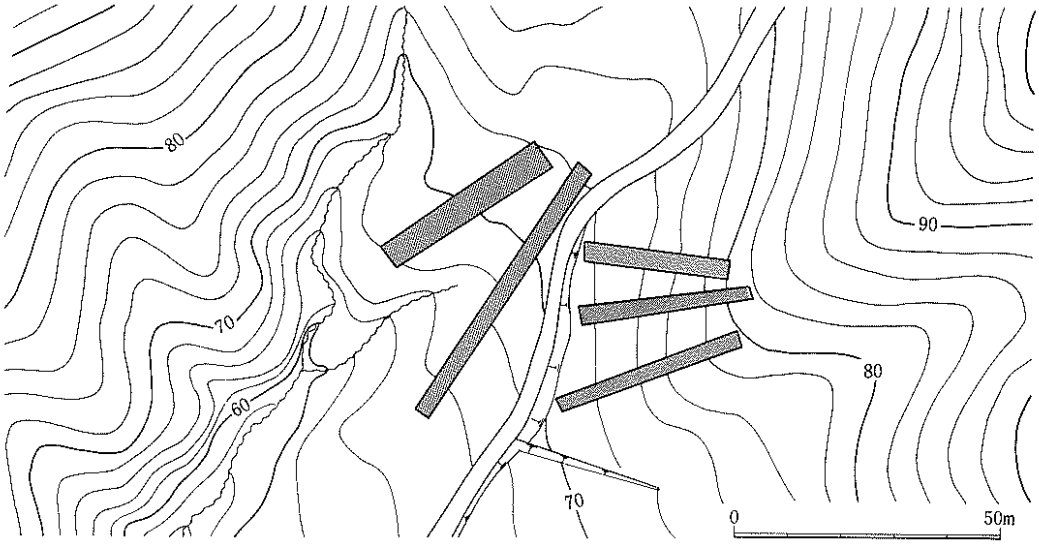
その結果、小林遺跡では縄文時代早期末頃と考えられる胎土に繊維を含む縄文・条痕土器、条痕・条痕土器の小破片が表土から数点認められたが、遺構等は検出されなかった。一方、稗柄遺跡では、遺構、遺物とも一切認められなかった。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	小林遺跡	縄文（中～晩）	4	岡Ｂ遺跡	弥生・古代	7	薬師横穴古墳群	古墳
2	稗柄遺跡	古代	5	小山田遺跡	縄文（後）	8	二斗内Ｂ遺跡	古代
3	見世前遺跡	縄文・弥生	6	千塚古墳群	古墳	9	元窪遺跡	縄文・弥生



第１図　小林遺跡トレンチ位置図



第２図　稗柄遺跡トレンチ位置図

鍛冶沢遺跡（かじさわいせき）

調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町曲竹字鍛冶沢

調査面積：約 500 ㎡　遺跡番号（02020）

調査期間：1989 年 8 月 22～25 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：蔵王町教育委員会

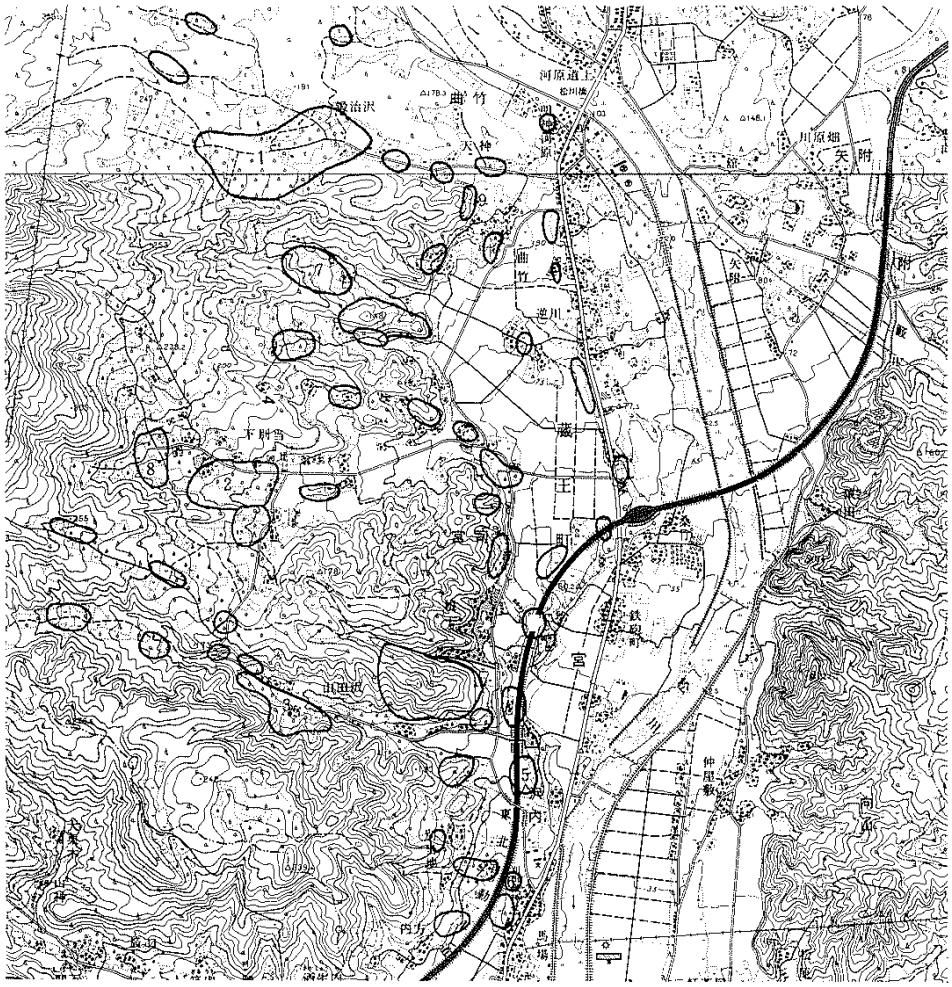
調　査　員：白鳥良一　　菊地逸夫　　古川一明　　吉田雅之　　大和幸生

鍛冶沢遺跡（かじさわいせき）

1．遺跡の立地と周辺の遺跡

鍛冶沢遺跡は蔵王町役場の南西約 2km、青麻山の東麓にひろがる丘陵上に位置している。遺跡は沢によって挟まれた標高 150m前後のテラス状の緩斜面上に立地しており、現在は果樹園や畑地となっている。

この青麻山から延びる丘陵は、標高 200mほどのなだらかな裾野状を呈し、森の川や黄金沢

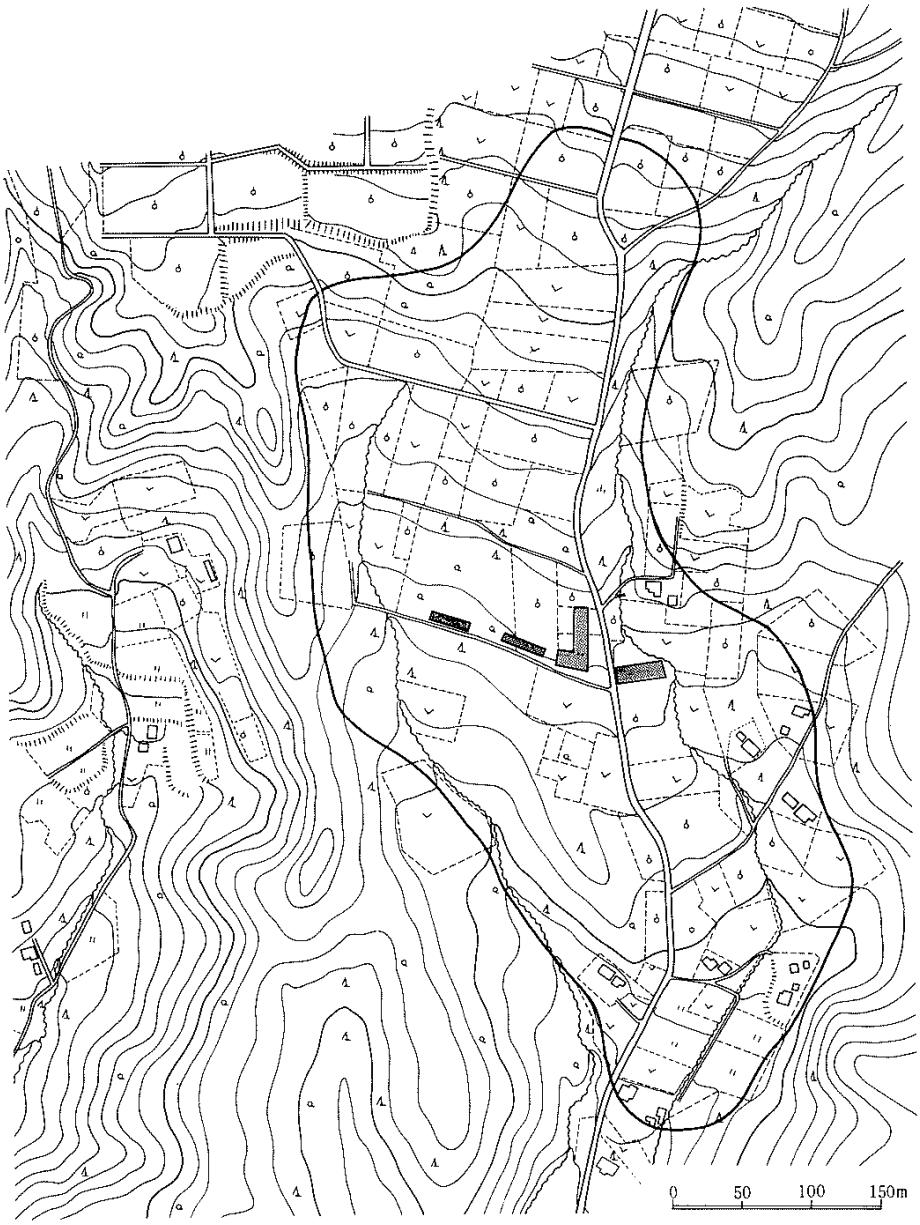


No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	鍛冶沢遺跡	縄文早～晩・弥生	4	二屋敷遺跡	縄文早～晩・平安	7	淡島山遺跡	縄文後期
2	下別当遺跡	縄文（中～晩）	5	長峰遺跡	縄文早・前・弥生	8	願行寺遺跡	縄文早・中・弥生
3	山田沢遺跡	縄文（後・晩）	6	明神裏遺跡	縄文早・前・弥生	9	清水遺跡	弥生（桝形囲）

第１図　遺跡の位置

川等の小河川によって解析され樹枝状の小丘陵となっており、端部は南流する松川によって形成された河岸段丘が見られる。

この青麻山東麓の地域は各時代にわたる遺跡が数多く分布し、町内でも遺跡の分布密度の濃い所である。その中で本遺跡は明治 37 年に佐藤伝蔵が東京人類学雑誌の「蔵王火山付近の石器時代の遺跡」の中で「・松崎喜蔵所有の畑には遺物豊富なる石器時代遺跡あり。土器は亀ヶ岡

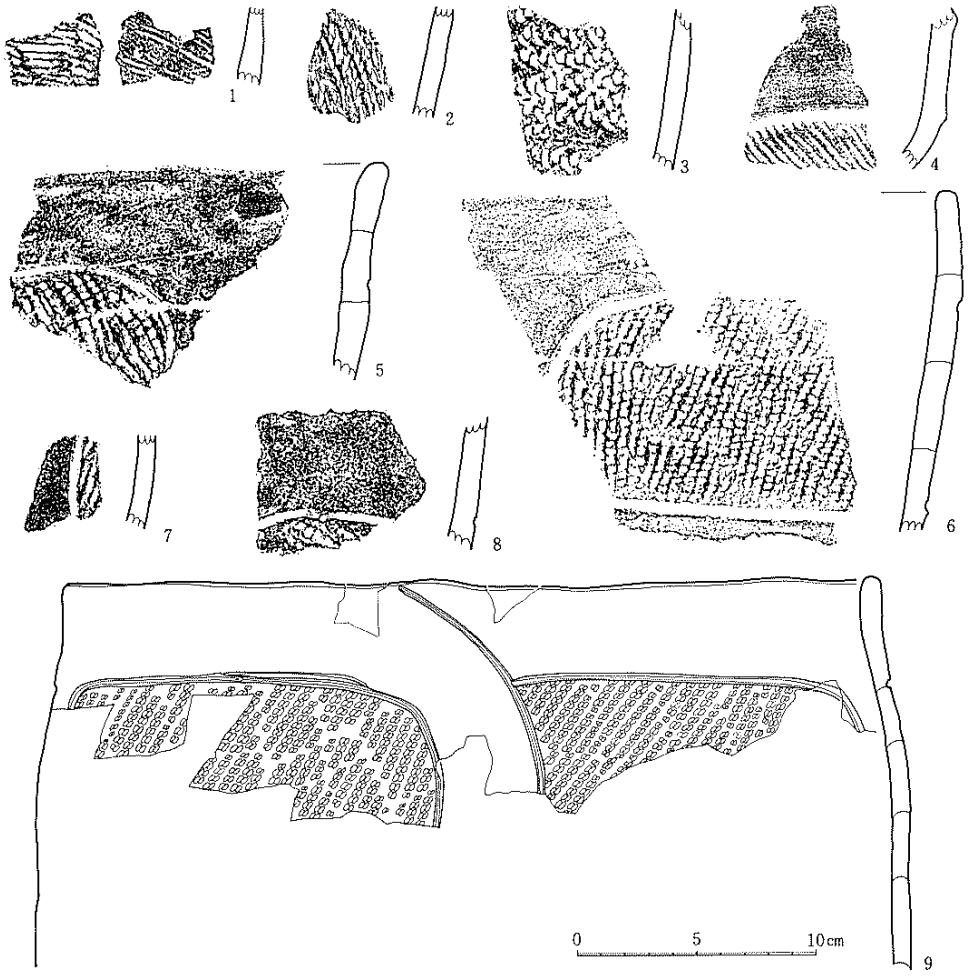


第 2 図　調査区位置図

式の者多く云々」と紹介されているように学史的にも注目された遺跡である。また、昭和 44 年に遺跡の南東部(標柱の東側の水田)が開田されるのに伴い志間泰治氏らによって発掘調査され縄文晩期末の良好な包含層が確認され、一部の資料は蔵王町史などに紹介されている。周辺の遺跡には丘陵上で同様の立地をする下別当遺跡、山田沢遺跡などの縄文時代後・晩期の大規模な遺跡や河岸段丘上には縄文時代早期の標識遺跡である明神裏遺跡や中、後期の住居が多数検出された二屋敷遺跡が、丘陵端部と段丘面との境界近くには弥生時代の清水遺跡がある。

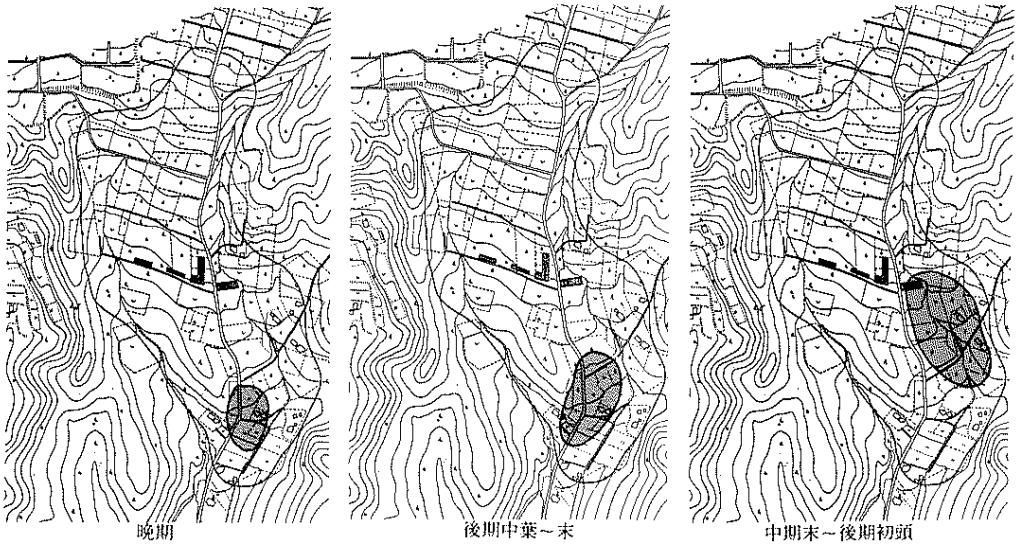
2．調査の経過と結果

今回の調査は基幹農道白石ー川崎線の計画に伴い、道路が遺跡に係わる影響を最少にとどめるように路線決定行うための遺構確認調査である。



第３図　出土遺物

調査は路線の予定されている地点について任意に調査区を設定し、重機により表土を除去し、遺構の確認作業を行った。調査した地点は遺跡の西寄りの部分で、比較的遺物の散布の少ない所である。調査の結果、すべての調査区の表土から若干の縄文土器が認められたが、遺構は全く検出されなかった。出土遺物については、次のとおりである。①～③は深鉢の体部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。①は外面に0段多条の縄文を施文し、内面は条痕文の、いわゆる縄文条痕土器で、②は条間の狭い撚糸文を施文した土器でいずれも、縄文早期末と考えられる。③は羽状縄文の結束の部分を回転したもので、縄文前期初頭のものと考えられる。④は浅鉢の体部の、⑤～⑨は深鉢で⑦は体部のそれ以外は口縁部の破片である。④～⑨は全体的なモチーフについては不明であるが、沈線や隆帯④によって区画文を作り、その中に縄文を充填するといった施文方法がみられる土器である。これらと同様の特徴をもつ土器には七ヶ宿町大梁川遺跡第1層出土土器(相原・加藤：1988)や白石市菅生田遺跡出土土器(丹羽他：1982)があり、縄文中期大木10式の新しい段階に位置付けられると考えられる。



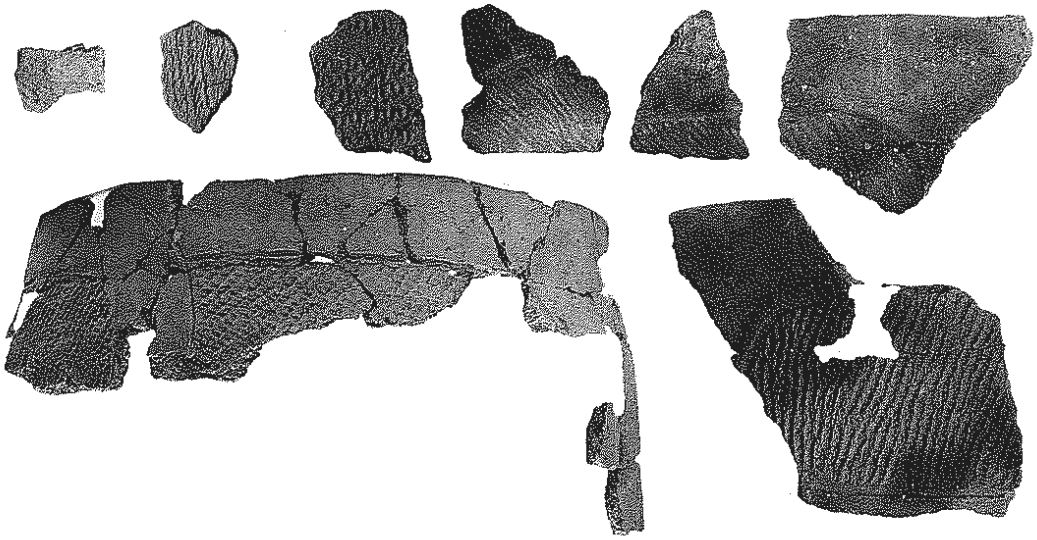
第4図　遺物の時期別分布状況

3．まとめ

○今回の調査では、縄文中期の遺物の他に早期、前期の遺物も若干出土した。

○今回の調査区は遺跡の西寄りの部分で、遺跡の主体とされる後・晩期の遺物が多量に散布する地点からは離れており、遺構の分布も希薄であると考えられる。なお、各時期の遺物の散

布状況は図４のとおりである。



鍛冶沢遺跡出土遺物